

---

# 恋の基準値

みゆ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋の基準値

### 【Nコード】

N1707E

### 【作者名】

みゆ

### 【あらすじ】

恋ってどんなもの？好きという気持ちに違いがあるの？今までお兄ちゃんに感じていた“好き”とは違う気持ち。これが恋なんだ…。中学生の沙和とその友達の、恋と友情を書いた青春ラブストーリーです。

## 進路調査

「どこにするか決めた？」

明日香がホームルームで配られた用紙をヒラヒラさせながら、瑞穂と私の所に寄ってきた。

「私は多分一高かな。」

瑞穂が答える。

「そっか。瑞穂頭いいもんね。」

明日香はため息をついて、近くの席に座った。

冬休みが終わってすぐのホームルームで配られた『進路調査』の用紙。中学二年の私達にとって受験なんてまだ一年程先の話。きつと昨日までは、ほとんどの人が進路のことなんて考えていなかったと思う。

それにもかかわらず、教室の中はその話で持ちきりになっていた。仲のいい友達同士で同じ高校に行こうだの、あの高校はサッカーが強いからそこにするだのといった会話が、教室のあちらこちらから聞こえてくる。

進路調査の用紙を見ながら周りの会話に耳を傾けていた私に、明日香が声を掛けてきた。

「沙和は？」

「え、私？私は…」

「そんなのもう解ってるじゃん。」

瑞穂が笑いながら私の言葉を遮った。

明日香は瑞穂と私を交互に見て、一瞬考えてから

「ああ、そっか！」

と、大きな声を上げた。

「東高だよね？」

「そうそう。大好きなお兄ちゃんのいる東高。」

「そうだよねえ。」

二人は笑いながら私の志望校に納得し合っている。

「ちよっと、私まだ何も言っていないのに。どうして勝手に決めつけるの？」

膨れながら言った私の言葉に、

「じゃあ違うの？」

と、瑞穂が“絶対そうでしょ”と言わんばかりの確信しきった表情をする。思わず“うっ”と口籠もって、それからちよっと視線を逸らして私はモゴモゴと答えた。

「…まあ、そうしようかな、とは思ったけど。」

「ほらね。」

瑞穂がニヤニヤしながら私を見る。

「沙和はブラコンだもんね。」

明日香もニヤニヤしながら私を見た。

「ブラコンじゃないもん！」

確かにお兄ちゃんのこととは好きだけど、それって普通だよ。兄妹の仲が良くて何が悪いの？

でも二人にしてみれば、私のお兄ちゃんが好きな度合いは普通じゃないらしく、幾度もこうしてからかわれている。明日香も瑞穂もお兄ちゃんがないから解らないだけなんだよ、きつと。

「そう言う明日香はどうなの？」

自分に向いた、からかうような視線を逸らそうと、私は最初にごの進路の話を持ち出した明日香に話を振った。

「えー…。」

明日香は困ったような表情をして私を見た。

「…まだ解らないよ。だから聞いたんじゃない。」

## 好きの違い

ふと気が付くと、放課後の教室の中は、人が疎らになっていた。みんな帰る支度をして、どんどん教室から出ていつている。

「そろそろ行こうか。」

明日香の声に頷き、私は立ち上がりコートに羽織った。

「瑞穂は？」

「今日は塾ないから、私も一緒に行くよ。」

部活をしていない私達が放課後決まって行く場所。それは校庭の鉄棒の近くの、野球部が部活を行なっている場所。

野球部には、明日香の彼氏の田中君が所属していて、私はそれを応援する明日香に付き合っ、いつも校庭の隅の決まった場所に行っていた。今日は瑞穂も一緒だから、三人でその場所に向かう。

途中、ジャージやユニフォームを着た人達とすれ違っ。きつとこれから部活なんだろう。

あんな格好で寒くないのかなあ…。

私達はコートとマフラーと手袋という重装備で校庭に出た。

いつもの場所に着くと、明日香が田中君を見つけて手を振った。

田中君もそれに気が付いて、少しだけ手を上げてから部員が集まっている所に走って行った。

地面は雪の所為でぬかるんでいて座れないので、私達は鉄棒に凭れ掛かって野球部の練習を見る。

しばらく三人共無言でいたけれど、ふと瑞穂が明日香を見て口を開いた。

「…さっきの話だけとさあ…」

「え、さっきのって？」

明日香は何の事を言われているのか解らなかつたみたいで、聞き返した。

「進路の話。」

「…ああ、何？」

「明日香はやっぱり田中君と一緒に高校に行くの？」

明日香がなんて答えるのか気になって、私も顔だけ横に向けて明日香を見た。

明日香はちよつと照れ臭そうにへへつと笑って、

「うーん、そうしたいなあ…とは思ってるんだけどね。」

と言って、田中君がいる方向を見た。

「やっぱりそうか。」

瑞穂はからかう様な目付きで明日香を見てる。私も笑って

「やっぱりそうだよ。明日香の気持ち解るな。」  
と頷いた。

「何で沙和が解るのよ？」

怪訝そうに尋ねてくる瑞穂。

「え、解るよ。私だってそうだもん。」

そう答えると、瑞穂がため息をついた。

「あのねえ、あんたが言ってるのは、お兄ちゃんのことでしょう。」

明日香とは全然違うじゃない。」

「どうして？一緒だよ。」

「違うの！」

私の言葉に、瑞穂と明日香が口を揃えて反論した。私は納得い  
かなくて、ほっぺを膨らまして二人を睨む。二人は顔を見合わせて  
ため息をついてる。

「仕方ないよ。沙和はまだおこちゃまだから。」

「そうだね。」

呆れたように笑う二人。

「おこちゃまじゃないよ！…じゃあ聞くけど、私の“好き”と明日  
香の“好き”と、どう違うの？」

「まず他人であること！これ重要。」

間髪入れずに瑞穂が答えて、明日香はそれにウンウンと頷く。私

はちよつと尻込みしたけど、負けじと反論。

「そ、そんなの関係ないよ！他人だろうが身内だろうが、好きって  
いう気持ちは一緒だよ。」

「だから、違うの！」

またしても瑞穂に反論され、上目遣いで睨みながらも押し黙る。

そんな私を瑞穂は呆れた顔で見る。

「じゃあ聞くけど、沙和は、お兄ちゃんと手を繋いだりデートした  
いって思うの？」

「思うよ。」

「もおっ！じゃあさっ、」 ムキになったのか、瑞穂の声が大きく  
なった。

「お兄ちゃんとキスしたりエッチしたりできる訳っ？！」

「ちょ…ちよつと、瑞穂っ。」

さっきまで面白そうに私達のやりとりを聞いていた明日香が、慌  
てたように瑞穂を小声で制した。

「声大きいよ。聞こえてる。」

「え…？」

顔の向きはそのままに視線だけそろそろとグラウンドに向けると、  
近くにいた野球部員達が私達を横目でじろじろ見ていた。瑞穂の顔  
が一気に赤くなる。

「もう恥ずかしいじゃん！」

私も恐らく真っ赤になっているだろうほっぺを両手で隠して、再  
び瑞穂を睨んだ。

「だ…だって、沙和があまりにも言い張るから…。」

瑞穂は明らかに動揺していたけど、冷静さを取り戻すようにコホ  
ンと咳払いして、私に言った。

「と…とにかく、そういうことで、明日香と沙和の好きは全然違っ  
の。解った？」

「う…うん。解った、多分…。」

「そ？なら良かった。…じゃあ私帰るから。」

其処にいるのが居たたまれなかったのか、瑞穂は私の返事を聞く  
と同時に、足早に校庭から立ち去った。

「ちよ…、待つてよ瑞穂。」

私と明日香も、急いで瑞穂の後を追いかけた。



## お兄ちゃんと 1

キッチンで夕食の仕度をしているお母さんを背にして、私はリビングのソファで、ぼんやりとテレビを眺めていた。

テレビに映っているのは、少し前にオンエアされていた恋愛ドラマの再放送。主演の女優さんが、切なそうに相手役の男優さんを見ている。

でもその映像は、私の頭の中には半分くらいしか入ってこない。あとの半分は、さっきの校庭での、瑞穂の言葉で覆われていた。

私と明日香の“好き”の違い…。

好きの対象が身内なのか他人なのかという面では、違いははっきりとしているけれど。  
でも。

正直“好き”という気持ちの違いに、どんな差があるのかわからない。“一緒にいて嬉しい”という気持ちは、明日香も私も変わらないと思う。じゃあ何が違うのか。

「ただいま。」

リビングの入口で声がした。お兄ちゃんが帰ってきたのだ。

「…お帰り。」

いつもなら嬉しくて、とびきりの笑顔でお兄ちゃんを迎える私だけど、今日はなんだかそんな気になれず、ぼんやりとしたまま言葉を発した。

お兄ちゃんはそんな私を気にもせず、バスケットシューズの入った袋をソファにボンと投げて、そのまま冷蔵庫を開けてオレンジジュースを手にする。

「腹減った。」

「もう少しで出来るから待ってなさい。」

キッチンからそんなお母さんとお兄ちゃんのやり取りが聞こえてくる。

お兄ちゃんはオレンジジュースのパックとグラスを持ってリビングに来ると、私の座っている場所とは逆のソファアの隅に腰を下ろした。そしてグラスにジュースを注いで一気に飲み干す。そんなお兄ちゃんの行動をやっぱりぼんやりと見ながら、私は小さくため息をついた。

「…なんだよ。」

いつもと違う視線に気付いたお兄ちゃんが、訝しげに私を見る。

「…別に何でもないよ。」

そう返事したものの、明らかにいつもとは違うことはバレバレだろう。

「気になるから言えよ。」

そう言うお兄ちゃんから一度視線を逸らして下を向いて、少し考えてから、思い切って切り出した。

「お兄ちゃんは、私のこと…好き？」

「は？」

何を言うんだって感じで眉をひそめたけど、でも

「まあ、そうなんじゃねえの？」

と答えてくれる辺り、やっぱりお兄ちゃんっていいなと思う。安心して、さっきまで無表情だった顔が笑顔になる。

「私もお兄ちゃんのこと大好きだよ。」

「あっそ。」

お兄ちゃんはぶっきらぼうに答えて、二杯目となるジュースを飲み始めた。

ふとテレビに視線を移すと、ドラマの中で男優さんと女優さんがキスしているところだった。そのシーンを見て、再び瑞穂に言われたことを思い出す。

“お兄ちゃんとキスとかエッチとかしたいと思うの？”

エッチは勿論、キスだつて、マンガや雑誌やテレビで見るくらいの知識しかない。そんな私に“キスしたいの？”と問われても、解るはずなんか無い。

じゃあ、お兄ちゃんは？

お兄ちゃんならもう高校生だし、キスも、もしかしたらエッチもしたことあるかもしれない。

経験済みかもしれないその行為を、私と出来るんだらうか。

「ねえ、お兄ちゃん…。」  
「ん？」

お兄ちゃんはジュースを飲んでいる姿勢のまま、目線だけ私に向けて返事した。

「あのさ…。」

問いかけてから急に恥ずかしくなつて口籠もる。その間にお兄ちゃんは三杯目のジュースに突入。

よし、聞くぞ！私は恥ずかしい気持ちをなんとか押さえるように、心の中で気合いを入れて、体ごとお兄ちゃんの方に向いた。

「お兄ちゃんは、私とキスとか…、したいって思う？」

その瞬間、お兄ちゃんは口からジュースを吹き出し、ゴホゴホと嘔始めた。私は慌てて近くに置いてあつたティッシュをボックスから何枚か抜き出して、お兄ちゃんが吐き出したジュースを拭く。

「お兄ちゃん、汚いよ。」

「…あのなあ。」

お兄ちゃんはまだ嘔ながら、私を睨んだ。

「お前のせいだろ！」

「何喧嘩してるの。」

お兄ちゃんの発した大きな声は、キッチンまで聞こえたようで、お母さんがこちらを振り向き怖い顔をする。

「け、喧嘩なんてしてないよ。」

慌てて答えた私の言葉を聞いて、お母さんは

「そう。ならいいけど。仲良くしてなさいよ。」  
とだけ言って、料理を再開した。

## お兄ちゃんと 2

お母さんが料理を再開したのを見届け再びお兄ちゃんを見ると、まだ苦しそうに咳込みながらお兄ちゃんも私を上目遣いで見ていた。その視線が睨んでいるように見えて、私は後退りするようにソファに凭れ掛かる。

「お前、何言ってるの？」

息も絶え絶えに、お兄ちゃんがお母さんに聞こえないように小声で問いかけてきた。

「何って…。」

答えるのを躊躇していると、

「ちよつと部屋に來い。」

と、お兄ちゃんが小声で命令してきた。

「夕飯出来たら呼んで。」とお母さんに告げ、私達はリビングを後にした。

「で、何なの？」

お兄ちゃんは部屋に入ってベッドにボンと座り、立ったままの私に聞いてきた。

「だから、お兄ちゃんは私と…。」

「それは聞いたから！」

私が言い終わる前に言葉を発して、お兄ちゃんがあ…とため息をつく。

「つか、何だつてそんなこと聞く訳？」

「それは…。」

私の頭の中で、校庭で瑞穂に言われた事が繰り返し聞こえてくる。「私がお兄ちゃんと、キスとか…エッチとか、出来るのって…。」

あまりに頭の中に響いたせいか、私は瑞穂が言ったそのままの台詞を、口に出していた。

「は？」

お兄ちゃんのその一声に我に返り、慌てて

「つて、瑞穂が言うからっ。」

と付け足した。

それを聞いた兄ちゃんは、額に手を当てて下を向いた。その顔が心なしか赤かったので照れているようにも見えただけ、視線を上げて私を見たその目が、明らかに怒っているような呆れているようなものだったので、私は思わず後退りした。

「…お前、どんな話してんだよ。」

「どんなって…。」

私は更に後退りする。

「私が言っただんじやなくて、瑞穂が…。」

「そんなこと出来る訳ねえだろ！」

お兄ちゃんの大きな声に、私の足が止まった。

「普通に考えて、あり得ねえだろ、そんな事。」

「…あり得ないの？」

少しの沈黙の後、私は妙に冷静にお兄ちゃんに聞いていた。

「…は？」

お兄ちゃんは、その言葉を聞いて驚いたような顔をして、暫く上目遣いのまま私を凝視していた。そして

「…もしかして、お前はあり得る訳…？」

と、恐る恐るといった感じで訊ねてきた。

「わ、わかんないよっ！」

そんな風に聞かれて思わずムキになってしまい、私は真っ赤な顔で大きな声を出した。

「そんなことしたことないんだから、分かる訳ないじゃん！だからお兄ちゃんに聞いたの！」

「…何で？」

お兄ちゃんがまた訝しげに私を見る。私は少し冷静になろうと大きく息を吸った。

「だって…、お兄ちゃんならそういうのしたことあるかもしれないから、分かるかなって思ったんだもん。」

それを聞いたお兄ちゃんの顔がみるみる赤くなる。そして、それを悟られまいとするかの様に、外方を向いた。

何かいけないこと言ったかな…と、少し不安になりながら、私は言葉を続けた。

「だからお兄ちゃんが“出来ない”って言ったから、やっぱりそうなのかって思ったの。」

「…あ、そ。」

お兄ちゃんは外方を向いたまま、ぶっきらぼうに答えた。それから「ていうか、そういう誤解されるような話あんまりするなよな。」と言った。

「そういうって？」

「だから、お前と俺が、とかいう話だよ。」

私は再び赤くなる。

「だからそれは、私が言ったんじゃないよ。」

「だったらちゃんと否定しろ。」

「…はあい。」

言う言葉が無くなってしまい、再び部屋に沈黙が訪れる。お兄ちゃんははまだ外方を向いたままだ。

もしかしてお兄ちゃん、怒ってるのかな…。急に不安になって、恐る恐るお兄ちゃんに問いかけた。

「…お兄ちゃん、怒ってるの？」

「…別に怒ってねえよ。」

「本当？」

「ああ。」

安心して笑みがこぼれる。

その時一階から

「ご飯できたよー。」

というお母さんの声が聞こえた。

「はい。」

そう私が返事すると、お兄ちゃんはベッドから立ち上がりドアの方に向かった。

それに付いていこうとして、ふと聞き忘れたことを思い出した。そういえば…。

「ねえ、お兄ちゃん。」

「ん？」

ドアを開ける一歩手前で、お兄ちゃんが振り返る。

「そういえばお兄ちゃんって、結局どっちななの？」

「何が？」

「キスとか、したことあるの？」

「そんなこと！お前に言う必要ねえだろ！」

お兄ちゃんは捨てるようにそう言って、ドアを開け足早に階段を降りていった。

私はそれを見て、今度こそ本当にお兄ちゃんを怒らせちゃったかなど不安になりながら、お兄ちゃんの後についてキッチンに向かった。



## 野球ボール

「昨日、お兄ちゃんに怒られた。」

放課後、いつものように校庭に来た私は、隣にいた明日香に話かけた。瑞穂は塾があるからと授業が終わったら早々に帰って行ったので、今日は二人だけだ。

「なんで？」

野球部をじっと見ていた明日香が、私の言葉に反応してこっちを向いた。

私は少し赤くなりながら、俯き加減に話を続けた。

「昨日の…、瑞穂が言ったことお兄ちゃんに話したの。そしたら…。」

「やだ〜！」

明日香がいきなり大きな声を出したので、びっくりして顔を上げると、明日香もまた赤い顔をして私をじっと見ていた。

「あの話したの?! やめてよ。恥ずかしいじゃん!」

「どうして?」

「どうしてって…、そんな話してるんだって思われちゃうんだよ。」

「恥ずかしいよ。」

いや思われるもなにも実際そういう話をしていた訳だし…。でもそう思われるだけで恥ずかしいんだ。

確かに私もお兄ちゃんに話す時、ちよっと恥ずかしくて躊躇ったけど…。」

「ごめんね。」

明日香の気持ちがちよっと分かったので、素直に謝ると、

「もういいよ。言っちゃったものはしょうがないし。」

という返事が返ってきたのでほっとした。

「それに、言ったのは瑞穂だしね。」

「そうだね。」

責任を瑞穂に押し付けて、顔を見合わせてへへっと笑い、私達は再び野球部の練習へと目を移した。

「で？」

「え？」

程なくして、明日香が疑問の声を発した。

さっきの話はもう終わったと思っていたので、何を問われているのか分からずに同じように疑問の声を発すると、明日香が少し言わずらそうに

「だからさ、キスとか、その…エッチとかって話したんでしょ？沙和のお兄ちゃん、なんて言ったの？」

と、小さな声で聞いてきた。

「え…。」

治まりかけていた恥ずかしさのメーターがまた上昇する。再び顔が熱くなる。

黙ったままの私を見て

「言い始めたのは沙和なんだから、教えてくれたっていいじゃん。」  
と、明日香がキラキラした目をして急かしてくる。

「うん…。」

確かに私が言いだしたんだから答えなきゃいけないかな…と思い、私は口を開いた。

「あり得ないだろって言われた。」

「そっか。そりゃあそうだよね。」

それを聞いて、明日香はちよつとつまらなそうな顔になった。

「…何、その顔。」

「えー、だってさ、“出来る”って言われたら面白いじゃん。」

「もう！面白がらないですよ！出来る訳ないじゃん！」

あれ？

ふと自分の言ったことに疑問を感じる。

私今、“出来る訳ない”って言ったよね…。

昨日お兄ちゃんと話した時は、そんな経験ないから出来るかどうかなんて分からないって思ってたのに…。何で“出来る訳ない”って言ったんだらう…。

そつえば昨日お兄ちゃんに“ちゃんと否定しろ”って言われたっけ。そのせいか…。

「どうしたの？」

急に黙り込んだ私を、明日香が不思議そうに覗き込んだ。

「うっん、なんでもない…」

「危ない!!」

私の言葉が終わるか終わらないかという時、グラウンドの方から危険を知らせる叫び声のような声が聞こえた。その方向に目をやると、私達の方に凄いスピードで飛んでくるボールが目に入った。

「キャッ!!」

当たるといふ恐怖を感じて、私達はぎゅっと目を閉じ寄り添って身を屈めた。

その直後、前方でパンツという何かが弾けるような音が聞こえた。

あれ？ボール、飛んで来ない…？

暫くしてもボールがぶつかる気配がないので、私は恐る恐る目を開けた。

目の前には、ほっとしたような野球部員数人の姿と、ちらっと私達を見て走り去る一人の男子の姿があった。

「びっくりしたあ！沙和、大丈夫だった？」

同じように目を開いた明日香が、私に問い掛けてくる。

「うん…。大丈夫。」

私は走り去る男子の後ろ姿を目で追ったまま、明日香に返事をした。

## 昼休み

「瑞穂、沙和ってばね、一昨日のことお兄ちゃんに話したんだって。」

「昼休み。」

食事を終えた生徒達がそれぞれ仲の良い人とそれぞれがしたいことをする、授業と授業の間の一番長い休み時間。

私達三人も、いつものように教室の隅に集まって話をし出したのだけれど、明日香がその話題を出したので、ちよつと居心地が悪くなりその場から離れたくなった。だってそんなこと瑞穂が知ったら、絶対怒るに決まってるから。

「何？一昨日のことって？」

瑞穂が不思議そうな顔をする。

忘れているのか、それともさすがに私がお兄ちゃんにそんな話はないだろうと思っっているのかは分からないけれど、このままこの話題が終わってしまうえば瑞穂に怒られなくて済むと思った私は、明日香をジロツと睨んで

「何でもないよ、ね、明日香。」

と、これ以上は言うなという気持ちを込めて言った。

でも、明日香にはその気持ちも睨んだことも伝わらなかったみたいで、

「だから、ほら、校庭で瑞穂が言ったでしょ。お兄ちゃんとキスとか…出来るのかって。あの話。」  
と告げてしまった。

何で言っちゃうの〜！と私が言うよりも早く、瑞穂が赤い顔を私を睨む。

「沙和〜！何でそんな事言っちゃうの？」

「う…ごめんなさい〜。」

瑞穂の睨みがあまりにも怖かったので、私は少し怯えながら瑞穂

に謝る。

「あのねえ、そんな話されたら、私達どんな目で見られるか分からないんだよ？もう沙和の家に行けないじゃん。」

「だから、ごめんねってば…。」

「まあまあ。」

私と瑞穂のやりとりを聞いていた明日香が仲裁に入る。

そもそも明日香がそんな話題を振らなければ瑞穂に怒られることもなかったのに…と、再び明日香を睨む。すると、今度は明日香も気付いた様で、私を見て、笑いながらも小さな声で

「ごめん。」

と言った後、

「まあ沙和が言っちゃったのはしょうがないとしてさ。それよりも、沙和と沙和のお兄ちゃんが、どんな話したのか聞きたくない？」と、瑞穂に提案した。

「ちよつと、明日香!？」

“ごめん” って言ったくせに、全然悪いと思ってないよ〜!

「だって、昨日詳しく聞けなかったからさ。」

と、明日香はいたずらっぽく笑って私を見る。

「確かに。」

瑞穂もうつらうつらと頷いて、私を見た。

「話したらお兄ちゃんに言ったこと許してあげる。」

そんな事言われたら、話すしかないじゃん…。

私は唇を尖らせた。

「それで、何話したの?」

明日香が身を乗り出して私に尋ねた。

私は憎しみを込めた目で明日香を見ながら

「だからっ、昨日も言ったけど、“あり得ない” って言われたんだってば!」

と、少しムキになって言った。

それを聞いた瑞穂が

「何？あり得ないって？」と明日香に尋ねて、明日香が

「沙和とお兄ちゃんが、そういうことをする関係になることが、だつて。」

と答えた。

「そりゃそうでしょ。」

瑞穂が“当たり前”といったような顔をする。

「そうだけど。でもさ、“出来る”って言われたら面白くない？」

「まあ面白いけど、そこまでいったらヤバイでしょ。」

二人が私をそっちのけにして笑っているのを見て、私は顔を膨らませる。

大体瑞穂があんな事言った所為でこんな事になったのに、面白がりすぎだよっ！

「ていうかさ、」

瑞穂が再び私を見た。

「そもそも何で、そんな話お兄ちゃんにした訳？」

再び投げ掛けられた疑問に、私は口籠もって

「それは…。」

と、モゴモゴと声を出した。

「何？」

二人が興味津々といった目で、私を見つめる。

「だからそれは…。お兄ちゃんなら分かるかなって思ったから…。」

「え？」

「…お兄ちゃんなら、そういう経験あるかもしれないから、…だからそういう事を私と出来るのかって、分かるかなって思ったんだもん。」

それを聞いた二人は、一瞬きよとした顔になって、次の瞬間爆笑し始めた。

「やだ、沙和、超うける〜！」

「経験あってもなくても、普通出来ないって分かるってば〜。」

二人は笑い続ける。

「沙和ってば、何も分かってないよね。」

「本当。やっぱりおこちゃまだよね。」

大爆笑の二人の横で、私は真っ赤になって顔をプウツと膨らませた。

## 廊下で

お昼の休み時間はあっという間に過ぎていって、残り時間も少なくなっていた。疎らだったクラスメイト達は、更に疎らになっている。

「そういえば、次、音楽じゃなかった？」

「そうじゃん！そろそろ行かないとやばいよ。」

私達は急いで準備をして、廊下に出た。

授業が始まるまで多少時間があるので、廊下はまだ生徒達で賑わっていた。連れ立ってトイレに行こうと急ぐ女子や窓際で楽しそうに話している男子、それから私達と同じように移動教室に向かう人達。私達はその間を抜けて、ちょっと離れた音楽室へと急いだ。

私の少し前を瑞穂と明日香が早足で歩き、私はそれを小走りに追う。移動教室の時は、いつも決まってこんな感じ。

ふと瑞穂が足を遅めて、私に並んだ。いつもなら『遅いよ』と私を急かす瑞穂がこんな行動をするのは珍しい。私は明日香の後を必死で追いながら瑞穂の顔を見た。

瑞穂は私の隣に並んではいるものの私を見る訳ではなく、かといって進行方向を見ている訳でもなくて、何だかそわそわした感じで視線を泳がせている。

「どうかしたの？」

不思議に思っただけで問いただけると、瑞穂は視線を逸らしたまま私に近寄って、小さな声で話し掛けてきた。

「あの子…、沙和のお兄ちゃんて高一だったよね？」

「そうだよ。」

私の返事を聞いて、瑞穂が私の耳元に更に顔を近付ける。

「でさ、さっきの話なんだけど…、お兄ちゃん、何て言ってた？」

「さっきのって…。」



瑞穂が言っている“さっきの”っていうのは、私がお兄ちゃんに話した…というさっきまで教室でしていた話だということは分かる。でもあの時、私がお兄ちゃんに何て言われたか瑞穂はもう聞いてるし、それを聞いて笑ってたし…。

瑞穂は、私は何を聞かれているのかを解っていないことを察したようで、小さくため息をついた。それから今度は少し赤い顔をして、私の目をじっと見てきた。

「な、何？」

その目が何だか怒っているように見えて、私は瑞穂から離れるように足を早めた。けれど、瑞穂はそれを逃がさないとするかの様に私の手を掴んで、そしてぴったりと私にくっついた。

「何〜！？その話ならさっきしたじゃん！」

びくびくしながらそう言うつと

「そうじゃなくてっ。」

と瑞穂は大きな声を出して、そして更に私に顔を近付けてボソツと言った。

「そうじゃなくてさ…、その…、沙和、お兄ちゃんにそういう経験あるか聞いたんじゃないの？お兄ちゃん、どうだって言ってた？」

「そういう経験って…。」

それが私とお兄ちゃんが…ってことではないのは、教室でしていた会話からも理解できる。…とすると瑞穂が聞きたいのは、お兄ちゃんか他の女の人とエッチな経験があるかという事…？

「何でそんな事聞くの！？」

確かにあの時お兄ちゃんに聞いたけど（教えてくれなかったけど）、家族のそんな話をするのは、さすがに相手が友達とはいえども恥ずかしいよ！

「何でって…。」

「何二人で話してるの？」

瑞穂が赤い顔をして何か言いかけたその時、明日香が自分だけ会話に入っていないとつまらないといった風に、私達の間に入って入

ってきた。

それを見た瑞穂が何故か

「何でもないよ！ね、沙和？」

と、慌てたように私に同意を求める。

「え、う…うん。何でもないよ。」

「何よ？ずるい！私にも教えてよ！」

「本当に何でもないって。」

明日香に“何でもない”を繰り返す瑞穂。その横で、私はお兄ちゃんの“そういう経験があるか”という話をしなくて済んだことにほっとしていた。

それにしても、瑞穂がそんな話をしてくるなんて珍しい。そういう話を面白がってしてくるのは大抵明日香で、いつも瑞穂はその話に乗ってくるって感じなのに。というか、さっきの瑞穂の話方、面白がってるって感じじゃなかったような…。

「あー！」

いきなり明日香が大きな声を上げた。

「わあ！何！？」

その声にびつくりして、私達は反射的に明日香を見た。

「何?!どうしたの?」

「高瀬君だ。」

明日香は瑞穂と私に目もくれずに、私達の後方に向かって手を振り始めた。

「高瀬君！」

「誰？高瀬君って。」

「さあ？」

瑞穂と私は初めて聞くその名前に首をかしげて、明日香の視線の先を辿った。すると明日香に呼ばれて振り向く、男子の姿が目に入

った。

「…あれ？」

あの人の顔、何か見たことある様な気がする…。

高瀬君と呼ばれたその人は、何だか不機嫌そうな顔で明日香を見ていた。

明日香はそんな彼の表情はお構い無しに、大きな声で彼に話掛けた。

「昨日はありがとう〜！」

「何？昨日何かあったの？」

瑞穂が不思議そうに明日香を見る。私は何処かで見ることがあるはずの彼の顔をじっと見つめて、必死で誰だったか思い出そうとした。

高瀬君は明日香のお礼の言葉を聞いて、不機嫌そうな顔のまま軽く頭を下げると、すぐに背を向けて去って行った。

「うわあ、何か感じ悪いね。」

瑞穂が呟く。

「明日香、あの人に何かお礼言うようなことされたの？」

「うん。昨日野球部見てた時に、ボールが飛んできて私達に当たりそうになったんだけど、高瀬君がボールを取ってくれたんだよ。ね、沙和。」

「あ、そうか！あの時の！」

明日香の言葉を聞いて、私はようやく彼が誰だったのか思い出した。

「“そうか”って…。沙和、覚えてなかったの？」

「え、だって、あの時顔見たの一瞬だったし…。」

でも高瀬君の後ろ姿は、野球部のユニフォームは着ていないけど、確かにあの時の彼と同じ背筋が真っ直ぐに伸びた後ろ姿だ。

「ていうか、こんなことしてる暇ないよ！授業はじまっちゃっ。」「はっとしたように瑞穂が言った。

「そうじゃん！急がなきゃ！」

明日香が走り始めた。

「ほら！沙和も急いで。」

「うん。」

私はもう一度振り向いて、高瀬君の後ろ姿を見た。そして瑞穂に手を引かれながら音楽室へと走った。

## 女達の戦場

「今度の日曜日、買い物行かない？」

休み時間、教室の隅でいつもの様に三人で話していた時、明日香が誘いの言葉を掛けてきた。

「私はいいよ。瑞穂は？」

「うん、私も大丈夫。」

「良かった。」

二人の了承の言葉を聞いて、明日香がすごく嬉しそうな顔をした。何か相当買いたい物があるんだろうな。

「明日香、何買いたいの？」

「そんなの決まってるじゃん。チョココレートだよ。」

「チョココレート？…あ、そうか。もうすぐバレンタインデーだもんね。」

二月。女子も男子もソワソワするイベントがやってくる。好きな男子がいる女子は勿論の事、そうでない女子も『義理チョコだけどあげたほうがいいのかなあ』なんて、何だか楽しそうに話している。男子もチョココレートが欲しいらしくて普段は見せない優しさを見せたり、『チョココレートちょうだい』って単刀直入に言ってみたり。とにかく教室中が浮き足立ってくる、そんな時期になっていた。

「沙和は買わないの？」

「うん、私はいつもお母さんと一緒に作ってるから、今年もそうすると思う。」

「そっか。そういうえば去年、沙和が作ったチョココレート食べたよね。」

「うん。今年も持って来るね。」

「本当？楽しみにしてる。…え、でも、買わないんなら一緒に行ってもつまらないよね？」

「そんな事ないよ。見てるだけで面白いもん。」  
「そうなのだ。この時期のチョコレート売り場は、見てるだけで本  
当に楽しい。」

普段は売っていない様な美味しそうなチョコレートが沢山並んでい  
て、あげる相手がいなくても思わず買ってしまいたくなる。いつも  
お母さんと手作りチョコレートの材料を買いに行くけど、必ず一、二個自  
分のチョコをねだって買ってもらっている。今年はせっかく明日香  
達と行くんだし、自分のおこずかいで買おうかな。

「瑞穂はどうなの？」

「え…、うん。私も見るだけだけど、付き合おうよ。」

日曜日。

明日香が指定したのは、割りと有名なデパート。

私達位の子から大人の人まで、大勢の女の人がチョコレート売り  
場に集まっていた。

「…凄いな。」

あまりの人の多さに圧倒される。

「バレンタイン、もうすぐだから。」

冷静に瑞穂が答える。

「よし、行ってくる。」

明日香が気合いを入れて人混みの中に入って行く。

「頑張ってるね。」

私達はそんな彼女を、手を振って送り出した。

暫く瑞穂と私はその場に佇んでいた。人の凄さもそうだけど、人  
を押し退け自分の目当ての品物を奪うように手に入れている、まる  
で戦場のような女の人達の群れに入っていく勇気がなかった。

「…どうする？」

美味しそうなチョコレートを目の前にしてその場に入って行けな  
い事にジレンマを感じながら、私は瑞穂に尋ねた。

「うん…、どうしようか。」

流石に瑞穂も尻込みしているようだ。

「でも沙和、自分用に買いたいんでしょ？」

「そうなんだけど……。」

「……頑張つて、行こうか。」

「……そうだね。」

私達は明日香と同じように気合いを入れて、人混みの中に突入した。

突入したのはいいけど、中々チョコレートに近付くことが出来ない。必死でショーケースに寄ろうとしても、周りに押し出されてしまいもみくちゃにされる。

……無理かも。そう思い元いた場所に帰ろうとしても、売り場に突進してくる人の群れに押され、なかなかたどり着くことが出来ない。なんとか戻れたときには、髪はぐちゃぐちゃになり、はあはあと息切れしていた。

呼吸を整えて前を見ると、既に瑞穂はその場に戻っていた。手には高そうなチョコレートブランドの紙袋を持っている。

「瑞穂、チョコ買ったんだ。」

「う、うん。」

何故か瑞穂は目を泳がせ、紙袋を後ろに隠した。

「いいなあ。私なんて近寄ることも出来なかったよ。」

はあ、とため息をついて、再び瑞穂が持っている紙袋に目を移した。

「ねえ、それ、私にもちょうだい。」

「駄目に決まってるでしょ！」

少しムキになったように、瑞穂が大きな声で言う。

「ケチ。」

私は口を尖らせた。

「……明日香は？」

「まだ戻って来ないよ。多分必死で物色してるんでしょ。」

「そうなんだ。」

「沙和もチヨコレート欲しいなら、頑張って自分で買って来なよ。」

「…うん。」

瑞穂に背中を押され、私は躊躇いながらも再び女の戦場に飛び込んだ。



## チョコレート

「はい、お父さん。」

小さなハートの柄の、ピンクのリボンを結んだクリアパックを、私はお父さんに差し出した。中にはお母さんと一緒に作ったチョコレートが五つ入っている。

「おお、バレンタインか。ありがとな、沙和。」

お父さんは目を細めて、満面の笑みを見せる。

「今年のチョコレートも旨そうだな。」

「うん、美味しいよ。今年はただ固めただけじゃなくて、頑張ってトリュフチョコにしたの。」

「そうか、ありがとな。」

お父さんは早速袋を開けて、チョコレートを一粒口の中に入れた。

「うん、旨い。」

「でしょう?」

私は嬉しくなって、得意気に笑った。

「…おはよー。」

お兄ちゃんが、眠そうな顔をして、頭をボリボリ掻きながらリビングに入ってきた。

「おはよう、お兄ちゃん! はい、これチョコレート。」

「あー、…ありがと。」

起きてきたばかりのお兄ちゃんは、私のはしゃいだ声を聞いて少し顔をしかめ、ダルそうにしながらそれを受け取った。

バレンタインデーのチョコレートは、毎年朝一番に渡すことになっている。

お父さんもお兄ちゃんもモテるのか、毎年幾つかチョコレートを貰って帰ってくる。他の人から貰った後にチョコレートを渡したら、嬉しさが弱くなっちゃいそう。だから一番最初に渡して一番喜んで

欲しい、そう思ってた。

お兄ちゃんにチョコレートを渡すと、私はテーブルの上に置いておいたチョコレートの入ったパッケージを四袋、学校に持って行く為に紙袋の中に入れた。

「それ、どうするの？」

私の行動を見ていたお兄ちゃんが話し掛けてきた。その顔はまだ眠そうだけれど、心なしかニヤニヤしているように見える。

「誰か好きな奴にでも渡すの？」

「違うよ。明日香と瑞穂と先生に渡すの。」

「え、先生にまで渡すのか？」

「うん。お母さんが持ってたって。」

「ふーん。…今四つ持ってた。二つも先生に渡すの？」

「ううん、一つは私の分。」

笑顔でそう言つと、お兄ちゃんは

「あっそ。」

と、呆れたように言つて、朝食の目玉焼きを食べ始めた。

「沙和も早く朝ご飯食べちゃいなさい。」

「はい。」

お母さんに急かされ、私もキッチンの椅子に座りご飯を食べ始めた。

いつもと同じ時間に学校に到着すると、既に大勢の生徒が登校していて、教室や廊下のあちらこちらに固まって話していた。不思議な気持ちでそれを見ながら教室に入り、みんなに挨拶をしながら自分の席に着く。

「沙和おはよう。」

「あ、おはよう。」

先に来ていた明日香が、私の所にやって来た。私は家から持って

きた紙袋に手を入れて、チョココレートの入った袋を明日香に手渡す。

「はい、これ。約束のチョココレートだよ。」

「ありがとう。」

明日香は私の隣の席に座ると、早速袋を開けてチョココレートを食べ始めた。私も自分用に持ってきたチョコを一粒、口に入れる。

「うん、美味しい。これ本当に沙和が作ったの？」

「そうだよ。」

「おはよう。」

そこへ、瑞穂がやって来た。

「あ、瑞穂おはよう。ねえ、沙和のチョコ、凄く美味しいよ。」

「本当？」

「今年のは力作だよ。」

私が瑞穂にもチョココレートを渡すと、瑞穂もすぐに袋を開けて、その中の一粒を食べ始めた。

「うん。美味しい。」

「でしょ？」

評価が上々で嬉しくなり、私はへへつと得意気に笑った。

今年初めて作ったトリュフチョコ。溶かしたチョココレートと生クリームを混ぜた物の中に、ちよつとだけ大人っぽく洋酒を入れて、ミルクチョココレートでコーティングした。いつもより時間を掛けて作ったので、喜んでもらえて凄く嬉しい。

二つ目のチョココレートを食べながら、明日香が嬉しそうに私達を見た。

「いつもならお菓子食べてると怒られるのに、今日は先生何も言わないね。」

「そうだね。」

「バレンタインだし、先生もチョコ欲しいから、大目に見てくれるんじゃない？」

「そっか。あ、私も先生にチョコ渡すから付き合っで。」

「え、沙和、先生の分も持ってきたの？」

「うん。お母さんが持って行って言うから。」

私は一つだけ紙袋の中に残ったチョココレートの袋を取り出し、職員室に向かう為に立ち上がった。

明日香と瑞穂も私に付き合う為に立ち上がり、そのまま教室の外に出た。

廊下には教室以上に大勢の生徒達がいいて、なんだかみんなソワソワした空気に包まれていた。たまに『きゃあ』とか『おお』とかいった声が聞こえてくる。

「そういえば、今日みんな来るの早いよね。」

職員室へと通じる廊下を歩きながら、私は二人に話し掛けた。

「多分バレンタインだから、ソワソワして早く来たんじゃない。」

「直接渡せないから、机とかロッカーに入れる為に早く来た人もいるんじゃないかな。」

「そうなんだ。」

なんかみんな大変そうだな。そんなことを考えながら、私は周囲を見渡した。

恥ずかしそうに友達に話している女子とか、嬉しそうにチョココレートを見せ付けている男子。緊張しているのか強ばった顔をしている子もいる。私もお兄ちゃんや明日香達にチョココレート渡して、美味しいって言って貰って嬉しかったし楽しかったけど、なんだかそれとは違ったみんなの雰囲気や表情が少し羨ましく思えた。

「そういえば明日香は田中君にいつチョコ渡すの。」

「放課後。練習が終わった後に渡すから、付き合っただね。」

周りにいる子達と同じような、嬉しそうでそして恥ずかしそうな顔をして、明日香が私を見た。私は明日香のその表情にちよつとドキツとしながら

「勿論。」

と頷いた。

「瑞穂は？今日も塾なの？」

「うう、うん、そう。今日は早く行かなくちゃいけないんだ。」

そう答えた瑞穂は、なんだか明日香達と同じような表情をしているように見えた。

## 帰り道 1

放課後になっても、学校の中はソワソワした雰囲気ではなかった。チヨコレートを手にしてお目当ての男子を探している女子や、意味もなく教室に居座る男子。

私はそんなみんなの行動をチラチラと見ながら、明日香と一緒に校庭のいつもの場所に向かった。

いつもは野球部の練習を途中まで見て帰るから知らなかったけど、部活が終わる頃には冬のせいもあり辺りは真っ暗になっていた。そんな中、明日香と一緒に田中君を探して、野球部の部室の前に辿り着く。

丁度部室に入ろうとしていた田中君を明日香が呼び止め、私はちよつと離れた所で二人の様子を見ていた。

嬉しそうにチヨコを渡す明日香と、少し照れたようにそれを受け取る田中君。 そんな二人のやり取りや表情が、なんだか羨ましかった。

私もお兄ちゃんやお父さんや先生にチヨコをあげて、確かに嬉しそうにはしてもらえたけど、それとは何かが違った。廊下や教室で騒いでた子達もそう。大変そうだなとは思ったけど、でも、どんな表情にしてもすごく女の子っていうか大人っぽいついていうか、そんな雰囲気が漂ってた。

私は、多分そんな雰囲気がなかっただろうな。ただ純粹にチヨコをあげるといふ行為が嬉しくて、女の子とか男の子とか考えたりしてないし。そんな皆とは違うのだろうか。

そんな事を考えていたら、以前瑞穂に言われたことをふと思い出した。

明日香と私の“好き”の違い。

それは、今日私が羨ましく思った女の子の顔してた子達と私の違

い。

そこにはきつと、何か、私の知り得ないものがある。私が知らないことを彼女達が知っているから、だから羨ましいって思うんだ。

暫くして、明日香が嬉しそうに、でも申し訳なさそうな顔をしながら私の側に駆け寄ってきた。私ははつと現実に戻って、

「おかえり。」

と明日香に言う。

それを聞いた明日香は、少し躊躇ってから手を顔の前で合わせて、「ごめん沙和、今日田中と帰ってもいい？」

と言ってきた。

「いいよ。」

私は笑顔で答える。

すると私の答えを聞いて、明日香はなんだか複雑そうな顔をした。

「どうしたの？」

「あのさ、田中と二人で…なんだけど、いいの？」

あ、そうか。

今日はバレンタインデー。

付き合ってる二人が二人だけでいたいって思っても、不思議じゃないのかもしれない。

私は再び笑顔を作って

「勿論いいよ。」

と明日香に告げた。

そうは言ったものの、暗い中を一人で帰るのは怖い。

でも今更明日香に“一緒に帰ろう”とも言えず、私はとぼとぼと校庭から出た。

突然ガシャンツという音が聞こえて、私はビクツと肩を震わせ音のした方向を反射的に見た。

その音がしたのは自転車置き場で、そこには今から帰ろうとしている自転車通学しているらしき一人の男子がいた。

「あ、…高瀬君。」

それは野球部の、あの時ボールを取ってくれた高瀬君だった。

明日香に彼の名前を聞いて以来、野球部の練習を見に行くたびに目に入ってきて、すっかり顔も名前も覚えてしまった。その彼が自転車を出そうとした状態で、睨むような目付きで私を見ていた。どうやら私が独り言で発した彼の名前が聞こえたらしい。

「あ、こんばんは。」

不本意ながらも彼の名前を呼んだ状態になつてしまったので、とりあえず挨拶をすると、彼もいつもの不機嫌そうな顔をして

「…こんばんは。」

と返してくれて、そしてまだ私のことを見ていた。

「今練習終わったの？大変だね。」

彼の視線に、何か言わなきゃいけないような気になつて、練習が終わったことなど知ってるのにそんな事を口走る。でも頭の中では、なんで見てるんだらうという思いがぐるぐると廻っていた。

そういえば、高瀬君は私のことを知っているのだろうか。いつも野球部の練習を見に行ってるから私のこと見た事位あるかもしれないけど、クラスも違うから名前もそして同じ学年ということすら知らないかもしれない。そんなよく知らない女子に名前を呼ばれて、高瀬君、不審に思ってるのかも。

「あのね。」

そう思った私は、とりあえず自己紹介することにした。

「私、五組の山口沙和。明日香の…、あ、明日香っていうのは田中君の彼女なんだけど、その明日香の友達で、よく野球部の練習も見に行ってるんだけど…」

「…知ってる。」

私がまくし立てるように話すと、高瀬君からそんな返事がきた。

…知ってたんだ。



なんだか恥ずかしくなって、顔が赤くなった。それに気付かれな  
いように

「そうなんだ。じゃあね。」

とだけ言って、私は早足で歩き始めた。

「ねえ！」

すると高瀬君が私を呼び止めるように声を発した。

## 帰り道 2

高瀬君の呼び声に、私が恥ずかしくて赤くなっていたほつぺたを右手で押さえながら振り向くと、彼は真つ直ぐに私を見ていた。

「一人で帰るの？」

「え…うん。明日香は田中君と帰るみたいだから…。」

高瀬君は私の返事を聞くと、顔を上に向けて、それから私の足元辺りに視線を落とした。

その後言葉が続くのかと暫く待っていたけれど何も言われないので、再び

「じゃあね。」

と告げて、なんとなく残念なような気持ちになりながら私は高瀬君に背を向けた。

学校から家までは、歩いて二十分程の距離。ほとんど人通りもなくて、街灯もぼつりぼつりとしかない。

こんなに暗い中を一人で歩くのは初めてで、ちよつと怖くて、いつもはゆっくりな私も自然と早歩きになっていた。とにかく夢中で歩いた。

しかし流石に二十分間も速く歩き続ける事は出来ない。駆け足したい程怖いことには変わりないけど、体力がない。私は足を遅めて、はあつと息を吐いた。

その時後ろでガチャンという音がして、私はビクツと肩を震わせて反射的に振り向いた。その先には自転車を押しながら歩いている男子がいて、よく見るとそれはさつき話していた高瀬君だった。

高瀬君の家も、こつちの方向だったんだ。今まで会ったことなかったから知らなかった。まあ朝はともかくとして、帰りは野球部の練習遅くまでやってるし、会わなくても不思議じゃないか。

後ろに知り合いがいることに安心して、私はゆっくりと歩きだした。

相当ゆっくり歩いているのに、高瀬君は全然追い付いてこない。時々ちらつと後ろを見てみるのだけれど、私達の距離は縮まることも広がることもない。

…なんか、ストーカーされてるみたい。

多分高瀬君はそんなことをする人じゃないと思う。でもずっと後ろをついて来られるのと変わらないこの距離が、嫌というかソワソワするというか、とにかく違和感があった。

私は体ごと後ろにぐるんと向き、高瀬君の所まで駆け寄り横に並んだ。

高瀬君は、びっくりしたような顔をして私を見たけれど、すぐにいつもの不機嫌そうな顔になって目を背けて立ち止まっていた。でもそんなこと関係なしに、私は

「後ろからついてきたらストーカーみたいだから、一緒に帰る。」と彼に告げた。

隣に並んで歩いているのに、彼はほとんど喋らなかった。でも沈黙は嫌だから私は一人で話した。私の質問にも“うん”とか“そう”とかしか彼は言わなかったけど、男子と二人で帰るのが初めてだからか私は妙に楽しくて、気が付けば角を曲がればすぐに家に着くという場所まで来ていた。

「家、ここ曲がってすぐなんだ。高瀬君ちは？自転車に来てるってことは、まだ遠いの？」

「…うん。」

相変わらずの返事に私は苦笑して

「じゃあね。」

と手を振って角を曲がった。

瑞穂が言ってたように高瀬君は愛想がなかった。けど一緒に帰っ

てくれたし、前にボール取ってくれたし、きっといい人だ。

そこまで考えて、私はふと足を止めた。

そういえば、高瀬君にボール取ってくれたお礼言っていない。

私はさっき曲がったばかりの角まで駆け足で戻って高瀬君が行ったであろう方向を見たけど、そこには高瀬君の姿はなかった。

…自転車に乗って、もう行っちゃったのかな。そう思いながら何気なく逆の方向に目をやると、何故かそこに自転車に乗ろうとしている高瀬君の姿があった。

「高瀬君！」

思わず大声で彼を呼ぶ。

高瀬君が自転車に乗った状態で振り向いた。

お礼を言おうとして戻ったのに、それよりも彼が思いがけない方向にいたことが気になって

「なんで？家、あっちじゃないの？」

と、高瀬君のいる方向とは逆の方向を指差して問いかけた。

高瀬君はそれには答えず、何故か私から視線を逸らした。

どうしてあっちにいるんだろう。

答えてもらえなかったので、私は頭の中で自分なりに答えを探した。学校に忘れ物してきたのかな？でもさっきまでそんなこと言っていなかったし。…じゃあ、彼の家は学校から見て私の家の方向とは違う場所にあるとか？ならなんでここまで一緒に…。

「…もしかして、送ってくれたの？」

私の問いかけに、彼はすぐには答えなかった。でも私は返事を待って、そのまま彼を見ていた。

暫くの沈黙の後、高瀬君は目を逸らしたまま、独り言のようにボソツと言った。

「…暗かったから。」

心臓が、きゅんって縮まったみたいになった。

その後ドクドクと大きく速く動きはじめて、なんだか顔も熱くな

ってきた。

どうしちゃったんだろ、私…。

急に襲った体の変調に戸惑いながらも、高瀬君が気になって、目が逸らせなかった。

“ありがとう”とさえいいのに、何故か言葉にできなかった。

ううん、正確に言うなら、言葉にすくなくかった。私が何か言ったら、高瀬君は自転車に乗って帰っちゃうような気がしたから。でも、このまま何も言わなくても、高瀬君、きつと帰っちゃう。

どうしよう…。頭の中でそんな事をぐるぐる考えていると、ふとカバンの中に入っている“それ”の存在を思い出した。

私は急いで高瀬君に駆け寄り、カバンの中からそれを取り出して高瀬君の胸のあたりに押し付けた。

「これあげる！送ってくれたお礼。」

“それ”は、家に帰ってから食べようと楽しみに残しておいた、クリアパックに入った一粒だけのチョコレート。

高瀬君が相変わらずの表情でそれを手にする。

心臓がさつき以上に大きな音をたてて、苦しくなるくらいに速く鼓動していた。

私はなんだか居たたまれなくなって、

「じゃあね！」

と必要以上に大きな声で高瀬君に言って、家に向かって走った。

## 昨日の出来事 1

「おはよう。」

私はリビングに入り、キッチンにいたお母さんに挨拶をすると、大きな欠伸を一つした。

「おはよう。何か眠そうね。」

いつもは朝から元気な私が眠そうにしているのは相当珍しいことなので、お母さんは心配そうな顔をして私を見た。

「うん、ちよつとね。でも大丈夫だよ。」

そうお母さんに告げて、私はソファーに腰掛けてテレビを点けた。

昨夜からずっと、高瀬君のことを思い出していた。前にボールを取ってくれた事とか、野球の練習してる姿とか、昨日の事とか。あまり喋らないけど本当はすごく優しいんだ。そうじゃなくちゃ、いくら暗いからって家まで送ってくれない。そのお礼に高瀬君にチョコをあげた訳だけど…。そこまで考えて、私は恥ずかしくなって両手で顔を覆った。

何であんな残り物みたいな、一粒だけのチョコなんか渡しちゃったんだろ？お礼のつもりが全然お礼になってない。もしかしたら高瀬君に変な奴だって思われてるかも…。

昨夜からそんな事が頭の中をぐるぐる廻って、お陰でよく眠れないし、もう最悪。

学校、行きたくないな。高瀬君に会ったら、どんな顔すればいいかわからないし…。

でもそういう訳にもいかないので、私は朝食を済ませて、重い足取りで学校に向かった。

教室に入ると、いつもは先に来ているはずの明日香の姿が見えな

かった。

私はクラスの子に挨拶をしながら席に向かい、椅子に座ってため息をついた。

とりあえずまだ高瀬君には会ってない。でもきつと今日も野球部の練習を見に行くことになるだろうから、放課後顔を合わせることになる。

今日は、練習見ないで帰ろうかな……。でも、明日香一人で行かせるのも気が引ける。明日香に何て言えばいいのかもわからないし……。もし明日香と瑞穂に昨日の事を話したら、絶対またからかわれるだろうから、なるべくなら話したくない。

「おはよう。」

その声にはつと我に振り返顔を上げると、いつの間にか明日香が来ていて、私の横に立っていた。

「おはよう。」

私が慌てて笑顔を作って挨拶を返すと、明日香は何だかポーツとした顔をして私の隣の席に座った。

「どうかしたの？」

その様子を不思議に思い声を掛けると、明日香は

「……うん。」

とだけ言っつて、またポーツとし始めた。心なしか顔が赤いように見えて気になったけど、私も自分の事でかなり頭が一杯だったので、明日香と同じように頬杖をついて、再び考え始めた。

本当にどうしよう。

高瀬君に会わないのが一番いいんだけど。でももし野球部の練習を見に行かなかったとしても、偶然廊下で会っちゃうかもしれない。そうになったらなんて言ったらいいんだろう。……やっぱり明日香と瑞穂に相談しようかな。

私はハアーツと大きくため息をついた。すると隣で明日香も同時にため息をついたので、私達は顔を見合わせた。

「どうしたの？」

「沙和こそどうしたの。ため息なんてついて。」

「おはよう!」

私達がお互いにその理由をいう前に、瑞穂が妙に明るいい声で挨拶をしながら近寄ってきた。

「おはよう。…朝から何かテンション高いね。」

明日香がそう言うと、瑞穂は少し動揺した素振りを見せながら

「そんな事ないよっ。」

と言った後、

「何か二人共暗くない?」

と、私と明日香の顔を交互に見た。

「え…。」

明日香が口籠もる。

私はさっきまで二人に相談しようか悩んでいたけど、やっぱりからかわれるのが嫌なので、自分に話を振られる前に

「明日香、何かおかしいんだよ。ため息ついてるし。」

と瑞穂に言った。

それを聞いた瑞穂が

「どうしたの?」

と言いながら明日香の前の席に座るのを見て、私はホッとしながら明日香の方に向いた。

私達に注目された明日香は両手で顔を隠したけど、指の隙間から見える顔の色で赤くなっていることがわかった。

「どうしたのよ?」

瑞穂が身を乗り出して再び明日香に尋ねると、明日香がすごく小さな声でボソッと何かを言った。

「え、何?聞こえない。」

瑞穂はさらに身を乗り出し、私も明日香に近づいた。すると明日香が、さっきよりは大きいけどやっと聞こえる位の声で言った。

「昨日、田中と…キスした。」



「えー!!!」

衝撃的な告白に、私も瑞穂も思わず大きな声を出す。

その声に周りにいたクラスメイト達が一斉に私達に注目し、それに気付いた明日香がさっき以上に顔を赤くして

「声大きいよつ、二人共!」

と、怒った様な表情で慌て出した。

「ご、ごめんね。」

動揺しながら明日香に謝ってから瑞穂に目を移すと、瑞穂は両手で口を隠すような格好をしながら明日香をじっと見ていた。そして

「それで、どうだったの?」

と興味津々といった目をして明日香に尋ねた。

「どつって…。」

明日香が再び両手で顔を隠す。

「いいじゃん。教えてよ。」

と、瑞穂が詰め寄る。

その時

「席に着けよー。」

と言いながら先生が入ってきたので、私達は残念な気持ちになりながら話を中断して、自分達の席に戻った。

## 昨日の出来事 2

授業が始まったけど、先生の声は全然耳に入って来なかった。

私はボーツと黒板を眺めていた。傍からしたら真剣に授業を聞いているように見えるかもしれない。でも私の頭の中は、さっきの明日香の話で一杯だった。

マンガやテレビでしか見た事がない“キス”という行為。たまにクラスの子が“組の子は経験あるらしいよ”って言ってるのを聞いたことはあるけど、身近の、それも仲のいい友達が、そういう事をしたと聞くのははじめてだ。

彼氏が出来たらいつかする事なんだってというのは知ってる。だから明日香と田中君がキスしても、おかしくはないのかもしれない。でもそういうのって、大人の人がする事だって心の中では思ってたから、中学生なのにいいの？って気持ちもあるし、明日香はもう大人なんだっていう、羨ましいというか尊敬するというか、そんな想いもあった。でも何より、キスってどんなものなんだろう…っていう興味が一番大きかった。

やっぱり、田中君からしたのかな？それとも明日香？どうしてそういう状況になったんだろう。

明日香の話を聞くまで悩んでいたことなど忘れ、そのことばかりが頭の中を駆け巡る。妄想と疑問がどんどん膨らむ。

明日香の話の続きが聞きたい。だから、早く授業終わらないかな。

二時間目は理解室で実験だ。

一時間目が終わると、私は急いで移動教室の準備をして明日香の元に向かった。すると瑞穂がもうそこにいて、明日香を急かしていた。

きつと瑞穂も明日香の話が気になって仕方なかったんだろう。先

生が来る前に興味津々な目で明日香を見ていたし。

まだ休み時間が始まったばかりなのに、私達は教科書を持って教室から出た。別に教室で話してもいいんだけど、そうするとまた話に夢中になって教室を移動するとき急がなきゃいけなくなりそうだから、歩きながら話した方がいいかと思ったのだ。

明日香を真ん中にして、瑞穂と私が両側からぴったりとくっついて歩く。明日香は居心地悪そうにしてるけど、そんなのお構い無しだ。

「で、どうだったの？」

話を切り出したのは瑞穂だった。

「どうだったのって…。」

明日香は顔を赤くする。

「そんなの、分からない。」

「なんで分からないの？」

疑問に思っただけで問いかけると

「だって…緊張して、よく覚えてないよ。」

という返事が返ってきた。

「緊張したってことは、一応予告はあったんだ。」

「予告っていうか…。“キスしていい？”とは聞かれたけど…。」

「それで？」

「…“うん”って言った。」

小さく途切れ途切れに語られる明日香の話に、なんだか私まで恥ずかしくなつて、顔が赤くなるような気がした。明日香、本当に経験しちゃったんだ。もし自分が…って考えたら、想像も出来ない凄いこと。…本当、凄い。明日香ってもう大人なんだ。

「じゃあさ、した感想は？」

瑞穂が続けて明日香に問いかけると

「それは…」

と言ったところで明日香の声が途切れ、同時に足が止まった。そして何かをじっと見ている。

不思議に思い明日香の視線を辿ると、そこには数人の男子と話している田中君の姿があった。

田中君が明日香に気付いた。

明日香が

「あ……お、おはよ……」

と少し上ずった声で挨拶をする。田中君も赤い顔になって仏頂面できっと挨拶をした。

「……おう。」

叫びたくなるくらい照れ臭い二人の姿を見て、周りの男子はどう思ってるんだろうと目を移したら、そこに高瀬君がいた。

彼を目にした瞬間、身体が固まった。

「ちよつと、こつちが恥ずかしくなるよ。ね、沙和。……沙和？」

私の異変に気付いた瑞穂が顔を覗き込んでくる。それには気付いているのだけど、返事が出来ない。まるで金縛りにあつたみたいに、身体も視線も動かすことが出来ず、高瀬君を凝視していた。

高瀬君が私に向かって会釈する。

私はそれに、大袈裟だろうという位大きく首を上下に振って応えた。

心臓がこれまでにない程大きな音を立てた。そして物凄い動揺に襲われた。

明日香の話の衝撃ですっかり忘れていたので、何を言ったらいいのか全然考えていなかった。まさかこんなに早く会ってしまうなんて……どうしたらいいの!?

視線の端に、田中君達が去って行く姿が見えた。

高瀬君も一緒に行ってしまうえば、何も言わなくて済む。でも、それも……、ちよつと嫌だ。

矛盾した自分の考えに更に混乱する。私、どうしたいの？

高瀬君が、去って行く田中君達をちらつと見た。そして一瞬間を置いた後、何故か私達の方に近寄ってきた。

なんで？

私は更に動揺する。心臓の音がうるさい。

高瀬君は私の前に立ち止まり、相変わらずの表情で

「昨日、ありがとう。」

と言った。

私は何に対してお礼を言われているのか全然解らなくて、

「な、なに？お礼を言うのは私の方だよ。本当、ありがとう。なのに私あんな残り物みたいなチョコあげちゃって、それで…。」

と思ったままの言葉をまくし立てた。

高瀬君はじつと私の言葉を聞いて、そして

「…美味しかった。」

と、ボソツと言った。

「え？」

「チョコ、美味しかった。」

相変わらず心臓はうるさかったけど、不思議と動揺が消えた。

高瀬君はそれだけ言うと、田中君達を追って小走りに去って行った。

そっか。チョコ、美味しいって思ってくれたんだ。

去って行く高瀬君を見ながら、私は自分の顔がにやけるのが判った。

「ちよつと、何今の？」

瑞穂の声に、はっと我に返る。

「昨日何があったの？ねえ。沙和？」

昨日あった事を二人に言うかどうか迷っていた私は、二人の質問攻めに、結局言わざるをえなくなってしまうた。

## 春休みの計画

期末テストが終わり、もうすぐ春休みがやってくる。

私達は久々に三人で、校庭のいつもの場所に向かった。

テスト期間中は部活が休みだったせいも、野球部はいつも以上に活気に溢れていた。

明日香は、大勢の部員の中からすぐに田中君を見つけ出して、目で追い始めた。

あのバレンタインの出来事以来、二人の関係はちょっと変わった様な気がする。今までは喧嘩なんてほとんどした事がなかったのに、最近では些細な事でしょうっちゅう喧嘩していると、明日香が愚痴をこぼしていた。でも次の日にはもう仲直りしてるし、野球部の練習も欠かさず見てる。それって前よりも仲良くなったって事なんだろうねって、瑞穂と私はよく話している。

それがキスをしたからなのかは私には判らないけど、でもきつと今までとは違う何かがあるんだろうな。

じつと田中君を見つめる明日香の横顔が凄く大人っぽく見えて、私は羨ましさと置いて行かれるような寂しさを感じて目を逸らした。そして、明日香と同じ様に野球部の練習を見始めた。

高瀬君の姿を見つけ、彼をじつと目で追う。

以前は野球部の練習を見に来ても、特定の誰かを見るという事はなかった。でも一緒に帰ったあの日以来、高瀬君の姿に目が行くようになった。大変そうだけど楽しそうに練習をしている高瀬君を見ると、私まで嬉しくなる。女子と話す時は滅多に出さない笑顔も、ここでなら見れる。

私もあんな風が高瀬君と楽しそうに話したいな。でも實際顔を合わせると、彼が苦手な訳ではないのに、妙に緊張して上手く話せなくなっちゃうから難しいかな。

「あ…。」

いきなり明日香が何かを思い出したように声を上げた。私達は野球部の練習を見るのを中断して、明日香に目を移した。

「春休み中にみんなで遊園地行かない？親戚のおじさんがそこで働いてて、何枚かチケット貰ったんだ。」

「え、行きたい！」

明日香の急な提案に、私は迷いもなく賛成する。

「瑞穂は？」

「私は、春休み中も塾があるから…。行く日による。」

「えっと、いつだったかな？何か先生達の集まりがあって、野球部の練習が一日休みの日があるんだって。その日に行こうって田中と話したんだけど…。」

「なら二人で行ってくればいいじゃん。」

確かに。瑞穂の言葉に私も頷いた。

そりゃあ遊園地には行きたいけど、二人のデートの邪魔をするのは嫌だ。瑞穂も一緒に行くならまだいいけど、もし行かないなら、本当に私一人だけ邪魔者になっちゃう。

「でも、みんなで行った方が楽しいじゃん。それに…。」

明日香がちらっと私を見た。そして少しの間を置いてから、何やらこそこそと瑞穂に耳打ちし始めた。

「ちよつと、何？」

私の方を見たって事は、私の話か、もしくは私に内緒にしたい話か…。どちらにしても、ここに三人でいるのに二人だけで話をされるのは、凄く嫌だ。

楽しそうに話す明日香と、それを聞いて眉を潜めたり笑ったりしている瑞穂。そんな二人の会話が気になって、私はムキになって

「何話してるの!？」

と大きな声を出した。

「秘密。」

明日香がニヤニヤしながら私を見る。

「何で教えてくれないの？」

そう聞いても、二人は顔を見合わせて笑っただけで何も言わない。

…絶対私には教えないつもりだ。

「…じゃあさ、一個だけ教えて。いい話？嫌な話？」

私のその質問に、ようやく明日香が口を開き

「全然嫌な話じゃないよ。むしろ楽しい話だよね。」

と、笑顔で瑞穂と顔を見合わせた。

「本当に？」

瑞穂を見ると、瑞穂もニコニコしながら私を見て言った。

「本当だよ。だからさ、沙和も遊園地楽しんでおいで。」

さっきは明日香に“田中君と二人で行けば”と言っていた瑞穂の矛盾したような言葉に疑問を感じたけれど、あまりにも二人がニコニコしながら私を見ているので、私は顔をしかめたままでコクンと頷いた。



## 出発

遊園地に行く当日。

私は朝食を食べて、急いで支度を始めた。暫くすると玄関のチャイムが鳴り、お母さんが

「明日香ちゃん、迎えに来てくれたわよ。」  
と、部屋の扉を開けた。

中学生だけで遊園地に行く事に不安そうにしてたお母さんだったが、丁度休みだった明日香のおじさんが一緒に付いてきてくれることになったので、なんとか承諾してくれた。

「おはよう。」

玄関に向かうと明日香が手を振って挨拶してきた。

「おはよう。」

私も手を振ってそれに答え、靴を履いて、楽しみだねと言いながら明日香とお母さんと一緒に外に出た。明日香のおじさんが車で遊園地に連れていってくれることになっているので、お母さんはおじさんに挨拶するつもりらしい。

家の目の前に大きくて黒い車が止まっていて、運転席に若い男の人と、助手席に綺麗な女の人に乗っているのが見えた。二人がこっちに気付いて軽く頭を下げたので、お母さんと私も頭を下げた。そしてお母さんがおじさんに挨拶をし始めたのを見て、私はみんなに聞こえない位の小さな声で、明日香に話掛けた。

「あの人が明日香のおじさん？若いね。」

「正確には従兄弟なんだ。でも、もう三十過ぎてるからおじさんって呼んでるの。」

「そうなんだ。…あの隣の女の人は？」

「おじさんの彼女だって。私も今日まで来ること知らなかったから、ビックリしちゃった。」

「遊園地でデートするのかな。」

「わからないけど、でももしそうだとしたら、私達がいたら邪魔だよね。私達も保護者がいない方が気が楽だし、向こうに行ったら別行動しちゃうよ。」

そんな話をしている間にお母さんとおじさんの挨拶は終わったらしく、お母さんが

「沙和、あまり迷惑かけないようにするのよ。」  
と言ってきた。

私がそれに

「はい。」

と頷くのを見た後、明日香が

「そろそろ行こうか。」

と言って、車のドアを開けた。

車のシートは三列になっていて、一番前の運転席と助手席の後ろの、二列目のシートが空いていた。三列目にはきつと田中君が乗っているのだろう。

挨拶をしようと、車に乗り込もうとしている明日香の後ろからひよいと覗きこんだその瞬間、体が跳ねるくらいに心臓がドキンツとなり、私は思わず明日香を車から引きずり下ろした。

「何？」

びっくりしたような明日香の顔。でもきつと私の方が驚いた顔を  
しているはずだ。

「ちよつと明日香！どういう事？」

「何が？」

「高瀬君が来るなんて聞いてないよ…！」

「ああ。」

小さいけれど慌てたような私の声を聞いて、明日香がニヤリと笑った。

「だって、大勢で行った方が楽しいじゃん？だから田中にも誰か誘ってって言ったの。知らない人が来るよりいいでしょ？」

「それは、そうだけど…。」

バレンタインデーのあの日以来、まともに挨拶すら交わしていない。彼の顔を見ると、緊張してしまって上手く話せなくなってしまう。でも何故か気になって見てしまう。それは仲良くなりたいたいからなのか…。

その話は誰にもしていないのに、明日香は気付いていたのか

「チャンスじゃん。」

と私の耳元で囁いた。

チャンス…か。仲良くなるチャンス。

確かにそうだけど、上手く喋れるか…不安。

「そろそろ乗って。」

そうおじさんに急かされ、明日香に続いて車に乗り込んだ。そして勇気を出して後ろの座席を見て、息苦しくなりながら

「…おはよう。」

と、小さな声で言った。

## 疲れた

色んなドキドキを乗せて、車は遊園地に到着した。

「やっと着いたね。」

明日香の嬉しそうな声に、

「そうだね。」

と同意して、私ははあっと大きく息を吐いた。

遊園地に向かう車の中では、明日香やおじさんや彼女のゆみさんと色々話したけど、何を話したかよく覚えていない。

後ろに乗っていた男子二人がほとんど会話に入って来なくて、それが凄く気になって。でも話し掛ける切っ掛けがなくて、ずっとどうしようと思っていたし、それに、他の人と喋っていても、また高瀬君に変な奴だと思われたくなくて言葉を選んだりしていたから、妙に気疲れして、時間が長く感じた。逆に話し掛けるタイミングを図っていたのに全然話せないままだったから、もう着いちゃったの？とも思っただけ。

はしゃぎながら入園ゲートに走る明日香の後を追いかけて、遊園地に入る。ゆっくり歩いて来る男子二人とおじさん達を待っていると、明日香が耳元で

「沙和、さっき言った通り、おじさん達とは別行動ね。」  
と囁いてきた。

「田中、早く！」

と明日香に呼ばれ、走って来る田中君と後を追う高瀬君を待って、明日香が

「じゃあね、おじさん。ここからは別行動ね。」

と、五メートル程離れた所を歩いているおじさんに大きな声で告げて走りだした。私と男子二人はそれを追いかける。

「ちょっと待て！」

後ろからおじさんの引き止める声が聞こえたけれど、明日香は止まろうとしない。ふと気になって、おじさん達の様子を見ようと後ろを振り向くと、猛スピードで追いかけて来るおじさんの姿があった。

「…ちょっと、明日香。」

それを教えようと、息切れしながらも明日香を呼ぶ。

「何？」

「おじさん、追いかけて、来てるよ…。」

「え、マジ？」

私の言葉を聞いて後ろを振り向く明日香につられて再度後ろを見ると、おじさんはまさに私達に追い付こうという所に来ていた。

「ヤバイ！みんな、もっと速く走って！」

と慌てたように明日香に言われたけど、私はもう疲れてしまって、速く走るどころか歩きたい気分だった。

おじさんの足はかなり速いらしくて、すぐに私達に追い付いて明日香の腕を掴んだ。観念したように明日香の足が止まり、それを見てやっと休めると安心しながら私も立ち止まり、はあはあと肩で息をした。少し前を走っていた男子達は、いつも野球部で鍛えられているせいか平然とした顔をしていて、流石だなあ…と、妙に感心してしまった。

「なんで？別にいいじゃん。」

抗議するような明日香の声が聞こえて、私は明日香とおじさんの方に目を移した。

おじさんは流石に疲れた様子でかなり呼吸を荒くしているけれど、それでも明日香の腕を掴んだまま放そうとしない。

「おじさんだってゆみさんと二人でデートした方がいいでしょ？私達は私達で遊ぶから、おじさん達も二人で遊びなよ。」

「駄目。」

明日香の言葉をおじさんはきつぱりと否定して

「何かあつたら困るだろ。一緒に行動するって条件で叔母さんにもみんなのお母さんにも了承してもらってるんだから、ちゃんと聞く。」

と、明日香に告げた。“叔母さん”ていうのは、多分明日香のお母さんのことなんだろうな。

「そんなの言わなきゃ判んないじゃん。」

と、明日香は更に食い下がるけど、おじさんは“駄目”の一点張りだ。

そんな二人のやり取りは暫く続いて、正直私は、別に一緒でもいいのに…と思い始めた。田中君と高瀬君も、面倒臭いような呆れたような顔で明日香を見てる。ゆみさんはおじさんの後ろで苦笑いしてる。

あまりの明日香の聞き分けのなさに業を煮やしたのか、おじさんが

「あまり我が儘言つと、昼飯奢つてやる話、無しにするぞ。」と、明日香に言った。

「えー、何で！それとこれとは話が別じゃん！」

「別じゃない。言うこと聞かない奴には奢つてやるつとも思わないからな。」

明日香が口を尖らせおじさんを睨む。おじさんも無言でじつと明日香を見据える。

「…わかつたよ。」

ようやく諦めたのか、明日香はそうおじさんに告げ、それから私達に

「いい？」

と訊ねてきた。

「いいよ。」

と私が言い、田中君と高瀬君も同意する。

「じゃあ、今日一日団体行動と言つことぞ。よろしく。」

おじさんの言葉に、私達は素直に

「はい。」  
「と返事した。」

## ジェットコースター

「ねえ！ジェットコースター乗ろうよ！」

さつきまで不機嫌だったとは信じられないような満面の笑みで、明日香が先頭にたつて、小走りになりながらみんなを誘導する。私は明日香に置いていかれないようにと、必死で明日香の後を追いかけた。

ジェットコースターは人気のアトラクションなだけはある、大勢の人が列を成していた。

「これ、並ぶのか？」

面倒臭そうなおじさんの声に

「嫌なら別行動してもいいよ。」

と、意地悪な口調で明日香が言った。おじさんは何かブツブツいいながら、渋々私達の後ろに並んだ。その隣ではゆみさんがクスクス笑う。

私達が並んだ場所のすぐ近くに“四十分待ち”と書かれた小さな看板が立っていて、私達は“そんなに待つのか？”とか“早く乗りたいよね”とか文句を言いながら、暇を潰すようにそれぞれの話で盛り上がった。

車の中と同じで、おじさんとゆみさんと明日香と私の四人の会話の中に男子は入って来なくて、二人だけで何か楽しそうに喋っている。その会話の内容が凄く気になるんだけど、そこに入っていく勇氣はやっぱりなくて、聞き耳を立てながらも明日香達と話していた。「二人は何か部活やってるの？」

ふと会話が途切れた時、ゆみさんが男子二人に話し掛けた。ゆみさんも、二人の事が気になっていたのかも知れない。

「野球部です。」

田中君が答える。

「そうなの？じゃあ、好きな球団は？」



そこから、私には入っていけない野球の話に突入。明日香も最初は会話に入って行こうと頑張ってたけど、無理だと思ったみたいで、おじさんを見てため息をついた。

「ゆみさん、野球詳しいんだね。」

「ああ、あいつの家、家族みんなが野球ファンらしいからな。」  
そうなんだ。

私の家は、そこまで野球好きな人なんていない。たまにテレビに野球中継がついてる事はあるけど、お父さんが会社の人と話を合わせる為に見てるだけみたいだし。お兄ちゃんはバスケット部だし。だから私も野球は全然詳しくない。ほぼ毎日野球部の練習を見に行ってるのに、ルールも球団さえもわからない。

「…いいなあ。」

楽しそうに男子達と話すゆみさんが羨ましくて、私は思わず呟いた。でもその呟きは、まわりの喧騒にかき消されたようだった。

そうこうしている間に人の列は大分進み、もうすぐ私達の順番がまわってきてそうだ。ゴーツというジェットコースターの音と、乗っている人の悲鳴が響いてくる。

その音を聞いて、私は急に怖くなった。

本当の事を言うと、家族で遊園地に来て、ジェットコースターって怖そうではほとんど乗ったことがないんだ。今日は明日香のノリにつられてここまで来たけど、やっぱり怖い。

「私、やっぱり止めようかな…。」

恐怖に耐えられなくなつて、私は小さな声で明日香にそう告げた。  
「止めるって、何を？」

不思議そうな顔で明日香が尋ねる。

「ジェットコースター、乗るの。…やっぱり怖いし。」

「何言ってるの？ここまで来て。大丈夫だよ。全然怖くないって。」  
明日香は私の恐怖なんてお構い無しといった感じで、私の手を握ってグイグイ引っ張り、そしてとうとう乗り場まで来てしまった。

「やっぱり怖いよ!」

半泣きで言う私を、明日香は

「大丈夫だって!」

と座席に押しやって、てきぱきと私の安全ベルトとバーを装置した。ここまで来たら覚悟を決めるしかないけど、でも凄く怖くて、私は明日香の手をぎゅっと握った。前に座っている高瀬君が私をちらつと見たような気がしたけど、そんなこと気にしてる余裕なんてない。

「いくよ!」

遊園地の係の人のアナウンスが聞こえ、明日香が嬉しそうに私に告げる。それと同時にジェットコースターが動きだして、私は恐怖で目をぎゅっと瞑った。

ジェットコースターがどんどん昇っていく。目を瞑っているのにそれが解る。

「沙和、見て!」

明日香の嬉しそうな声に、私は恐る恐る目を開けた。

「超眺めいいよ。」

確かに眺めはいいけど、凄く高いよ!

「無理!怖い!」

私は再び目をぎゅっと瞑る。もうやだ!早く終わっちゃって!

ジェットコースターが急にピタツと止まった。目は開けてないけど、一番上まで来たことは理解できる。私は明日香の手をさっき以上にぎゅっと握って、

「やだ。無理だよ。」

と半泣きで言った。

その瞬間、ジェットコースターが降り始めて、そして、凄いスピードで下に落ちた。

「ギャー!!--!」

安全ベルトをしているのに体が浮く。

ジェットコースターは、下に落ちきってもまだまだ凄いスピード

で。私は全然目が開けられなくて、ひたすら悲鳴を上げた。

ガガガツという音と衝撃と共にジェットコースターが止まってからも、なかなか目を開けることが出来なかった。

「あー、面白かったあ！」

隣で明日香が笑いながら言う。

一緒に乗っていた人達がそれぞれの感想を言いながら降りて行く中、私はずっと叫んでいた疲労感と足の震えのせいで、なかなか立ち上がることが出来ない。

「ちよつと、沙和、大丈夫？」

明日香も流石に心配になったのか、抱えるように私の腕を持ち上げる。そして反対側の、降り口の方からも手を引っ張られて、私はようやく立ち上がった。

「大丈夫？」

その声にやつとの思いで顔を上げると、私の手を引っ張ってくれているのは高瀬君だということがわかって、でも私はまだ茫然としたままで、高瀬君と明日香に支えられながら階段を降りて、されるがままといった感じでベンチに腰を降ろした。

「ねえ、もう一回乗ろうよ！」

私をベンチに座らせると、明日香が楽しそうにみんなに言った。

私はまだ足がガクガクしていて、もう一回乗るなんて絶対無理で、こんな怖い物にまた乗りたいなんて信じられない、という気持ちさえしていた。

「私は無理……。待つてるからみんなで行ってきて。」

さっきの余韻が残っているせいか、私は震える声で明日香に告げた。すると

「俺もいい。」

と、隣に立っていた高瀬君が言った。

「えー。」

つまらなそうな明日香の顔。でも、本当に無理なんだもん。高瀬

君がどうなのかはわからないけど。

明日香は暫くつまらなそうに私達を見ていたけれど、急に何か思いついたような表情になって

「じゃあ私達もう一回乗ってくるから、沙和達はここで待っててね。」

と言って、田中君の手を引っ張って乗り場の方へ歩き始めた。

「おい、明日香。」

おじさんが引き止めるように明日香に声をかけ、ゆみさんが心配そうに私達を見る。

「いいから！おじさん達も早く！」

明日香の声に、

「大丈夫だから行ってきてください。」

と、私は頑張って笑顔を出しておじさん達を送り出した。

みんなが行ってからも、暫く足の震えは止まらなかった。それでも段々落ち着いてきて、ふと高瀬君を見ると、高瀬君はいつの間にか買ったのかスポーツドリンクのペットボトルを持っていて、私の隣に座ってそれを飲んでいた。

「…飲む？」

私の視線に気付いた高瀬君が、私にドリンクを手渡す。私は小さく頷いて、それを受け取り口をつけた。

叫びすぎてカラカラだった私の喉に、水分が染み渡る。

思わずいっぱい飲んでしまった、見るとドリンクはペットボトルの三分の一位しか残ってなかった。

「ごめんね！いっぱい飲んじゃった。」

慌ててそれを返すと、高瀬君は無言で受け取って、残りを飲み始めた。ペットボトルに口をつける高瀬君を見ていたら、私は急に自分達のしたことが恥ずかしくなって、一気に顔が熱くなった。

今のつて、間接キス、だよ。

高瀬君はそんな事気にもしてないようで、平然とした顔で飲み終

わったペットボトルを捨てに立ち上がった。

高瀬君が気にしていないなら私も気にしないようにしよう、とは思っただけど、そう思えば思うほど意識しちゃって、さっきのジエットコースターで味わったのは全然違うドキドキが、止まらなくなってしまうた。

## 恋と友情

「あー、面白かった！」

どれくらい時間が経ったのか、気が付くと明日香達が二回目となったジェットコースターを乗り終えて、私達がいるベンチの所に戻って来た。

「お帰り。」

私は心臓がドキドキしている事を悟られないように、なるべく冷静を装ってみんなを出迎えた。でもそんな心配は必要なかったようで、明日香は

「本当面白かったよ！沙和も乗れば良かったのに。」とってはしゃいでいる。それを見て内心ホッとしたけど、明日香が“もう一度乗ろうよ”と言いだすんじゃないかと怖くなって、私は引きつった笑顔で

「他の所にも行こうよ。」

と明日香に告げた。

「じゃあ、今度はお化け屋敷ね！」

明日香が再び先頭に立って、私達を誘導する。

「うん！行く行く！」

さっきのジェットコースターとは違い、今度は心から明日香の提案に賛成した。すると後ろから

「えー、やだなあ。」

と言うゆみさんの声が聞こえ、明日香と私は同時に振り向いた。

「ゆみさん、お化け屋敷嫌いなの？」

「嫌いつていうか…、暗いし、急にお化けが出てきて驚かさせるし、怖いじゃない？」

「えー、なんで？怖くないよ。面白いよ。」

「そうそう。そのびっくりするのが面白いんだよね。」

ゆみさんは、明日香と私の本当にお化け屋敷を楽しみにしてる、はしゃいだ声を聞いて

「…凄いね。」  
と、苦笑いした。

お化け屋敷を堪能した後も、メリーゴーランドやら絶叫マシーン（ジェットコースターより怖くないもの）やらを堪能して、私と明日香のテンションは相当上がっていた。でも田中君の  
「腹減った。」

という呟きに、自分達もお腹が空いている事に気付いて時計を見ると、時間はとうに午後二時を過ぎていた。

そろそろご飯でも食べようと入ったレストランは、昼時を過ぎているにも関わらず混みあっていて、全員が近くに座れる席が空いていなかったため、仕方なく女子グループと男子グループに分かれて食事を取ることにした。

「ゆみさんって、おじさんといつから付き合ってるの？」

サラダを食べていた明日香が、唐突にゆみさんに質問を投げ掛けた。私も興味が湧いたので、やはりサラダを食べながらゆみさんを見る。すると

「えー、いつから…かなあ。」

というゆみさんの返事が返ってきた。

「いつからか判らないの？」

不思議そうにゆみさんを見る明日香。

「うん…。ちゃんと付き合い始めたのは、多分高校に上がった頃だと思う。」

詳しく話を聞くと、ゆみさんとおじさんは所謂幼なじみで、小さい頃からずっと一緒だったらしい。そして気が付いたらお互い好きになっていて、自然と付き合い始めた、との事だった。

「凄いね。」

明日香がため息を漏らす。私も明日香の感嘆の声に、うんうんと

頷いた。

「生まれた時からずっと一緒なんだ。そんなに一緒にいられるなんて凄いな。」

「そう?」

ゆみさんは

「もう一緒にいるのが普通って感じなんだよね。」  
と笑った。

「そんな一緒にいるなら、結婚しちゃえばいいのに。」

「うん。実は、そういう話が出てて。だから今日も、明日香ちゃんと仲良くなりたいから来たんだ。」

「えー、そうなの?!」

自分で結婚の話を持ちかけたのに、驚く明日香。

「そうなんだあ。じゃあ、私とゆみさん、親戚になるんだね。」

「このまま上手く話が進めばね。」

ゆみさんは笑顔で頷いた。

「そっかあ。…やっぱり凄いなあ。」

再び明日香が感嘆の声を漏らした。

「生まれてから、それにこの先も、ずっと一緒って事ですよ。…いいな。私も好きな人とずっと一緒にいたい。」

「明日香ちゃんはそういうタイプなんだ。」

明日香の言葉を聞いて、ゆみさんが笑った。

「でも私達、本当にずっと一緒って訳じゃないよ。大学の際は離れてたし。」

「えー、そうなの?嫌じゃなかった?」

「しょうがなかったからね。」

「私は嫌だな。好きな人とは高校も大学も一緒がいい。」

そうなんだ。

私は明日香を見つめた。

じゃあ、明日香は田中君と一緒に高校受けるのかな。うん、きっとそうするんだろう。そういえば以前も瑞穂に聞かれて、そんな様



な事言つてたし。私は出来たら、高校も明日香達と一緒にいきたいけど、田中君が行きたい所は私が行きたい所とは違つてるのかな。もしそうだとしたら、明日香とも離れ離れになつちゃうんだ。瑞穂は一高だし、みんなバラバラになつちゃうのかもしれない。

そんな事を考えていたら寂しさが襲つてきて、私は俯いた。もし私が明日香と同じ高校に行きたいと言つたら、明日香はどうするんだらう。それでも田中君の方を取るのだらうか…。

明日香は私の暗い気持ちに気付くことなく、ゆみさんと楽しそうに話し続けている。

寂しさは消えないけど、せつかく遊園地に来て楽しんでるのに、一人で暗くなつてるの、嫌だな。そう思った私は気分を変えるように、サラダを口一杯に頬張った。

## 戸惑い

それからも、明日香とゆみさんの話は続いた。私はミートソースのスパゲツティを食べながら、二人の会話に耳を傾ける。

「ゆみさん、本当はおじさんと二人でデートしたかったんじゃないの？」

朝からずっと気にしていたのだろう事を、明日香がゆみさんに聞いた。するとゆみさんは笑いながら

「そんなことないよ。」

と言つて否定するように手を振つた。

「それより、明日香ちゃんこそいいの？田中君だっけ、彼氏なんでしょ？」

逆に尋ねられて、明日香は目を大きく見開いて驚いた表情を浮かべた。

「えー！凄い！どうして判るの？」

「なんとなく、そうなのかなって。」

「そうなんだあ。うん。そうなの。…で、もう一人の男子、高瀬君は沙和の好きな人で」

唐突に自分が話題に上つたのに驚き、私は最後の一口のスパゲツティを喉に詰まらせそうになって、急いでオレンジジュースを流し込んだ。高瀬君が私の好きな人って…明日香は一体何言ってるの！？赤い顔で喋っている私を見て明日香とゆみさんは心配してるけど、今気になるのはそこじゃない。

「ちょっと、明日香、何言ってるの！？私別に、高瀬君の事、そんなんじゃないよ！」

苦しいのが少し落ち着いて、私は明日香に反論した。

「えー、違うの？」

明日香が疑惑の目を向ける。

「違うよ！好きとかそんな風に思ったことないもん！」

「でも沙和、高瀬君の事、ずっと気にしてたじゃん。」

「それは…、仲良くなりたくなってるだけで。でも緊張しちゃうって上手く話せないから…。」

私の言葉を聞いて、明日香はため息混じりになって

「それって好きってことでしょ？」

と尋ねてきた。私はムキになって

「だから違うって！」

と否定する。

「何が違うの？ 気になったり緊張したりするのって意識してるからでしょ？ 好きだから仲良くなりたいたいんでしょ？ 普通友達としてだったら、緊張とかしないじゃん。」

…確かに。

いくら相手が男子だからといっても、そんな風に緊張したことなんて今までない。クラスの子と話すけど、普通に話せるし。

でもそれは、仲良くなりたいたいと思ってるか思っていないかの違いだよ、きっと。

…でも、私、なんで高瀬君と、そんなに仲良くなりたいたいって思うんだろう。それは、もしかしたら明日香が言うように…。

うつん、違う！ だって。

「“好き”っていう気持ちって、“一緒にいて楽しい”とか“安心する”とかそういう風に思うものでしょ？ だから違うよ。」

そう。私の知ってる“好き”って気持ちはそういうものだ。お兄ちゃんに感じてる気持ちがそれであるなら、きつと間違ってる。

「ね、ゆみさん、“好き”ってそういうことですよね？」

私は大人であるゆみさんに同意を求めた。するとゆみさんは

「うーん、そうだね。確かに一緒にいて楽しいとか安心するって気持ちは好きってことだろうね。」

と言ってくれたので、私は明日香に向かって“ほらね”と言うように視線を投げ掛けた。

「でも…。」

ゆみさんが再び話し始めたので、私はその視線をゆみさんに移す。「好き”って、色々あると思うんだよね。確かに沙和ちゃんが言ったのも好きって気持ちだけど。でも、明日香ちゃんと言ったように気になったり緊張したりっていうのも“好き”って気持ちの可能性はあるよね。それが恋だったら尚更。」

「ほらー！」

さっき明日香に言おうとした台詞を逆に言われてしまい、私は半ば呆然としながら明日香を見た。ゆみさんの言葉に戸惑ってる私がいる。何故か心臓がドキドキした。

「やっぱり高瀬君のこと好きなんでしょ？恋してるんでしょ？」

明日香の質問に

「違う…と思う。けど…でも、そうなの？」

と、自分で聞いても間抜けな返事をしてしまった。

明日香は呆れたような顔で

「私は沙和じゃないから、判らないのよ。」

と言った後、

「でも絶対そうだよ！」

と“判らない”と言ったにも関わらず、自信満々に私に告げた。

…私の高瀬君に対する気持ちは、“恋”なの？

判らない。だって恋なんて知らないから。今までそんな気持ちを、誰かに感じたことなんてないから。

でもそれと同じように、高瀬君に対する感情とかドキドキは、今までに誰にも感じたことのないもので…。

…これって恋なの？

私高瀬君に、恋してるの？

## 観覧車

「おーい、もういいか？」

私達の話が途切れたのを見計らったように、おじさんが少し離れた席から私達の所にやって来た。

「そろそろ行こうかと思うんだけど。」

というおじさんの声に

「え、ちよつと待って。」

と、明日香は半分くらい残っているサンドイッチを頬張り始めた。

明日香がサンドイッチを食べおわるのを待ちながらも、私の頭の中では自分が恋をしているのかという疑問がぐるぐると廻っていた。私が高瀬君に感じているこの想いは、“恋”と呼ぶものなんだろうか…。恋をした経験も無く、“これが恋だ”という基準を知らない私がいくら考えたところで、その答えが出て来るはずがない。周りに言われたからって“これが恋だ”と思い込むのも、何か違う気がする。

私は自分の気持ち、二人が言うような“恋”というものに当てはまるのかどうか少しでも確証を得たくて、ドキドキしながら高瀬君をちらつと見た。高瀬君はすぐく暇そうな顔をしていて、たまに田中君と何かぼりぼり話している。きつと私達の長い話が終わるのを、ずっと待っていたんだらうな。

ふと高瀬君が、私達の方に顔を向けた。まさか私の視線に気が付いた？でも見ていたことがばれるのが恥ずかしくて、私は慌て視線を逸らした。でも、もしかしたら気付かれちゃったかも…と思い、今度は顔を動かさないようにして、目線だけで高瀬君の様子を伺う。高瀬君は、もうこっちなんで見ていなくて、また田中君と話している。どうやら視線には気付かなかったようだ。

気付かれたくないと思い自分から目を逸らしたくせに、気付いてもらえなかった事が、何故か残念なような気持ちになる。何矛盾し

た事考えてるんだらう。自分の感情が恥ずかしくて、顔が熱くなつた。

何で私、こんな風になっちゃうんだらう……。考えてみるけど、やっぱり答えは出なかった。

明日香の食事も終わりレストランを出ると、おじさんが

「もう時間も時間だから、あと一ヶ所行ったら帰らうな。」

と、私達に言ってきた。

「えー、何で？まだいいじゃん。」

と明日香は膨れたけど、

「あんまり遅くなると、みんなのお母さんが心配するだろ。」

とおじさんが言うので、渋々了承した。

「最後、何処に行こうか。」

悩む明日香を見て、ゆみさんが明日香と私だけに聞こえる位の声で

「観覧車にしない？」

と、提案してきた。

「最後くらいさ、カップルに分かれるのはどうかな。」

「うん。いいかも。」

ゆみさんの提案に、明日香は頷いた。

「じゃあ、二人づつに分かれて観覧車に乗らう。」

「え、ちよつと待ってよ！」

それを聞いて、私は慌てた。

「ゆみさんと明日香はいいけど、私はどうなるの？」

「勿論、高瀬君とだよ。」

顔を見合せて悪戯っぽく笑うゆみさんと明日香に

「そんなの無理だよ！」

と反論したけど、明日香は私の動揺などお構い無しといった感じで

「観覧車乗らう。」

と男子達に告げ、私の手を引っ張って歩き出した。

明日香とゆみさんが彼氏を連れて別々の観覧車に乗っていくのを見ながら、私はこれ以上にならない緊張とドキドキで足がすくんでしまっていた。

恋をしているのかもしれない私が、その感情を抱いているのかもしれない相手と一緒に、しかも二人だけで観覧車という密室に乗るなんて、そんなの無理だよ！

高瀬君は何とも思っていない様子で、乗り場に足を進める。

普通に考えたら、カップル同士で観覧車に乗っているので、あぶれた私達が二人で乗るのはしょうがない。そう思う。でも今の私は、さつきまでしていた話のせいで、高瀬君を意識しすぎてしまって、そんな風には思えなかった。

観覧車に乗り込もうとした所で、高瀬君が振り返って私を見た。きつと何で来ないのかと不思議に思っているんだろう。

もしこれで乗らなかつたら、私は“変な奴”と思われてしまうかもしれない。いや、もしかしたら、高瀬君と一緒に乗るのを私が嫌がっていると思われてしまう可能性もある。

そんなのは、どう考えも不本意だ！

私はその気持ちに後押しされ、乗り遅れそうになりながらも、勇気を出して高瀬君の乗った観覧車に乗り込んだ。

観覧車に乗ったのはいいけど、心臓のドキドキはさつきと全く変わらない。高瀬君に聞こえてしまうんじゃないかと思うくらい大きな音を立てている。

心配になつて高瀬君を見ると、彼は横を向いて、暇そうにポーツと観覧車の外を見ていた。もしかしたら、つまらないって思っているのかもしれない。この二人だけしかない空間で、相手が何も喋らなければ“つまらない”と思うのも当たり前だ。

私は焦つて何か喋らなければと思うんだけど、何を喋っていいのかが全然思いつかない。やつと見つけた話は、遊園地という夢の空間には全く不似合いのものだった。

「た、高瀬君は、何処の高校行くの？」

それはものすごく現実に取り戻される話題で、こんな所でなくてもいいじゃんって自分でもツッコミを入れたくなるんだけど、ようやく見つけた話題だからなのか、言葉を止めることが出来ない。

「私はね、お兄ちゃんがいるから東高にしようかと思ってるんだ。

あ、因みに、瑞穂は一高。瑞穂って頭いいんだよね。塾にも通ってるし。明日香はまだ聞いてないけど、多分田中君と同じ所に行くんじゃないかな。もしかしたらみんなバラバラになっちゃうかもしれないけど、私はそんなに頭も良くないし、他に行きたい所もないから、やっぱり東高かなって。高瀬君は？もう高校決めてるの？」

一気に捲くし立てて疲れてしまい、私ははあっと息を吐いた。外を見ていた高瀬君は、私が話したせいで今は私の方を見てたけど、私が話を切ったのと同時に、何も言わずまた窓の外に視線を移した。

やっぱり、失敗した？せっかく遊園地に来て楽しんでいたのに、こんな現実的な話。もし私が彼の立場だったら絶対嫌だって思うよ。いくら緊張してたからって、なんて空気が読めないの？

自分が嫌になって、自己嫌悪に陥りかけたその時

「俺も。」

と、不意に高瀬君が言葉を発した。

「え？」

あまりに突然で意外なことだったので、思わず聞き返すと、高瀬君は窓の外から私の方に視線を移して

「俺も、もしかしたら、そうなるかも。」

と言った。

「…そうなるかもって、東高？」

私の質問に、高瀬君が無言で頷く。

それを見て、私の心からはさっきまでの自己嫌悪が嘘のように消えて、代わりに喜びが広がった。

私、高校も高瀬君と同じ所に行けるんだ…！嬉しい！顔がにやけてくる。



彼の言い方は、“そうなるかも”という、まだちゃんと決めていないというようなちよつと引つ掛かるものだけど、それにも関わらず、私の中ではもう既に同じ高校に行けるということになってしまっていて

「同じクラスになれたらいいね。」  
と、思わず言ってしまった。

一周した観覧車を降りた私は、さっきまでの余韻に浸っていた。乗る前は、無理だとさえ思っていたのに、今になれば一周なんてあつという間で、名残惜しさまで感じる。でも、高瀬君が私と同じ高校に行くのを聞く事が出来ただけで満足だ。

「沙和！」

先に降りていた明日香が、いきなり私に抱きついてきた。私はびつくりして心臓をバクバクいわせて

「ど、どうしたの？」

と吃りながら明日香に尋ねた。明日香は何も言わずにそのまま抱きついてくれたけれど、しばらくして私から離れて

「高瀬君と何か話した？」

と、私の質問には答えず、逆に尋ねてきた。

「う、うん。高校どこに行くのって。」

「…ふうん。…で、高瀬君、何処行くんだって？」

「東高、行くかもって、言ってた。」

私の返事を聞いて、明日香の顔が曇った。

「…それって、沙和と一緒にの所だよね。」

「そうだよ。」

「…へえ、そうなんだ。」その言葉を最後に、明日香は何も喋らなくなった。私はそんな明日香の様子に違和感を覚えて心配になったけど、車に乗り込んだ明日香が

「疲れたから寝るね。」

と言ったので、ほっとした。

そっか明日香、疲れてたから様子がおかしく見えただけなんだ。  
良かった。

よく考えれば、いつも元気な明日香がそんな風に寝るなんておかしいことなんだけど、私の頭の中は高瀬君の事とか恋の事とかでいっぱいになっていて、それに気付くことが出来なかった。

## 電話

春休みも、もうすぐ終わる。この休みが終わったら、私達も三年生。高校受験を真剣に考えなくちゃいけない時期になる。

でも、それと同じ位にみんなと過ごす一日一日が大事なものになってくる。

一年後、私達にはいられないだろう。それぞれが自分の決めた高校に行く。どんなに仲のいい友達でも、進む道は変わっていく。今と同じようにはいられない。

それを考えたらすごく寂しくなるけど、それは仕方がないこと。何かが変わるということは必要なこと。

それにもし変わったとしても、進む道が違ったとしても、本当に心が通じているなら、同じように笑ってまた会える。そう信じてる。でも今はその日一日を過ごすのに精一杯で、まだ先のことなんて考える余裕はほとんどないけど…。

「沙和、明日香ちゃんから電話よ。」

晴れた日の午後、暇な休みにも飽きてきて何処かに行きたいなと思っていた矢先に、お母さんが明日香から電話が来たことを告げてきた。遊びの誘いかな？と半ば浮かれて電話口に行くと、まだお母さんがそこにいて、何かを心配しているような神妙な顔をしていた。「どうしたの？」

不思議に思ってお母さんに尋ねると、

「明日香ちゃん、何かあったの？」

と、逆にお母さんに尋ねられた。

「え、何で？」

「うん…、なんだか声がおかしいような気がしたから…。まあ、とにかく、早く出なさい。」

お母さんに言われて、私は受話器に手を向けた。

明日香はよく家に遊びに来てて、お母さんとは何回も会ってる。

“いつも元気”というのがお母さんの明日香に対する評価だし、私もそう思ってる。電話をかけてきた時もいつも元気な声なのに、その声がおかしいって…どうしたんだろう。不安になりながら受話器を取った。

「もしもし、明日香？」

私は電話の向こうの明日香に声をかけた。けど、何故だか明日香からの返事はない。

「明日香？」

再度明日香の名前を呼ぶ。

明日香は携帯電話を持っているので、今もそれで電話をかけて来ているんだと思う。だからもしかしたら電波が悪くて声がうまく聞こえないのかもしれない。お母さんが言った“声がおかしい”というのも、そのせいかも。

でもその考えを覆すように、電話の向こうからは微かにだけ子ども供達の声とか車が通る音といった周りの喧騒が聞こえてきた。

「もしもし明日香？どうしたの？」

私はもう一度明日香に呼び掛けて、そしてさっきの不安な気持ちが大きくなってきて思わずお母さんを見た。お母さんはさっきより離れた所にいるけど、やっぱり心配そうにこっちを見ていた。

『…沙和』

その時ようやく、電話の向こうの明日香が声を発した。その声はやけに擦れていて、そしてなんだか鼻声で…。

「…もしかして、泣いてるの？」

その問いに明日香は答えず、代わりに明らかに泣いているような声が聞こえてきた。

「何？どうしたの？」

私は動揺して、再びお母さんを見ながら質問を繰り返した。でも明日香からの返事は返ってこなくて、私はパニックに陥りそうにな

った。

それでもなんとなく心を落ち着かせて、明日香の居場所を聞き出して  
「これから行くからそこに居てね！」  
と念を押すように伝えて電話を切った。

「明日香ちゃん、どうしたの？」

受話器を置いたのを見計らったように、お母さんが私の方へ近づいてきた。

「分からない…何か泣いてて…。とりあえず明日香、学校の近くの公園にいるらしいから迎えに行ってくる。家に連れてきてもいいよね？」

そうお母さんに伝えると、お母さんは

「分かった。気を付けて行ってらっしゃい。」  
と頷いた。

私は玄関に向かつて靴を履きかけたけど、はっと思いついて電話に戻り受話器を上げた。私一人じゃどうしたらいいか分からないから、瑞穂にも来てもらおう。でも、もしかしたらまだ塾にいるだろうか…。

不安になりながら、それでも瑞穂の携帯電話に電話をかけると、二回目のコールで瑞穂が出た。丁度塾が終わった所だったらしい。

私はとりあえず明日香が泣いている事とこれから家に連れてくる事、それと瑞穂にも来てほしいという事を伝えて電話を切った。そして今度こそ靴を履き、急いで玄関から出た。

私は走って公園に着くと、はあはあと息を切らせながら明日香を探した。そんなに大きな公園じゃないのに、明日香の姿は見当たらない。

あれからそんなに経ってはいないと思うけど、もう夕方近くだからだろうか、明日香の電話から聞こえてきた子供達の遊ぶ姿もほとんどなくなっていた。もしかしたら明日香も帰ってしまったのだろうか…。

こういつ時携帯電話があればすぐに連絡がとれて便利なんだろうけど、私はまだ持ってない。連絡をとるには家の電話からかけるか電話ボックスからかけるかしないといけないのだけど、家に戻るのも面倒だし、お金も持って来ていない。そんな状況に軽くイライラしながらも、明日香を探そうと歩き回る。

ようやく見つけた明日香は、誰も来ないような隅っこのベンチに俯いて座っていた。ほっとして明日香に近づき声を掛けようとする、足音に気が付いたのか明日香が顔を上げた。その目は泣き腫らしたように真っ赤になっていて、私は声を出す事が出来なくなってしまう。

明日香が何で泣いているのか知りたくて、会ったら絶対に聞こうと思っていたのに、それを聞いたら明日香がまた泣きだしてしまいそう、聞けなくなってしまった。

「…家に行こう。」  
私は戸惑いながらそれだけ明日香に告げ、俯く明日香の手を引いて家に向かった。

「おかえり。明日香ちゃん、いらっしやい。」  
家に着くと、お母さんがいつもと同じ口調で私達を迎えた。明日香は俯いたまま

「…お邪魔します。」  
とだけ言った。

明らかに明日香の様子はおかしいのに、その事についてお母さんは何も言わず、とりあえず私の部屋に行く事を勧めた。私はお母さんに言われて明日香を二階の自分の部屋に連れていき、明日香をベットの近くに座らせて、自分もその隣に座った。

明日香は置いてあったクッションを抱えて、ベッドにもたれながら今にも泣きだしそうな顔で座っていた。そんな明日香に何を言ったらいいのか分からなかった。何か話した方がいいのか、それとも何も言わないでいた方がいいのか、それすらも分からなかった。

ただこの状況をどうにかしてほしいと、早く瑞穂に来てほしいと繰り返した。

## 涙

沈黙が続く中、私は部屋の時計をちらっと見た。

明日香を家に連れてきてから十分経過している。瑞穂に連絡したのは明日香を迎えに行く前だから、瑞穂の塾の場所を考えてもそろそろ来てもいい頃だ。

そんな事を考えていたまさにその時、玄関のチャイムが鳴った。きつと瑞穂が来たんだ！

明日香と二人の、この部屋の沈黙に耐え切れなくなっていた私は、チャイムの音に反射的に立ち上がった。そんな私を、明日香が赤い目をして見上げる。

「あ、瑞穂もね、家に来るって言うてたの。だから…多分瑞穂だと思うんだ。ちよつと行ってくるね。」

明日香の様子に気圧されてびくびくしながらも、私はそう言うて部屋を出た。

「遅くなってごめん。」

玄関に行くと、やっぱり来たのは瑞穂で、急いで来たのか息を切らせながら立っていた。

「帰り際に塾の友達に捕まっちゃって…。」

瑞穂はそう言い訳をしてきたけど、私にはそんな事どうでもよくて、ただ瑞穂が来たことに心から安心していた。

「とりあえず、先に私の部屋に行つて。私は何か飲み物持つていくから。」

瑞穂を部屋に行かせて、私はキッチンへ向かった。

キッチンでは、お母さんが夕食の支度をしていた。私はその後ろを通り抜け、食器棚からグラスを三個取り冷蔵庫へ向かった。

「沙和。」

そんな私に気付き、お母さんが声を掛けてきた。



「明日香ちゃんの様子どう？」

明日香が来た時は何も言わなかったけど、やっぱりお母さんも明日香のことが気になってたようだ。私はその問いかけに何も言わず、ただ首を横に振った。

「そう…。」

お母さんは私の動作を見てため息混じりにそう言つと、少し考えてから

「もし良かったら、今日泊まっていってもらえば？」  
と告げた。

「いいの？」

私はグラスに注いでいたオレンジジュースのパックを置いて、お母さんを見た。

「うん、勿論二人が良ければの話だけど。お家にはお母さんから連絡するから。」

「わかった。聞いてくる。」

私はジュースをそのままにして、部屋へと急いだ。

部屋に入ると中は相変わらずの沈黙で、赤い目をして俯いている明日香と、明日香に向かい合うように座っている瑞穂の姿が目に入ってきた。そんな空気を目の当たりにして言葉を発するのが躊躇われたけど、でもお母さんの提案を二人に言わない訳にもいかないの  
で、勇気を出して

「お母さんが良かったら泊まっていけばって言ってるんだけど、どう？」

と二人に尋ねた。

「いいの？」

それを聞いて言葉を発したのは瑞穂だった。

「うん、勿論だよ。二人の家にはお母さんが連絡してくれるって。じゃあ瑞穂はO・Kだね。…明日香は？」

私は恐る恐る明日香を見て、瑞穂もそれに釣られるように明日香を見た。明日香は一瞬私に目を向けたけど再び俯いて、少しの間の

後コクンと頷いた。

私はそれを見て

「じゃあ、二人共泊まるって言うてくるね。」  
と言うて、再びキッチンへ向かった。

お母さんが私から二人の答えを聞き、それぞれの家に電話を入れる。私はその傍らに立って二人の家からの了承の言葉を聞くと、今度こそジュースを持って二階に上がった。

部屋の扉を開け、“泊まってもいいって”と言い掛けた時、明日香の泣き声が再び耳に入ってきて、私は何も言えなくなってしまう。ふと瑞穂に目を移すと、瑞穂は困ったような顔をしながら私を見上げている。

私はジュースの入ったグラスをトレイごとテーブルに置き、瑞穂の横に座って

「どうしたの？」

と耳打ちした。すると瑞穂は困った顔をしたまま

「何があったの？」って聞いたたら、泣いちゃって…。」

と、明日香に聞こえないように小さな声で答えた。

「やっぱり…。私はため息をついた。何か言ったら明日香は泣きだしてしまう、その考えは間違ってたんだ。」

いざという時に人の顔色を伺ってしまう私に対して、瑞穂は何事もはつきりさせたいタイプだ。明日香の事にしても、何があったのか聞かなきゃ気が済まなかったのだろう。

泣いている明日香にも、泣かせてしまった瑞穂にも、何て声を掛けたらいいのかわからなくて、私はとりあえず落ち着こうと、持ってきたジュースを一口飲んで瑞穂を見た。

「瑞穂もジュース飲みなよ。」

とグラスを渡すと、瑞穂は

「うん。」

と頷いて凄いい勢いでジュースを飲み始めた。

明日香にも

「明日香も。ジュース飲んで。」  
とグラスを渡す。明日香は無言で頷き、涙を拭いながらジュースを飲み始めた。

明日香が何も言わないのは、言いたくないからなのか、それとも言えないのか。私に電話をしてきたということは、きっと言いたくない訳ではないんだろう。ただ今はまだ気持ちが高ぶっていて、その原因を思い出すと泣きだしてしまうんだと思う。

「今日、泊まっていたって言われたから。だから話すの、落ち着いてからでいいからね。」

私は明日香にそう言い、それを聞いて明日香はまた涙を浮かべながらも頷いた。

二人とも相当喉が乾いていたのか、グラスの中のジュースはあっという間に無くなってしまった。私はオレンジジュースのパックを取りにキッチンへ向かった。

## 悲しい選択

お母さんが運んできてくれた夕食を食べている時もその後、明日香は何も喋らなかった。落ち着いたら話してと明日香に言った手前何も聞くことが出来ず、私と瑞穂は他愛ない話をしたり、度々涙ぐむ明日香を見て困って顔を見合わせたりしながら時間を過ごした。そんな事をしているうちに夜も更けてしまったので、そろそろ寝ようかと布団を敷いて、電気を消した。正直明日香の事が気になつて眠れそうにもなかったけど、いつまでも起きている訳にもいかない。それに一晩寝れば、明日香も少しは落ち着くんじゃないかと思つたから。

電気を消して暫くした時、私と瑞穂の間に寝ていた明日香が

「ごめんね。」

と呟くように言った。

今日夕々に聞いた明日香の声は弱々しくて、私は不安に似た気持ちを抱えながら明日香の方を向いた。暗くてよく見えないけど、布団の擦れた音で、瑞穂も同じように明日香の方を向いたのが分かった。

「ちよつとは落ち着いた？」

明日香の謝る言葉の後少し間を置いて、瑞穂がそう明日香に尋ねた。その返事は直ぐには返って来なくて、代わりにすすり泣くような声が聞こえてきた。

それを聞いて、私達はまた何も言えなくなって、明日香の方を向いたままただ黙っていた。すると暫くして、明日香が涙声で

「ごめん、まだ、ちよつと無理。…明日絶対話すから。」  
と言ってきた。

「うん、分かった。とにかく今日は寝よ。」

明日香の言葉を聞いて私はそう言つと、眠れそうもないけど、とりあえず目を閉じた。

翌日、朝食を食べ終わり、二人を送る為に家を出る。キッチンから顔を覗かせたお母さんは一瞬心配そうな顔を見せたけど、二人に気付かれないうちにいつもの笑顔を見せて、私達を見送った。

昨日明日香がいた公園の先の十字路を右に曲がれば明日香の家、左に曲がれば瑞穂の家に辿り着く。そこまで行ってしまえば、それぞれが別の道を行かなければいけない。明日香の話はまだ聞いていなかった私と瑞穂は、ここでバラバラなって帰ることが出来なかったし、明日香も明日香でちゃんと話があったのだらう、誰からともなくその公園の敷地内に入り、片隅のベンチに座った。

「昨日、ごめんね。それと、一緒にいてくれて、有難う。」

ベンチに座り最初に声を発した明日香の表情は、まだ何処か無理をしているようにも見えたけど昨日は見せなかった笑顔だったので、少しほっとした。

「別にそんなのいいよ。」

と瑞穂と二人で明日香に告げた後、また沈黙が流れた。

公園はお母さんに連れられた子供たちで賑わっていて元気に遊ぶ声が和やかな空気を作っている。春になったせいか、風はまだ冷たいけど日差しがポカポカと暖かく降り注いでいて、昨夜よく眠れなかった私達にとって、まさに眠りを誘うような空間がここにはあった。なのに、私達の周りにだけ張り詰めた空気が流れているように感じて、眠気が来るどころか落ち着くことが出来ずにいた。

「話せる状態になった？」

そんな空気に耐えられなかったかのように、瑞穂が明日香に問いかけた。明日香はそれを聞いてコクンと頷いたけれど、暫く唇を噛んで黙っていた。でも頷いた手前言わなきゃいけないと思ったのか、俯いたまま口を開いた。

「私…、田中と別れる。」

「なんで?!」

ほぼ同時に私と瑞穂はそう声を上げた。

明日香と田中君が別れるなんて、そんな話、考えてもみなかった。春休みに入る前の二人は、そんな事を思わせない程仲良く見えた。確かに喧嘩もしてたみたいだけどすぐ仲直りしてたし、それは以前よりずっと仲良くなつた証拠だと思っていた。それに、この前遊園地に行った時だって楽しそうにしててそんな素振りは見せなかったのに、なんで急に…？

私と瑞穂の驚きの声を聞いた明日香の目に、涙が浮かんだ。それを見て、私達はまた何も聞けなくなつて、でもじつと明日香を見つめた。

明日香にしてみれば、いくら話せる状態になつたとはいえ、まだ悲しみは少しも癒えていないんだろう。明日香の気持ち分らない訳ではないけど、でも、どうしてあんなに仲が良かった二人がそんな悲しい選択をしなきゃいけないのか、どうしてもその理由が知りたかつた。理由が分からなければ、明日香に何て言ったらいいのかも分からない。

「何で、別れるの？」

私と同じ事を瑞穂も思っていたのだろう。私には聞くことが出来なかつたことを、瑞穂が口にした。

明日香は、涙を堪えるように暫く唇を噛みしめていたけど、でも耐えきれなかつたらしく、涙が頬を伝つた。

「明日香、泣かないでよ。」

私は、お兄ちゃんが私を慰める時にしてくれるように、明日香の頭を抱えるようにしてポンポンと優しく叩いた。瑞穂は手を明日香の背中に置いて

「話してくれなきゃわからないよ？」

と、明日香の顔を覗き込んだ。

暫くそうしていると、ようやく明日香が口を開いた。

「…高校…。」

「え？」

その声が消えそうに小さかったので、私達は明日香の顔を覗き込むようにして聞き返した。

「高校…、同じ所行きたいってずっと言ってたのに、違う所行くって、田中が…。」

明日香は涙を流しながら、さっきよりは大きな、でもやはり小さな声で私達にそう告げた。

## 想い

明日香が、田中君と同じ高校に行きたいと思っていたことは分かっていた。“好きな人とは高校も大学も一緒に行きたい”と、あの日遊園地で言っていたし。瑞穂も以前明日香に田中君と同じ高校に行きたいのか聞いていたから、当然分かっているだろう。

「でもさ、そんなの、明日香が田中君の行きたい高校を受ければ済むことじゃない？」

俯いたままの明日香に、瑞穂が告げる。

「明日香と田中君が何処の高校に行きたいのかは知らないけど、そんなに一緒にいたいなら、明日香が行きたい所諦めて、田中君に合わせればいいじゃん。」

「無理だもん！」

俯いていた明日香が、それを聞いて叫ぶように大きな声を上げたので、私達はびっくりして肩を震わせた。でも瑞穂はすぐに冷静さを取り戻して

「何で無理なの？」

と明日香に問いかけた。

明日香はその問いかけにすぐには答えず、暫く俯いたまま泣いていたけど、少し落ち着いたらしく、ぼつりと言葉を発した。

「だって…、田中が行きたい所つて、男子校なんだよ？」

男子校…。それを聞いた私達は、何も言えなくなってしまった。

瑞穂がさっき言ったように、そんなに一緒に高校に行きたいなら、明日香が田中君の志望校に合わせればいいと私も思っていたけど、その志望校が男子校ならどうにも出来ない。どうにか出来るとしたら、田中君に男子校に行くのを止めるように言うくらいだ。

きつと明日香は、そんな事は既に田中君に言っているのだろう。でも聞いて貰えなかったんだ。もし、私達が同じ事を田中君に言ったとしても、田中君はきつと受け入れない。



俯いたままの明日香を見ながらそんな事を考えていたら、ふと明日香が顔を上げ、涙目で私を見て、言った。

「沙和はいいね…。高瀬君と、同じ高校行けて…。」  
それを聞いた瞬間、心臓が“どくん”と鳴った。

明日香は私が高瀬君を好きだと思ってる、だからそんな事を言ったんだ。でも私は自分の事なのに、“それ”がそうなのか、違うのか、まだよく分かっていなかった。だからあの遊園地に行った日みたいに“高瀬君のこと好きかなんてわからない”と言いたかったけど、高瀬君と同じ高校に行けることを喜んだのは事実で、それにこんな状態の明日香にそれを言ったら、喧嘩になっちゃってしまいそうな気がして、怖くて何も言えなかった。

そういえば…、あの日私が高瀬君と同じ志望校だと言った時、明日香の様子がおかしくなったように感じた。それは明日香が疲れたから　そう思ってたけど、そうじゃなかったのかもしれない。明日香は既にあの時田中君と高校の話をしていて、それで私の話を聞いて…。

それに気付いた私は口を開きかけた。あの時既に明日香は悩んでいたのに、私はそれに気付けなくて、それどころか、好きかもしれない人と同じ高校に行かれると浮かれていたなんて。自分が恥ずかしくて、それに明日香に申し訳なくて。謝ることで許されるかわからないけど、謝らなくちゃいけないと思った。でも、私が謝罪の言葉を発するより先に、瑞穂が

「なんで田中君が、男子校に行きたいのか聞いたの？」

と明日香に尋ねたので、私はそれを言うきっかけを失ってしまった。明日香は瑞穂に尋ねられて、顔を私から瑞穂へと向け、そしてまた俯いて、話し始めた。

「野球部の先輩で、今年その高校に受かった人がいるんだって…。」

田中はその先輩と、また一緒に、野球がしたいからって…。」

途切れ途切れに話す明日香の声を、私は黙って聞いた。あの時明日香の気持ちに気付いてあげられなかった、そんな罪悪感が交じっ

た切ない気持ちで。

「…結局田中は、私よりも、野球や先輩の方が大事なんだよ…！」

何の解決策も見つからないまま、私達はその日公園を後にした。  
帰り際に瑞穂が

「とにかくもう一度、田中君と話しなよ。」

と明日香に言い、私もそれを願った。

罪悪感も手伝い、明日香にしてあげられることはないかと色々考えたけど、何も思いつかなかった。だから、話すことで二人が仲直りできればいいと、心からそう思った。なにより、あんなに仲の良かった二人が別れるなんて嫌だった。

でも新学期を迎え学校に行くようになって、その願いは届かなかったという事がすぐに分かった。

明日香は何故か、田中君のことを全く口にしようとしなかった。

そして、毎日の様に通っていた放課後の校庭に行かなくなった。

多分二人は、まだ別れてはいないと思う。もし別れたなら、明日香はそれを絶対私達に言う。だから瑞穂と私は、明日香が何か言ってくるまで何も聞かないと決めた。もしこっちから何か聞いて、明日香がまた泣いてしまったら嫌だから。

放課後。帰り際、部活をしている生徒達の声に誘われるように、明日香が足を止めた。その視線は校庭に向かっている。多分そこには、田中君の姿があるのだろう。

「明日香？」

私は恐る恐る明日香に声を掛けた。すると明日香は

「あ…。」

と小さく声を発し我に返ったような顔をして、それから何もなかったように

「早く帰ろう。瑞穂が塾に遅れたら困るしね。」

と言つて、先頭を歩き始めた。

私は振り返つて校庭を見た。そして、明日香が見ていただろう田中君の姿を目で追つた。

田中君が男子校に行くなんて言わなければ、明日香はあんなに悲しんだりしないのに。そして今からでも明日香と同じ高校に行くと言つてくれれば、二人は絶対に仲直り出来るのに…。

そんな恨めしい気持ちで見えていた田中君の傍に、一人の男子が駆け寄つた。私の視線は、何故か自然にその男子　高瀬君へと移つた。そして今度は彼の姿を目で追ひ始めた。

もし明日香と田中君が仲直りしなかつたら…、私は校庭のあの場所ので、高瀬君を見ることが出来なくなつてしまう。校庭に行かなくなれば、偶然会うことがない限り、日に一度もその姿を見られないかもしれない。そうなつたら、高瀬君は、私の事を忘れてしまつたらどうか…。

「沙和？帰るよ。」

急かすような瑞穂の声。私は慌てて瑞穂と明日香がいる場所へと駆け寄り、そして後ろ髪を引かれる思いでもう一度校庭を振り返つてから、二人に置いていかれないように歩きだした。

## 恋の話

「ただいま。」

もう消灯時間が近いからと、私は明日香や瑞穂がいる部屋から自分の部屋へと戻った。

「あ、沙和ちゃん帰ってきた。お帰り。」

楽しそうに話していた同じ部屋の子達が、私を笑顔で迎える。

中学三年生のメインイベントともいえる、二泊三日の修学旅行。

今日はその一日目だ。正直お寺や神社なんて興味は無くして旅行自体は退屈なんだけど、学校から離れて、三日間昼も夜も友達みんなと一緒にいられるというだけで、自然とテンションが上がってしまう。明日香や瑞穂と部屋が離れてしまったのは残念だけど、クラスの子達と同じ部屋に泊まって話すのは、やっぱり楽しい。

「それで、知美、佐藤君と話したの？」

私が部屋に入り布団の上に座ると同時に、さっきまでしていたのだろう話の続きが始まったようだ。

知美と呼ばれたその子は

「無理だよ。緊張して上手く話し掛けられないもん。」

と顔を赤くした。私はそれを聞いて、隣に座っていた加奈ちゃんに

「佐藤君って誰？」

と問いかけると、加奈ちゃんは

「隣のクラスのバレー部の人で、知美の好きな人だって。」

と教えてくれた。

「なんで？同じバレー部の人なんだし、いつも普通に話してるのに。今更緊張することなんてないじゃん。」

と周りの子達に責め立てられるように問われて、知美ちゃんは

「それは部活の話だからだよ。部活の話をする時だってドキドキするのに、それ以外の話なんてもっと緊張するの！それより千穂こそ

「どうなの？河合くんと話した？」

と、赤い顔をしたままで話し、それから、他の子に話を振った。話を振られた千穂ちゃんも赤い顔をして好きな人の話をして、その後今度は希ちゃんに話を振った。そんな感じで次々と恋の話がされる中、私は自分にも話が振られるんじゃないかとヒヤヒヤしながら、そのやり取りを聞いてドキドキしていた。

知美ちゃんも千穂ちゃんも凄く明るくて、クラスでも目立つタイプの子だ。男子とだって普通に話したり出来るのに、好きな人の前では緊張するんだ…。他の子もみんな、好きな人の前だとドキドキして上手く話せないって言ってる…。それは、私が高瀬君に抱いている感情と同じなのだろうか。

「ねえ、沙和ちゃんは？好きな人いるの？」

ポーツと考え事をしている所に名前を呼ばれて、私の心臓はバクバクと大きな音を立てた。とうとう私の番が回ってきたんだ。

みんなの目が私に集中する。私は焦った。みんなが正直に話している中で、私だけ嘘を言う訳にはいかない。でも、好きな人がいるのかどうかと聞かれても…。

「わからない。」

私がそう言つと、それを聞いた周りの子達が

「何それ？何でわからないの？」

と責め立てるように問いかけてきた。それに圧倒されながらも、私は正直に

「恋っていうのが、どんなものが、良くわからないの。」

とみんなに伝えた。

それを聞いて、みんなが黙ってしまった。呆れられてしまったのだろうか。何か言わなきゃと私が焦り始めた時、

「どんなものかって言われると、難しいね。」

と、千穂ちゃんが口を開いた。

「うん。そうだね。」

と、その言葉にみんなが賛同する。

呆れたんじゃないやなくて、考えてくれたんだ。私は嬉しくなった。

「私の場合は、」  
知美ちゃんが口を開いた。

「さっきも言っただけど、話したいのに上手く話せないっていうか…。」

「うん、わかる。」

他の子達も、次々と口を開いた。

「仲良くなりたいたいんだけどさ、本人を目の前にすると、何話したらいいかわからなくなっちゃうよね。」

「そうそう。変な事言っちゃったらどうしよう、とか思ったりして。」

「で、ちゃんと話せたりすると、凄く嬉しいよね。やったあ、話せたって感じで。」

「あとさ、好きな人の事、思わず見ちゃったりしない？」

「するする。それで、その人と仲良くしてる子がいたりすると、うらやましいなあって思う。私もそんな風に話したいって。」

「あと、本人がその場にいないのに、その人のこと考えたりとか。」

「そう。それだけでドキドキするよね。」

みんなから語られる言葉を聞いて、私はまたドキドキしていた。

そんな風に考えたり感じたりすることが、私にもあるから。…とすると、やっぱり私が高瀬君に抱いている気持ちは。

「沙和ちゃんは、そんな風に思う人、いないの？」

みんなの意見が一通り出た頃、千穂ちゃんがまた私に問いかけてきた。私はその問いかけに、恥ずかしく思いながら

「…いる、と思う。」

と、小さな声で答えた。

それを聞いた千穂ちゃんが、何故か楽しそうに私に告げた。

「沙和ちゃん、絶対その人に恋してるよ。」

そうなのかな…。

みんなの意見を聞いて、私にも同じ経験があると思ったにも関わらず、この気持ちが“恋である”と言ってしまう自信が私にはまだなかった。みんなの意見に流されてしまっているだけではないのか。そんな疑問が心の中にあつた。

「それで、沙和ちゃんが気になつてる人つて誰なの？」

私の気持ちを余所に、知美ちゃんがそんな問いかけをしてきた。私はまだこの気持ちが“恋”であるのか半信半疑で、それなのにその相手の名前を出していいものなのかと言いつつ、すると、隣にいた加奈ちゃんが

「三組の人じゃない？」

と言つたので、私はびっくりして顔を赤くした。三組は、高瀬君のクラス。加奈ちゃんが言つたことは当たっている。私は何も言つてないのに何で分かつたのか？私は動揺して

「な、なんで？！」

と、吃りながら加奈ちゃんに尋ねた。加奈ちゃんは、何だか意味深な笑顔で私を見て、言つた。

「だって沙和ちゃん、三組が集まつてる場所とかバスとか、超見えたよね。」

それを聞いた瞬間、顔が熱くなって、さつき以上に赤くなつたことが分かつた。そう言われてみれば、今日は高瀬君の姿を何度も目にした。それは多分無意識のうちに、私が高瀬君を探していたから……。自分でも分かつていなかったその行動を、クラスの子に気付かされたなんて。

「なんだ、沙和ちゃん、分からないとか言いながら、すっかり恋してるんじゃない。」

みんなのからかう声に、私は何の反論も出来なくなつてしまい、赤い顔をしたまま恥ずかしさのあまり呆然としていた。

## ヒトノココロ

話題の中心は私から他の子へと移っていた。私は少しほっとしたけど、まだ顔の火照りが治まらなくて、それを隠すように布団に潜り込んだ。

私は自分が恋をしているのかどうか、よく分かっていなかった。なのに、みんなに“恋してる”って言い切らせてしまうような行動をしていたなんて、恥ずかしくてたまらなかったしドキドキした。今までみんなの好きな人の話を聞いて、私も同じような思いをしたことがあると何回も思った。それは、ただの友達には感じることはない、特別な気持ちなんだ。私がそれを高瀬君に抱くってことは……。

やっぱり私は、高瀬君に恋をしてるんだ。

それを確信した瞬間、今までココロの中でモヤモヤしていた不確かだった何かが、はつきりとしたカタチをとり始めた。

まだまだみんなの恋の話は盛り上がりを見せられて、私は自分の気持ちについて考えながらも耳を傾けていたけれども、暫くすると先生が消灯時間を過ぎたにも関わらず起きている私達を叱りに来たので、みんなおとなしく布団に入って電気を消した。それでもヒソヒソと話している子は何人かいて、眠れないでいた私は、その声を耳にしながら布団に潜っていた。

「ねえ沙和ちゃん？」

私はまだ起き上がることが分かったのか、隣の布団に入っている加奈ちゃんが小さな声で私を呼んだ。何人かの子はもう寝ているようで、微かに寝息が聞こえてくる。私はその子達を起こさないようにと同じように小さな声で、加奈ちゃんに返事をし、それを聞いた加奈ちゃんはやはり小さな声で私に話しかけてきた。

「沙和ちゃんが好きな人って、明日香ちゃんの彼だった人の友達で



「しょ？」

その言い方に何か引つ掛りを感じたけど、そんなことよりも加奈ちゃんと言っている人が間違えなく高瀬君であるだろうということに、私はただ驚いていた。

なんで加奈ちゃんは、言った訳でもないのに私の好きな人が誰かまでわかるの？相当カンがいいのか、それとも他人のことをよく見ているのか……。もしここで答えを誤魔化したとしても、加奈ちゃんにはすぐにバレちゃいそうだな。でもはっきりとそれを認めてしまうことに戸惑いを感じて、私は顔を布団で隠してから、何も言わずただこくと頷いた。

部屋は電気が消えていて暗かったけど、ドアの隙間から細く入ってくるほんの少しの灯りと、私と加奈ちゃんのそう離れていない距離のお陰で、加奈ちゃんには私の頭の動きが見えたらしい。

「やっぱりね。」  
と小さく呟く加奈ちゃんの声が聞こえた。

まだ明日香にも瑞穂にも認めていないこの想いを、他の子に先に伝えてしまった。罪悪感と、自分の気持ちも認めてしまったという恥ずかしさが、心の中でぐちゃぐちゃに入り交じる。でもその気持ちには、加奈ちゃんの

「大変だね。」

という言葉により少し治まった。

「え？」

私は加奈ちゃんが何を言ったのかよく分からなくて、布団から顔を出して加奈ちゃんの方を見た。確か今加奈ちゃんは“大変だね”って言った。でも何が大変なのか、私には全然理解が出来ない。

加奈ちゃんが更に言葉を続ける。

「だって明日香ちゃん、彼氏と別れたんでしょ？」

別れてない！

咄嗟に大声を出しそうになって、私は慌ててそれを堪えた。

大きな声を出したら、寝てる子達を起こしてしまうかもしれない。それにまだ起きている子達にも気付かれて、今私達がしているこの会話に興味を持たれてしまう可能性もある。

もし興味を持たれたとしても、明日香達はまだ別れていないはずだからそう告げればいいだけなんだけど、二人が上手くいっていないことや明日香が別れると私達に言ったことも話さなくてはいけない状況になってしまいかもしれない。でも私はそんな明日香の話を、この部屋にいるみんなに言うことになってしまうのは嫌だったので、加奈ちゃんに

「喧嘩してるだけだよ。」

と、冷静を装って小さな声で伝えた。

それを聞いた加奈ちゃんは

「ふうん、そうなんだ。」

と微妙な返事をして、それから何も言わなくなった。

加奈ちゃんは、明日香達が上手くいってないことも気付いてたんだ。その二人の様子を見て、別れたんだと思ったのだろう。確かに別れたって思っても不思議ではないくらい、明日香と田中君の状況は悪いと思う。一緒にいることは勿論、話すらしいし。

さっきの返事からすると、加奈ちゃんは私の返答に納得してないって感じだった。けど、仲直りするって信じたいから、いたずらに二人の話をしたくはなかった。

それより、さっき加奈ちゃんが言った“大変だね”というセリフはなんだったのだろうか。加奈ちゃんは明日香達が別れていると思っただけで、二人が別れた訳ではないこの状況では関係ないのかもしれないけど、でも、もしかしたら…ということもある。

私は加奈ちゃんが言おうとしていたその話が気になって、黙ってしまった加奈ちゃんに

「ねえ、加奈ちゃん。さっき“大変だね”って言ってたけど、何が大変だっと思ったの？」

と、思い切って尋ねてみた。

加奈ちゃんは私の問いかけを聞いてからも暫く無言のままだったけれど

「私と同じ部活の子の話なんだけど…」

と、小さな声で話し始めた。

「その子がね、友達の彼の友達を好きになったんだって。でもその友達はそれと別れちゃったらしくて…。」

まるで私と明日香のようだ。

明日香達はまだ別れた訳ではないけれど、そうなる可能性も無い訳ではなくて…。私の心はざわついた。

「で、その友達は、今まではその子の恋を応援していたのに、別れた途端、逆に嫌がるようになったんだって。…多分、自分の友達…直接元彼と仲良くしてる訳じゃないけどさ、その彼の友達と仲良くするのが嫌だったんじゃないかな。」

“まあ、明日香ちゃんがそうとは限らないけど”とか“二人が別れてないなら関係ないけど”とか加奈ちゃんは付け加えたけど、私の心の中のざわざわは治まらなかつた。隣で寝ている加奈ちゃんの寝息を聞きながら、私は眠れない夜を過ごした。

## 風景

修学旅行から帰って来て、明日香と田中君の仲は相変わらず悪い状態らしく、野球部の練習を見に行かない日々が続いていた。

修学旅行で高瀬君に恋をしていると確信したせいなのか、一日に一度も高瀬君を見られない時もあるというこの状況が、私にとってとても辛いものに感じられた。

でも、明日香や瑞穂にそれを言う事は躊躇いがあった。田中君を連想させてしまいそうな話をして、明日香を悲しい思いにさせてしまうのも勿論嫌だったし、それに合わせて、修学旅行で加奈ちゃんから聞いたあの話が、心に引つ掛かっていた。

明日香がもし田中君と別れたら…いや、今のこの悪い状態でも同様かもしれない。私が高瀬君を好きだと言ったら、この気持ちは嫌がられてしまうのだろうか…。

勿論、明日香が加奈ちゃんの話に出てきた女の子と同じ考え方をするとは限らない。けど、逆に言うと、そう思う可能性もある、ということ…。それを考えると不安で、私は明日香にも瑞穂にも、私が確信した高瀬君に対するこの気持ちを、伝えられずにいた。いつかは二人に言わなければいけないと思いつつも、それをしたら、この気持ちを忘れなければならなくなるかもしれないと考えて、言い出すことが出来なかった。

でももし、私の恋の話をしたあの時に同じ部屋にいた子が、明日香達に喋ってしまったら…と修学旅行から帰って来て暫くは不安だったけど、誰もその話題を口にしていないみたいで、本当に感謝した。

「ねえ、図書室付き合っで。」

昼休み、ご飯を食べ終えた瑞穂が、私と明日香に声を掛けた。

「いいよ。」

と立ち上がった、図書室に続く廊下を歩く。

その道すがら、私は高瀬君に会えないかとチラチラ周りを見回していた。けれど、大勢の生徒の中から高瀬君の姿を見つけることは出来なかった。…今日は会えないのかな。そう考えて、気持ちが沈んだ。

図書室に着くと、私は何やら本を探している瑞穂から離れ、当てもなくぶらぶらし始めた。

校庭ならまだまし、こんな所で高瀬君に会えることは恐らく無いと思うんだけど、それでももしかしたら…という可能性を捨て切れなくて、私はあちこち歩いた。でもやっぱり高瀬君の姿は無く、私はため息をついて、ぼんやりと窓の外に目を移した。

「瑞穂、何か難しそうな本借りるんだね。」

「そろそろ受験に備えようかなと思ってさ。明日香達も借りれば？」

「ううん、いいよ。ね、沙和？」

いつの間にか明日香と瑞穂が私の近くにいて、そんな会話を始めた。私は明日香の問いかけに

「うん。」

と返事はしたものの、実はその会話にはほとんど上の空で、目は窓の外の風景に釘付けになっていた。

図書室の窓から、校庭が見えた。あまり来ることがなかったから、今まで知らなかった。

校庭に一人で行く勇氣は無いけど、ここからなら、一人でも野球部の練習を見ることが出来る…！

さっきまで沈んでいた気持ちが嘘みたいに、心臓が嬉しさで高鳴った。

「沙和帰ろっ。」

ホームルームが終わり、明日香が帰り支度を済ませて私の元へ来た。瑞穂も鞆を持って近づいてくる。

「うん。」

と返事をして私も鞆を持ったけど、心の中は迷いで一杯だった。

そろそろ野球部の練習が始まる時間。図書室のあの場所に行けば、その風景が見られる。その気持ちとは裏腹に、私は帰り支度をして明日香と瑞穂と一緒に、昇降口へと向かっていた。

せっかく高瀬君の姿を見られる場所を見つけたのに、行かないで帰っていいの？と、心の中にまるでもう一人自分がいて、今帰ろうとしている私に言っているように感じた。

「どうしたの？」

下駄箱の手前で私の足が止まり、それに気付いて、明日香が不思議そうに尋ねて来た。私は二人に何て言ったらいいのかわからなくて、“なんでもない”と言ってやっぱり帰ろうかとも思ったけど、でもやっぱりあの場所に行きたくて…。

「ごめん、あのね、読みたい本があるの思い出して…。だから、図書室に行くてくる。」

明日香と瑞穂が、ちよつと驚いたような顔をした。それもそのはず、私は本なんて滅多に読むことはなくて、興味があるという話すらしたことはないんだから。そんな私が“読みたい本がある”なんて、信じられなくて当たり前だ。

でも二人は私の言葉を信じたらしく、瑞穂が

「何で昼休みに行った時に借りなかったの？」

と呆れたように言って、明日香が

「一緒に行こうか？」

と言ってきた。

私は、自分が言った嘘を信じてくれた二人に罪悪感を感じながらも、

「ううん、探すの時間かかりそうだから、先に帰ってて。」

と言って、図書室に走った。

私はひどい子だ。

親友つて呼べる二人に嘘をつくなんて。嘘をついてこの場所に来るなんて…！

でも、本当のことが言えなかった。本当のことを言っただけに来るのを拒否されるかもしれないのが、私の気持ちを否定されるかもしれないのが、そしてまた明日香を悲しい気持ちにさせてしまうかもしれないのが、怖かった。

罪悪感を感じながらも、私は図書室に入って適当に一冊の本を手に取り、窓際の席に座った。

思った通りだった。ここからは野球部の練習も、私達がよく行っていた鉄棒の近くのあの場所も、見渡すことが出来た。勿論校庭で見るとよりは遠いけど、こうして野球部の練習が見られるだけで充分だ。それにどんなに遠くても、背筋が真っ直ぐに伸びた彼の姿を見つけることが出来る。

私は、本を読んでいる振りをする為に持ってきた本を開いて、また窓の外に目を向けた。

「そろそろ図書室閉めるよ。」

どれくらい時間が経ったのか、図書室の女の先生が私に声を掛けてきた。

もう少し、見ていたかったな。私は残念な気持ちになりながら

「はあい。」

と返事をして、本を持って立ち上がった。

久しぶりに見る高瀬君の野球をしている姿はやっぱり格好良くて。また絶対見に来よう、そう思った。

「先生、この本、借りてついでですか？」

私は急いで本を借りる手続きをして、もう一度窓の外を顧みてから、図書室を後にした。

それから三日おきくらいのペースで、私は図書室に通った。毎日通ったら怪しまれてしまうかもしれないけど、その位だったら、実際は読んでもいない借りてきた本を、読み終わったと言い訳できるから。そして一人で図書室の窓際の席に座り、頬杖をついて校庭を見つめる。

ここに来れば高瀬君が見れて、嬉しい気持ちでいっぱいになった。でもそれと比例するように、胸の中がまるで灰色の雲に覆われるかのような、そんな重い感覚が襲ってきた。

何でそんなことになっているのか、その理由は分かっている。それは、明日香と瑞穂に嘘をついているという罪悪感のせいだ。分かっているのに解決出来ずにいた。だって解決するには、この“想い”を言うしかないから。言ってしまったら忘れなければならなくなるかもしれない“想い”を。

でも私は、忘れなくなかった。

いつそ明日香達のことなんか気にしなればいい。そう考えたこともあつたけど、そんなことも出来ない。だって、明日香も瑞穂も大事だから。高瀬君を知るずっと前から仲のいい、本当に本当に大切な友達。そんな友達を気にしないなんてこと、出来るはずがない。じゃあ、その友達を騙している、今の私は何？それは友達に対してひどい事をしてるって言わないの？

やっぱり、本当の事を言うべきだ。

でも、言ったらどうなるの？やっぱり反対される？そしたら…私は高瀬君を忘れられる？

怖かった。

怖かつたけど、これ以上友達を騙すことはしてはいけなと思つた。



もし反対されたら、それはその時考えよう。

だから今は、もしかしたらもう見られなくなってしまつかもしれない高瀬君の姿を見てみよう。

心に切ない想いを抱えながら、私はひたすら高瀬君の姿を目で追った。

夢中になって高瀬君を見た。周りの声も聞こえない程に。だから私は、私に近付いて来る人影に気付けなかった。

「野球部、見てるの？」

突然声を掛けられ、私はビクツと肩を震わせた。

その声を、私は知っている。いや、知っているというより、むしろ聞き慣れた声だった。

恐る恐る振り向くと、私に声を掛けたその彼女は、私ではなく窓の外をじっと見ていた。

私は何も言えず、ただ彼女の姿を見つめた。あまりに突然のことに動揺していた。でもそのままずっと黙っている訳にもいかないと、やっとの思いで彼女の名前を口にした。

「…明日香。」

擦れた声で私が名前を呼ぶのを聞いて、彼女はゆっくりと顔を私に向けた。そして無言のまま私を見下ろし、暫くしてから口を開いた。

「高瀬君のこと、見てたんだよね。…さっき千穂ちゃんが言ったよ。沙和が、三組の人が好きだって言ってたって。」

どうしようっ！

私が言うより先に、私の気持ちに明日香に伝わってしまった。

「ちよつと来て。」

明日香は私を立ち上がらせると、私の手を引っ張って廊下に連れ出した。そして人目につかないような場所で立ち止まると

「何で他の子には言って、私達には言ってくれないの？」  
と、私を問い質し始めた。

「…ごめん。」  
そうとしか言えなかった。だって、明日香の怒りはもつともだから。私だって同じ立場だったら、絶対嫌だと思う。

「ごめんとかじゃなくて、どうして言わなかったか聞いているの。」  
明日香が再び疑問を投げ掛ける。私はぎゅっと唇を噛んで俯いた。  
「沙和？何か言いなよ。」

明日香の怒った声に、私は足を震わせながら言い訳を始めた。  
「…千穂ちゃんには、修学旅行の時に聞かれて…。でもそれまでは自分でも良く分かってなくて…。で、話してるうちに、そうなのかって思って、それで、みんなに“絶対好きなんだよ”って言われて、それで…。」

「それで？何で私と瑞穂には言わなかったの？」  
「それは…。」  
何て言ったらいいか分からず黙り込んだ私を、明日香がじっと睨む。

私はもう一度唇を噛んで、意を決して明日香を見た。

「言えなかつたんだもん！明日香に嫌がられたらどうしようって思っ  
つて、怖くて…。」

「は？何で私が嫌がるの？」

私の言葉を聞いて、明日香が不思議そうな顔をした。それを見た  
私は

「…嫌じゃないの？」

と、逆に明日香に聞き返していた。

「何で嫌なんて思わなきゃならないの？そんな訳ないじゃん。」  
「だって高瀬君、田中君の友達だよ？」

あ…っ！

私は自分が発してしまった言葉に気付き、はっと息を飲んだ。でも、今更後悔しても遅かった。

「…それって、私のせいって事？」

明日香が低い声を出した。

「私が、田中と別れるって言ったから、その田中の友達の高瀬君を好きだっって言えなかったの？」

「違う！そうじゃない！」

私は慌てて大きな声を上げた。でも

「私が田中と別れたら、田中の友達なんかと付き合うなって、私が言うと思ったの？」

と、明日香は怒っているんだけど悲しそうな顔をして言葉を続けた。明日香の言う通りの事を、確かに私は考えていた。でも言えなかった理由はそれだけじゃなかった。

明日香を悲しませたくない。そう思ったから言えなかった。なのに今、私は明日香を傷つけた。明日香の表情が、それを物語っていた。

「ごめん、明日香…。」

謝ることしか思いつかなくて、私はそれを口にした。そしてそれと同時に、何故か涙が溢れてきた。

何で泣いてるの…！？

私は自分のこの状態を、理解することが出来なかった。

今私は、明日香を傷つけた。その私が泣くな…そんなのずるいよ…！

私は涙を止めようと、手の甲で目を押さえた。でも涙は中々止まらなかった。

「明日香、ごめんね…！」

私は、自分のずるさを責めながら、明日香に対する謝罪の言葉を何度も繰り返した。

「もういいよ…。」

泣きながら謝っていた私を黙って見ていた明日香が、ため息混じりに言葉を発した。私はその声に反応し、ピクツと体を震わせた。

“もういい”とは、どんな意味合いなんだろう。拒絶の言葉なのか…それとも許しなのか…。それが判断出来なくて、私は謝罪の言葉も泣くのも抑えて、緊張しながら明日香の次の言葉を待った。でも次の言葉が中々来なかつたので、顔を上げ恐る恐る明日香を見た。そこにはさつきまでの怖い目をした明日香はいなかつた。彼女は、ただ呆れたように私を見て、そして

「何か、もうどうでも良くなっちゃった。…だって沙和、しなくてもいい心配してるんだもん。」

明日香の言葉の真意が分からなくて、私は明日香を見つめた。すると明日香は真面目な顔になり、私を真つすぐに見据えた。

「ねえ沙和、田中と私がどうなったって、沙和の…高瀬君に対する気持ちは変わらないでしょ？そんなの私にだって分かるよ。私達のことなんて、関係ないじゃん。私達がどうなったって、私は沙和の気持ちを否定なんてしないよ。むしろ応援するよ。」

それを聞いて、止まっていた涙がまた溢れ出した。でもその涙は、明らかにさつきまでのものとは違っていた。

明日香の言葉が嬉しくて、そして自分のしたことが申し訳なくて

…。

「でもさ、ちゃんと聞かせてよ。」

と、明日香は言葉を続けた。

「高瀬君のこと、どう思ってるの？」

「…好き、だと思う。」

私は涙を拭いながら明日香にそう言った。

「“思う”じゃないでしょ？」

明日香が再び私に言葉を求めた。

私は自分の気持ちを、初めてはつきりと人に告げることには気恥ずかしさを感じたけど、明日香にはちゃんと言わなければいけないと思ひ素直に頷いた。そして

「私、高瀬君のことが好き。」

と、真つすぐに明日香を見て、告げた。

「うん、わかった。」

それを聞いて、明日香が嬉しそうに微笑んだ。

「やっぱり私の言った通りだったでしょ。ちゃんと瑞穂にも言うんだよ。」

そう言つて明日香が笑う。その隣に、穏やかな気持ちで歩いている私が出た。まだ少し罪悪感はあるものの、やっと本当の事が言えたお陰で、さつきまで心を覆っていた重い雲はなくなっていた。

「そうだ沙和、明日から私も図書室付き合つから。」

思いがけない彼女の言葉。私は大きく目を見開いた。

「…いいの？」

私が図書室に通っているのは、高瀬君を見る為。その高瀬君がいる野球部には、田中君もいるのに…。

「うん。今まで沙和に付き合ってもらつてたんだし、今度は私が付き合つよ。…ただ私は沙和と違って、図書室に本を読みに行くんだからね。」

多分明日香の心にも、晴れない雲が少なからずあると思う。それなのに、私の為に一緒に図書室に行つてくれるなんて…。

私はまた明日香に“ごめんね”と言いつつになつただけど、それをぐつと飲み込んで、代わりに

「ありがとう。」

と、心からの感謝の言葉を告げた。

## 自分に出来ること

「こつやって野球部の練習を見るのも、久しぶりだね。」  
瑞穂が私に向かつて、そう呟いた。

放課後の図書室。今日は塾が休みだという瑞穂と、あれから毎日付き合ってくれている明日香と三人で、窓際の席に座っていた。

「野球部、凄く気合い入ってるね。」  
「うん、そうだね。」

私は瑞穂の言葉に相づちを打ちながら、懸命に練習をしている高瀬君の姿を目で追った。

私達の同級生である三年生にとって中学最後となる大会が始まっていて、部活をやっている子達はみんな、必死で練習に励んでいた。もし試合に負ければ部活を引退しなくてはならない。けれど一日でも長く続けたい、そして、今まで頑張ってきた練習の成果を発揮したい、そう感じているのが良く分かった。一年生や二年生も同じ気持ちのようで、三年生に負けられない気合いを入れて練習している。勿論それは、野球部も例外ではなかった。

その練習風景をじつと見ていた私は、ふとそこから視線を外し、瑞穂とは私を挟んで逆に座っている明日香をちらつと見た。すると明日香も、まるで私達の会話に誘われたかのように、本から目を離し校庭を見ていた。

明日香が私に付き合ってくれるようになったこの数日間、私はあることに気付いていた。

高瀬君への気持ちを告白したあの日、“純粹に本を読みに行く”と明日香は言っていて、その通りに毎日本を読んでいた。けれど時折ふと顔を上げ、窓の外に視線を送っていた。多分その視線の先には、田中君の姿があるのだろう。

未だに二人は別れる訳でもなく、かといって話をする訳でもない

という状態が続いていた。でもそれは、相手のことが嫌いになったから…という理由ではなく、むしろ好きだからなんだと思う。明日香は“好きだから一緒にいたい”という気持ちが出ないことが、好きだからこそ受け入れられないでいる。だから強がって、もう相手なんかどうでもいいという振りをしているけれど、忘れることも出来なくて、それで気になって田中君を見てしまっただけだ。うか。

「ねえ、」

校庭を見ていた明日香が、私達に視線を向けた。明日香の呼び掛けに、瑞穂と私がそれぞれの見ていたものから明日香へと目を移すと、明日香が

「今日の日曜日、暇？」

と、私達に問いかけてきた。

「うん、別に予定はないけど…何で？」

そう私が聞き返すと、明日香は

「野球部の試合、見に行かない？」

と、私達が予想もなかった誘いの言葉を発した。

私はびっくりして返事が出来ず、その答えを求めようと瑞穂を見た。すると瑞穂も同じように驚いた顔をして、私を見ていた。

明日香がそんな提案をしたのは、きつと高瀬君を好きな私の為なのだろう。でも野球部の試合を見に行くという事は、明日香にとっては辛いことなんじゃないだろうか…。だってそこに行ったら、明日香より野球を取ろうとしている田中君の姿を、目の当たりにしてしまうんだから。

「うん、行こうよ。」

さっきまで驚いた顔をしていた瑞穂が、急に明日香の誘いに賛同した。そして

「勿論、沙和も行くよね。」

と、私に同意を求めた。

「う、うん。」

断る理由も見つからず、私が戸惑いながら答えると、明日香が

「じゃあ決定ね。」

と、満面の笑顔を見せた。

“トイレに行ってくる”といつて席を立った明日香の姿を、私は複雑な気持ちで目で追った。そんな明日香と私の行動を見て、瑞穂が

「沙和。」

と、私の名前を呼んだ。

「何？」

と返事して瑞穂に顔を向けると、瑞穂が

「明日香多分、沙和の為だけに言ったんじゃないと思うよ。」  
と話し始めた。

「明日香、今田中君と凄く微妙な関係じゃない。そういう状態ってやっぱり嫌じゃん。だからさ、きつと、どうにかしたいって思っているとと思うんだ。野球部の試合を見に行くって言ったのは、今の気持ちを何とかするきっかけが欲しいからなんじゃないかな。」

春休みのあの日以来、私達に涙を見せない明日香。それはなるべく田中君のことを考えないようにしているからなのか、それとも大分気持ちが落ち着いたからなのか、私には分からない。でももし笑顔の陰で、明日香がそんな風に悩んでるんだとしたら。明日香がどうにも出来ない気持ちを抱えてるんだとしたら…。

「何か、私達に出来る事ってないのかな。」

私は真っすぐ瑞穂を見た。

「友達なんだし、出来るなら何とかしてあげたいよ。」

高瀬君の事を黙っていた私を、明日香は笑顔で許してくれた。それでどんなに私の心は救われただろう。明日香が救ってくれたように、私も明日香の心を救ってあげたい。それが無理だとしても、少しでも明日香の心を楽にしてあげたい。

「…無いんじゃないかな。」



私の言葉を黙って聞いていた瑞穂が、しばらく考えた後にポツリと呟いた。それを聞いた私は

「何で?!」

と思わず大きな声を出してしまい、直ぐ様今自分達がいる場所が図書室であることを思い出し、恐る恐る後ろを向いて私の声に顔を上げ注目している数人の生徒に

「ごめんなさい…。」

と頭を下げた。そしてまた瑞穂に向き直り、今度は小さな声で

「何で無いの?」

と囁いた。私が大声を出して注目されたことで恥ずかしそうな顔をしていた瑞穂は、私を睨みつけて、それから私の方に顔を近付けてきて言った。

「そりゃあ私だって、何とか出来るならしてあげたいよ。でもさ、明日香が何も言わないなら何も出来ないじゃない。：明日香が何も言わないのは、私達を心配させたくないからっていうのもあると思うけど、でもそれだけじゃなくて、多分、自分で何とかしたいって思ってるからじゃないのかな。結局本当に何とか出来るのって、明日香本人と、田中君だけだから。」

それを聞いて、私は俯いた。

私は明日香に何もしてあげられないのだろうか。本当に何とか出来るのは本人達だけだって、それは何となく分かるけど。でも、友達なのに…。

「出来ることと言ったら、私達は普通にして、それで、明日香と一緒に野球部の試合を見に行くこと位だと思うよ。だからさ、沙和もあんまり明日香の事気にしすぎないで、今日みたいに高瀬君を応援すればいいよ。」

俯いた私の顔を覗き込みながら瑞穂がそう言ったので、私は複雑な気持ちを抱きながらもこくと頷いた。

## 観戦

待ち合わせ場所に予定よりも早く着いた私は、そわそわしながら明日香と瑞穂を待った。野球部の試合を見に行くと言い出した明日香のことが気になって仕方なかった。

明日香は本当に、今日の野球部の試合を見に行かれるのだろうか。瑞穂が言ったように、明日香は今の田中君との状態を何とかしたいと思っっているかもしれない。それは私も理解出来るけど、でもそれは、それなりの勇気がないと出来ることじゃない。だって“何とかする”っていうのは、必ずしも良い方向にいくとは限らないから。

田中君の試合をしている姿を見て、明日香がやっぱり田中君が好きと認識して、どんなことがあっても一緒にいたいと思えたなら、それは凄く良いことで、私達も心から安心するし応援する。でも逆に、明日香より野球が大事だということを見せ付けられたら……。

どういう結果になるにしろ、“何とかする”っていうのは自分で決断を出すという事で、それは自分で自分の状況を変えろという、凄く重要なこと。もし私だったら、そんな重要なことを決めるのは怖くて、逃げ出したくなるかもしれない。だから明日香ももしかしたら“行かない”って言いだすんじゃないかって、心配だった。

先に待ち合わせ場所に来たのは瑞穂だった。

“おはよう”と挨拶を交わしたけど、その後私達のどちらも何も言うことをせず、暫く沈黙が流れた。

もしかしたら瑞穂も、明日香の事が気になっているのかもしれない。“気にするな”とは言ったけど、やっぱり友達だから、気にしないことなんて出来ないと思う。そんな瑞穂の気持ちを感じて、私は

「明日香、来るかな……。」

と、不安な気持ちを瑞穂に伝えた。

「……どうだろう。」

瑞穂はそう私の言葉に返事をし、それから

「来ても来なくても、普通にしようね。」  
と言った。

「うん、普通には、なるべくするけど…、でも明日香がもし来なかったら、今日、どうすればいいの？」

瑞穂の言葉に答えつつも、私は再び質問を投げ掛けた。すると

「えー、別に普通に試合見に行けばいいんじゃないの？だって沙和、見たいでしょ？」

と、凶星をつかれた。

そう。私がそわそわしていた原因。それは明日香のことが心配だから、だけじゃなく、高瀬君が試合をしている所を見れるのが楽しみだからというのもあった。いつも校庭で練習をしている高瀬君を見ていたけど、試合をしている姿を見るのは今日が初めてだ。高瀬君はどんな顔をして試合に臨むんだろう。それを考えるだけでドキドキして、絶対見たいと思っていた。

「おはよー！」

私がそんなことを考えていた時、明日香が笑顔で私達に駆け寄ってきた。

明日香、来たんだ。

私はどんな顔をしていいのか分からなくて、ちらつと瑞穂を見た。それに気付いた瑞穂は

「普通にするんだよ。」

と、明日香に聞こえないようにボソツと私に話し掛けて、それから「明日香おはよう。」

と、いつも通りに明日香に挨拶をした。私も瑞穂に言われたようになるべくいつも通りに

「おはよう。」

と挨拶をして、それから

「楽しみだね。」

などと言いながら、球場に向かった。

球場に着くと、私達は前の方の席に腰を下ろした。その前には、ベンチ入り出来なかつた野球部の男子達が応援をする為に陣取っている。周りには野球部員の家族らしき人やうちの学校の生徒が、ちらほらと見受けられた。

正直、見に来てる人が少ないなって思ったけど、まだ地方の大会なんだし、こんなものかもしれない。

「この試合に勝てば、準決勝らしいよ。で、準決勝に勝ったら県大会に行けるんだって。」

そう明日香が教えてくれた。

「じゃあ、一杯応援しなくちゃね。」

私が言うと、

「高瀬君以外の人もちゃんと応援するんだよ。」

と、からかうように瑞穂が言った。

そんな話をしてるうちに、試合が始まった。

互いの学校の選手が挨拶をした後、うちの学校の野球部員がバッターボックスに立った。瑞穂によると、どうやらそれは先攻と言うらしい。

バッターボックスに立っていた男子がボールを打った。でもその男子はその場から動こうとしない。

「なんで止まってるの?」

不思議に思い尋ねると

「ファールだからだよ。」

と瑞穂が教えてくれた。

その後も私は、何かある度に瑞穂に質問した。何度かそれを繰り返した後

「野球部の人が好きなら、もう少し野球のルール、勉強しなよ。」  
と、呆れたように瑞穂に告げられ、私は

「…はあい。」

とふてくされながら返事をした。そんなやり取りを聞いて、瑞穂の

隣で明日香が笑った。

試合は両チーム共点が入らないまま流れていき、やっと点が入ったのは六回だった。その回最初のバッターがホームランを打ったのだ。

ワーツという大きな喚声が、球場にこだまする。それを聞いた私  
が、瑞穂の腕を揺すりながら

「今の、入ったの？」

と尋ねると、瑞穂が満面の笑みで

「うん、ホームランだよ。一点入った。」

と私を見た。

「やったあ！凄い！ねえ、今打ったの何て人？」

「確か：一組の、林君だと思う。」

明日香に名前を覚えてもらった私達は

「林君凄い！かっこいいね。」

「うまくいけば、このまま林君のお陰で勝てるかもよ。」

と、話したこともなく顔もうろ覚えの彼を褒め合った。

しかし私達の喜びは、束の間のものだった。七回裏、うちの学校のエラーで、相手に二点が入ってしまったのだ。

「やばいよ。」

「うん。しかも今のせいで、空気悪くなったよね。」

「どうしよう…、このままだと負けちゃうよ。」

私達は口々に不安を言い、それからこのまま何もしない訳にはいかないと思って、スタンドの周りにいるみんなと同じように大きな声で応援し始めた。でも次の回は点を入れることが出来ず、とうとう最終回になってしまった。

「これで点入れなかったら負けだよ。」

瑞穂の言葉に不安が募る。

「きつと大丈夫だよ。きつと点入れて、同点どころか逆転だって出来ちゃうよ。」

明日香の、それを信じているというような力強い声。私はその声にうんと頷いて、グラウンドに声援を送った。

一人目の選手がバッターボックスに立った。周りの人達が「頑張れー！」

と口々に叫ぶ。私達も同じように彼を応援した。

それに応えようとしたのか、彼は一球目でバットを大きく振った。でも彼の打ったボールは、あっさりと相手の選手に取られてしまった。

それを見て、スタンドの空気が割れた。ため息をついて“もう無理だ”と言う人達と、希望を捨てないで必死に応援を続ける人達とに分かれた。

私の中にも“もう無理かも”という気持ちはあった。でも、どうしても諦めきれなかった。

この試合に負けたら、三年生は部活を引退しなくてはいけない。それは、学校の校庭で高瀬君が野球をしている姿を見られなくなるという事だ。でもそんなの嫌だった。毎日一生懸命練習をしている彼を私は知っている。そしてそれに弱音を吐くどころか、仲間と楽しそうにしている彼の姿も。彼は本当に野球が好きなんだと思う。だからここで負けてしまつて部活を引退してしまつのも、彼の悲しい顔も見たくない…！

「次、高瀬君だよ。」

瑞穂の声に、心臓がどくと鳴った。そしてまるで自分のことみたいに緊張して、足が震え出した。

高瀬君はいつもと同じ様に背筋を伸ばして、バッターボックスに向かった。その彼の姿を見て、私はどうしても黙っていることが出来ず

「高瀬君！頑張つて！」  
と大声で叫んだ。

彼は今、何を思っているのだろう。彼が打たなかったらいいよ負けが近づいてしまうという、この重大な場面で。

「高瀬君！頑張つて！」

大きく鼓動する心臓と震える足を止められないまま、私はバツタバックスに入った彼の姿を見つめて何度も彼の名前を叫んだ。

## きらめき

「高瀬君！頑張ってる！」

バッテリーボックスに立つ彼に、みんなが声援を送る。何人かの人は「もう無理だよ」という顔をしてグラウンドを見ているけど、そんなの構ってられない。

相手のピッチャーがボールを投げた。その一球目を、高瀬君は見送った。

「大丈夫かな。」

瑞穂が不安そうな顔をして高瀬君を見る。

「大丈夫だよ。高瀬君、あんなに練習頑張ってたんだもん、絶対に打つよ！」

私は不安を取り去るように、力強い声で瑞穂にそう告げた。

二球目はボールだった。それを見ていた私の心臓は、壊れてしまいくらい程大きく鼓動していた。とにかく彼に頑張ってもらいたかった。彼自身の手で、勝利を掴んで欲しかった。私は緊張した面持ちで祈る様に彼を見つめ、再び

「高瀬君！頑張ってる！」

と彼の名前を叫んだ。

次のボールを、相手のピッチャーが投げようとしている。高瀬君がそれを真剣な表情で見据えているのが分かる。次の瞬間、ボールが投げられた。高瀬君はグッとバットを引き寄せて、そしてそれを大きく振った。

“カーン”といういい音がして、ボールが飛んで行く。そしてそれは後ろの方の、誰もいない所に落ちた。

「沙和！やったよ！」

興奮した面持ちで、瑞穂が私の手を握り振り回す。

「うん！！！」

まるで自分の事の様に嬉しくて、私は満面の笑みで瑞穂に応えた。



相手の選手がボールを追いかけている間、高瀬君は必死で走って、そして二塁にたどり着いた。

「凄いじゃん、沙和！高瀬君、格好いいね！」

明日香の声と

「うまくいけば、本当に逆転できるかもよ！」

という瑞穂の声。

私はまだ興奮が覚めなくて、足を震わせたまま

「うん！！」

と大きく頷いて、このまま勝ってくれる事をひたすら願った。

でも、私達の願いも虚しく、次の選手は三振に終わってしまった。

「…次打たなかったら、負けちゃうよ。」

先程とは一転した瑞穂のため息混じりの声に不安と焦りを感じ、私は顔の前で手を合わせながら、祈るように目を瞑った。

まだ、高瀬君が野球をしている姿を見たい。楽しそうに、そして、一生懸命野球をしている彼の姿を。だから、お願い…！勝つて！

「次って、田中君だよね…。」

瑞穂の呟くような声。私はそれに反応して、瞑っていた目を開いてグラウンドを見た。その先には、今正にバッターボックスに入ろうとしている、田中君の姿があった。

さっきから鳴り止まなかった声援が、更に大きくなった。その真ん中に彼は立っている。

恐らく田中君は今、凄いプレッシャーを感じているだろう。自分が打たなければ負けてしまうという重大な責任と、周りの期待と祈りを、一身に背負っているのだから。

「田中君、頑張つて！」

私は大きな声で田中君の名前を呼んだ。瑞穂も同じように、田中君に声援を送っている。でも明日香だけは、それをしなかった。ただ黙って、田中君をじっと見ていた。

明日香が何を思っているのか気になって彼女を見つめたけど、次の瞬間さらに大きくなった周りの声に、私の視線はグラウンドに戻された。

「何？どうしたの？」

慌てて何があったのか尋ねると

「ストライク取られたんだよ。」

と、神妙な面持ちをしながら瑞穂が教えてくれた。

打って…！

私はまた祈るように手を合わせて田中君を見た。きっと私達の学校を応援しているみんなが、そう祈っているだろう。前にいる野球部の人達は、声が枯れそうな位必死になって、田中君を応援している。

そんなみんなの祈りが通じたかのように、田中君がボールを打った。

「打ったよ！」

私はそれを見て、大はしゃぎで瑞穂の腕を揺する。

そのボールはどんどん遠くに飛んで行った。でも

「…ファールだよ。」

と、ボールがフェンスに当たりそうな所で、瑞穂がため息混じりに言った。

「あと一球か…。」

さっきまで大きかった声援が小さくなった。何人かの野球部員は泣いていた。…きつともう負ける、みんながそう思っていただろう。私も、悲しいけど、そう思った。

そんな風に、みんなが諦めかけていたその時だった。

「田中！頑張つて！」

明日香が、大きな声で田中君の名前を呼んだ。

その声にはっとして、私は明日香に顔を向けた。

明日香は今にも泣きそうな顔をしていて、でも、まだ諦めていないというように、強い眼差しで田中君をじっと見据えていた。そし

て再び田中君に向かって声援を送った。

きつと明日香は信じてるんだ。例え周りのみんなが諦めたとしても、田中君だけは諦めないということ。だから明日香も諦めないんだ。

野球をしている田中君を、明日香はずっと見てきた。だから田中君が凄く野球を好きなことを、誰よりも良く知っているのだろう。その野球のせいで二人の仲はうまくいかなくなっているけれど、田中君の想いが分かるから、応援せずにはいられないんだ…。

私は明日香から目を離して、再びバッターボックスに立っている田中君を見た。田中君は諦めた素振りなんて全く見せずに、真っ直ぐピッチャーを見据えていた。

「頑張つて！」

私は明日香がしたように、田中君に声援を送った。それを聞いた瑞穂も、そして野球部員や周りの人達も、再び田中君に声援を送り出した。

静かになっていた観客席が再び盛り上がったせいか、グラウンドにいた選手達が顔を上げた。でも田中君はそれに反応することもなく、じつとピッチャーを見据えている。“何があっても打つてやる”。きつとそんな気持ちで田中君はいるのだろう。

相手のピッチャーが、上げていた顔を田中君の方に戻した。…いよいよ最後の一球となるかもしれないボールが投げられるんだ。私は祈りながら、ぎゅっと目を瞑った。

“カーン”という音と共に、周りの声が更に大きくなった。田中君がボールを打ったんだ…！その音と声に導かれ、私はぱっと目を開けた。

田中君の打ったボールは大きく弧を描いて、そして、グラウンドの後ろの方にいた選手のグローブに収められた。

負けたんだ…。

私は顔の前で合わせていた手をすんと下に落とした。

終わってしまったという現実が、私を悲しい気持ちにさせる。

グラウンドでは相手の選手達が一ヶ所に駆け寄って、嬉しそうに騒いでいた。それと引き替えに、私の学校の野球部員はがっくりとうなだれるようにしてその場に立っていた。

田中君がバットを落として、蹲った。片腕で顔を覆っているその体勢で、彼が泣いていることが分かった。

彼は今、どんなにか悔しい思いを抱いているだろう。最後のバッターとしてみんなからのプレッシャーを一身に背負い、それに負けることなく、ただ勝つことを信じてバットを振った。でもその一振りが、敗北へと導いてしまったのだから。

そんな田中君の元へ、暫く二塁で佇んでいた高瀬君が歩み寄った。そして何かぼそぼそと田中君に声をかけ、手を伸ばして田中君を立ち上がらせた。そして、二人でベンチに向かった。

泣いている田中君の横で、高瀬君は真っ直ぐ背筋を伸ばし顔を上に向けていた。それは、彼が空を見ているようにも見えたけれど、でももしかしたら、必死で泣くのを我慢して…の行為なんじゃないだろうか。

彼の気持ちを思うと凄く切なくて、そしてそうしている彼の姿がなんだかとても綺麗に見えて、涙が溢れそうになった。

「明日香？大丈夫?!」

私の横で、瑞穂が慌てたように明日香に声をかけた。それを聞いて、私は溢れそうになっていた涙を必死で抑えて、明日香へと顔を向けた。

明日香は下を向いて泣いていた。いや、泣いているというよりも、泣きじゃくっていた。

「明日香、泣かないで。」

私も慌てて、明日香に声をかけた。

「負けちゃったけど……でもそれ、田中君のせいじゃないよ。田中君頑張ったじゃん。」

「そうだよ。田中君の前の人が打ってたらこんな風に負けなかったんだし。たまたま田中君が最後だったから田中君のせいに見えただけ。でも田中君は悪くないよ。」

私と瑞穂は田中君を庇うように、明日香に代わる代わる慰めの言葉をかけたけど、明日香の涙は止まることがなかった。

## 決断

「明日香、大丈夫かな。」

球場から帰る途中に立ち寄ったファーストフード店で、私は向かいの席に座っている瑞穂に、ため息混じりに声をかけた。

「…どうだろ。」

私の問いかけに、瑞穂はそれだけ言うと、目の前にあったコーラの入ったカップのストローに口を付けた。それを見て、私もオレシジューズの入ったカップのストローに口を付ける。

球場で泣きじゃくっていた明日香を、私達は家まで送ろうとしたのだけれど、明日香は“大丈夫”と言って一人で帰ってしまった。でも本当に、一人で帰ってしまったの良かったのだろうか。もしかしたら今も泣いているかもしれないのに…。

その時、瑞穂のバッグの中からピロンという音がした。それに気付いた瑞穂が携帯電話を取り出して、カチャカチャとボタンを操作する。それが一段落すると、瑞穂は携帯電話をテーブルに置いて、それから

「明日香、家に着いたってさ。」  
と私に教えてくれた。

「本当？良かった。」

私はひとまず安心して、再びストローに口を付け、そして球場での明日香を思い出した。

最後の打席に立った田中君に、必死に声援を送った明日香。周りのみんなが諦めかけても、明日香は諦めなかった。でも負けてしまった。田中君は蹲って泣いていた。それを見て、明日香も涙を流した。その涙の意味するところって、やっぱり…。

「ねえ、瑞穂。」

私は下を向いていた顔を上げて、瑞穂に声を掛けた。窓の外を見ている瑞穂が、私へと視線を戻す。それを確認してから、私は自分

が思っていた事を口にした。

「明日香さ、多分田中君の事、まだ好きだよな。」

「…そう、かもね。」

はつきり“そう”とは言わなかったけれど、瑞穂も同じ事を思っていたのだろう。歯切れの悪い口調だったけど、それを認めた。

「やっぱり私、明日香のこと応援したい。」

「それは私も思いつけど、でも、どうやって？」

私の言葉を聞いて、瑞穂は両腕をテーブルに置き、前のめりの姿勢で私を見据えた。

「この前も言っただけど、明日香が何も言わないなら、私達は何も出  
来ないよ。明日香が今日一人で帰ったのだって、きつと何か考えた  
いことがあったからだよ。その明日香の気持ちを無視して何かする  
なんて良くないよ。」

瑞穂の言葉に、私は一瞬うっと口籠もった。でも、

「もしかしたら言えないだけかもしれないじゃん。」

と反論をし、

「私、明日香に、どうしたいのか聞いてみる。」

と言った。

「止めときなよ。」

と瑞穂は言っただけど、どうしても明日香の力になってあげたくて、  
私は絶対に明日香の気持ちを聞こうと決心した。

そうは思うものの、それを明日香に聞くきっかけが中々掴めな  
かった。

次の日登校してきた明日香は普通に明るくて、そんな話をしてい  
いのかという躊躇が私の中に出てきた。…やっぱり瑞穂のいう通り、  
明日香が何か言うまで黙ってた方がいいのかな。そんな事を思っ  
ているうちに時間は流れ、とうとう放課後になってしまった。

「沙和、帰ろう。」

明日香のいつも通りの明るい声に、私は急いで身支度を整えた。そして瑞穂と三人で廊下に出る。

「ねえ、これからカラオケ行かない？」

廊下を歩いていると、明日香が唐突にそんな誘いをかけてきた。

急な誘いに少し戸惑ったけど、もしかしたら明日香の気持ちを聞けるチャンスかもしれないと思い、私は

「うん、行く。」

と頷いて、それから、瑞穂を見た。瑞穂は

「私は……。」

と言い淀んでいる。もしかしたら今日も塾があるのかもしれない。

その時、急に明日香が足を止めた。どうしたのかと思いつながら私も足を止め、そして、明日香の視線を辿った。

明日香の視線の先には、二人の男子の後ろ姿があった。それが高瀬君と田中君だと気づき、私の心臓がどくと鳴った。

昨日の試合の後、必死に涙を堪えていただろう高瀬君の姿が浮かぶ。そして最後にバットを振った田中君の姿も。“残念だったね、でもかっこよかったよ”そう二人に声を掛けたかった。でも明日香を尻目に、二人に声を掛けるのはどうなんだろう……。

悩んでいた私の隣で、明日香が動いた。

「田中。」

と声を掛けながら、明日香が二人に駆け寄る。

思いもしなかった明日香の行動に、私と瑞穂は呆然とした。

明日香が

「まだ落ち込んでるの？」

と、田中君に声を掛けた。それを聞いた田中君が

「うるせえよ。」

と言いつつ明日香を見る。

「まあ負けちゃったけどさ、また高校に入ったら野球できるんだし、そんなに落ち込まないで元気だしなよ。」



今まで田中君に挨拶すらしなかった明日香が、田中君と話して  
…。私と瑞穂はびっくりして、顔を見合わせた。

「まあ…そうだけど。」

そう答えた田中君の表情はふて腐れていたけど、でもその目は、  
なんだかほっとしている様にも見えた。

「そうだ、私達これからカラオケ行くんだけど、二人も行かない？」

「俺達は…、これから野球部に顔出すから。」

「そっか。じゃあまた今度ね。」

そう言つと明日香は

「じゃあね。」

と告げて、田中君も

「じゃあ。」

と言つて、高瀬君と歩きだした。

「沙和、高瀬君に何も言わなくて良かったの？」

私達の所に戻ってきた明日香が、そう私に尋ねる。

確かにさっきまで、高瀬君達に声を掛けたいと思つていた。でも  
今私達の目の前で明日香がした意外な行動に、私はそんなことはす  
っかり忘れてしまつていた。

「明日香、田中君と、仲直りしたの？」

私は明日香の問いかけに答える代わりに、明日香に質問を投げ掛  
けた。すると明日香は一瞬間を空けてから

「昨日、田中と話したんだ。」

と話し始めた。

「結論から言つと、私、田中と別れたんだ。」

明日香の言葉にびっくりして、私と瑞穂は再び顔を見合わせた。  
だつてさっきあんなに仲良さそうに話してたのに？別れたなんて信  
じられない…！そんな私達の驚きを余所に、明日香の言葉は続いた。

「昨日田中が試合してる所見て、分かつちゃったんだ。やっぱり田中は野球が好きなんだなって。今までも知ってはいたけど、でも私より野球の方が好きだなんて嫌だなって思ってた。…でもさ、そんなこと言っただって無理なんだよね。」

悲しげに笑う明日香を、私と瑞穂はじっと見つめた。昨日私達と別れた後、明日香は瑞穂の言った通り、色々考えてたんだ…。

「分かつてはいるんだけど、でも、好きな人と一緒にいたいっていうのは変わらないんだよね。だから仲直りしてまた付き合っても、同じ事で喧嘩しちゃうと思ってる…。だから別れちゃった。」

「…本当に、それでいいの？」

心配そうな顔をして、瑞穂が明日香に尋ねた。すると明日香は“うん”と頷いて

「そうするのが、一番良かったんだよ。」  
と言った。

「別れたといつても、全く口きかない訳じゃないし…。今までもずっと私達話さなかったじゃん？それ、結構嫌だったんだよね。だからね、友達になるうって。田中も同じこと思ってたみたいで、うんって言ってくれた。」

すつきりしたような明日香の表情。私はそれを見て泣きそうになった。

明日香達はそれが一番いい方法だと思って、別れて友達になった。その決断を否定する気はないけど、それまでずっと悩んでいた明日香の気持ちを思うと、涙が溢れそうになった。

「ちよつと！何で沙和が泣きそうな顔してるの？」

それに気付いた明日香が、私に声を掛けた。

「泣かないでよね！釣られるじゃん。」

やっぱり明日香だって、別れたことが悲しくない訳じゃないんだ。でも頑張って田中君に声を掛けて、そしてこうして笑っている。そんな明日香を前にして、私が泣く訳にはいかない。私は慌てて涙を拭いた。

「早くカラオケ行こうよ。」

それを見ていた瑞穂が、私達に声を掛けた。

「え？瑞穂、大丈夫なの？」

「勿論。だから早く行って、一杯歌おう！」

「うん、そうだね。」

私達は急いで靴を履いて、駆け出すように外に出た。

## 奇立ち

「沙和、テストどうだった？」

「うーん、普通？」

期末試験の結果を明日香に聞かれ、私はそう答えた。普通というのはクラス内とか学年内で…という意味じゃなく、あくまでも私の中ではってこと。悪くもないけど良くもない、そんな意味だ。

明日香は私の返事を聞いて、

「そっか。私も普通。」

と笑い、

「そっか、私もね、志望校東高に決めたよ。」

と言った。

「本当？」

うんと頷く明日香を見て嬉しくて、自然と笑顔になる。高校に行ったらみんなバラバラになるんだと思っていただけ、明日香と同じ高校行けるんだ。

「絶対一緒に合格しようね！」

そう私が言つと、

「勿論！」

と明日香も笑顔で言ったけど、その後眉をしかめて

「でも、今の成績で大丈夫かな…。」  
と考え込んだ。

「うん…、どうだろう。」

と私も考えて、

「夏休みもちゃんと勉強すれば、きっと何とかなるよ。」  
と答えた。

「そっか。そっだね。」

私の答えに明日香も納得したようで、私達は再び笑顔で顔を見合  
わせた。

「そうだ！夏休み、みんなで花火大会行かない？」

勉強の話はあまりしたくないと言わんばかりに、明日香が話題を変えた。

「田中と高瀬君も誘ってさ。行こうよ。」

「え……？」

明日香の悪戯っぽい笑顔に、私は思わず顔を赤くした。まだ行くと決まった訳でもないのに、それを想像して胸がドキドキした。

花火を見に行く、それだけでも嬉しかった。色とりどりの光が空に上がって広がって、それが凄く綺麗で。私は花火が大好きだった。それをみんなと……好きな人と一緒に見れるなんて……。

「絶対行く！」

私が赤い顔をしながらそう言うと、明日香はにっこり笑って

「瑞穂にも言わなきゃね。」

と瑞穂の席に向かい、私もそれを追いかけた。

「瑞穂。」

瑞穂の席から一メートル位離れた場所で、明日香が瑞穂を呼んだ。それを聞いた瑞穂は、はっとしたように手に持っていた何かを慌て机にしまって、それから私達に顔を向けた。

「夏休みさ、みんなで花火見に行こうよ。」

瑞穂のその動作を明日香はさほど気にしなかったらしく、瑞穂の席の前でそう話し掛けた。

「田中と高瀬君も誘おうって、沙和と話してたんだ。」

「……………ない。」

「え？」

瑞穂の声がよく聞き取れず、私と明日香は同時に声を発し瑞穂を見た。すると

「行かないって言ったの！」

と、瑞穂が強い口調で誘いを拒否した。

「何で？」

不思議そうに明日香が聞き返す。

「何で行かないの？花火嫌いなの？」

「そうじゃない。そんな花火が好きとか嫌いとか、そんなこと関係なくて……！」

何故か苛ついたような瑞穂の声。次に続く言葉を待って、私達はじっと瑞穂を見つめた。

「ねえ分かってる？私達受験生だよ。あと半年くらいで受験なんだよ？そんな遊んでる暇ないんじゃないの？」

「そんなこと分かってるよ。」

瑞穂の言葉に、明日香も同じ様な苛ついた口調で反論し始めた。

「別に毎日遊ぶって言うてる訳じゃないじゃん。一日位遊んでもいいでしょ？」

「……いいよね、気楽で。」

瑞穂の嘲るような声。

「悪いけど私そんな余裕ないから、二人で行ってくれば？」

「……何それ。」

瑞穂の言葉に明日香がキレた。

「私達の事馬鹿にしてるの？！そりゃあ、私達は瑞穂みたいに頭のいいとこ受ける訳じゃないよ？でもそれなりに受験のことだって考えてるよ！でも一日位遊んだっていいじゃん！それがいけない事？！」

「……別に、いけないなんて言ってるじゃないでしょ。」

明日香の興奮した声に気圧されたのか瑞穂は視線を背けて、でも苛ついた表情のまま言った。

「とにかく、私は行かないから。」

「もういいよ！」

明日香がキッと瑞穂を睨む。

「もう誘わないよ！……沙和行こう！」

瑞穂の様子が気になって一瞬チラッと瑞穂を見たけど、正直私も瑞穂の言葉にムカついていたので、何も言わず瑞穂に背を向けた。

「沙和、帰ろう。」

明日香の声。振り向くと、当たり前かもしれないけど、そこには瑞穂の姿はなかった。

「……瑞穂は？」

さっきの明日香のキレイな姿を思い出し、ちょっとびくびくしながらも尋ねると

「瑞穂なんて放っておけばいいよ。」

と、苛ついた様な表情で明日香が答えた。

瑞穂はまだ自分の席に座ったままだ。それを尻目に明日香は教室から出て行き、私はその後を追いかけた。

瑞穂と揉めてから数時間が経つ。それから今まで、私はずっと瑞穂の事を考えていた。

瑞穂と友達になつてから二年とちょっと。その間に私は色んな瑞穂を知つたと思う。真面目に勉強をする瑞穂。正論を告げる瑞穂。怒るとちよつと怖い瑞穂。私達の事をからかって楽しんでいる瑞穂。でもどんな時だつて瑞穂は私達の事を想っていてくれて……。あんな言い方をする瑞穂は初めてだ。何であんな事を言つたのか。それには何か理由があるんじゃないだろうか。数時間前の瑞穂の言葉に確かに私もムカついたけど、少し時間が経って冷静になったら、そんな風に思えてきた。それに……。

「明日香。」

私は少し前を歩く明日香を呼んだ。その声に明日香が振り返り

「何？」

と尋ねた。

「やっぱり……、瑞穂と一緒に帰ろうよ。」

私のその言葉に、明日香が再び苛立った顔をした。そして

「沙和、何言ってるの?!」

と、責めるように私に問いかけた。

「あんな事言われて、沙和はムカつかないの？私は無理。瑞穂があんな事言う人だって思わなかった。だから、瑞穂なんて放って帰ろうよ。」

「私だってムカついたよ。でも、瑞穂今まであんな事言った事なかったじゃん。だから、何か理由があるんじゃないのかなって思ったの。だから…瑞穂に確かめようよ。」

苛ついた表情のまま洪る明日香の手を強引に引っ張り、私は教室へと続く道に戻りだした。



## 理由

教室に戻ると、瑞穂はまだ自分の席に座っていた。私達が教室から出てもしうしていたなんて、まるで顔を合わせないようにしているみたいだ。

明日香はまだ渋っていたけど、私はその手を無理矢理引つ張り、躊躇いながらも、席に座ったままの瑞穂に声を掛けた。

私の声を聞いて、瑞穂は一瞬肩を震わせた。けれどその後私の声など気付かなかったように帰り仕度を始めた。

私達の事、無視するつもりかもしれない。私は瑞穂の席の前まで行って、もう一度

「瑞穂。」

と声を掛けた。

「…何。」

瑞穂が私達を見ないまま、低い声で答える。嫌そうな返事。私は戸惑ったけれど、それに負けられないように大きく息を吸ってから

「一緒に帰ろう。」  
と言った。

瑞穂が驚いた様に顔を上げる。でもすぐに視線を逸らした。

「…一人で帰るから。」

「だから言ったじゃん。瑞穂なんか放っておけばいいよ。」

背後から明日香の声。私は明日香に顔を向け、それから再び瑞穂を見た。瑞穂は相変わらず私達を見ようとはしていないくて、もう済んでいるはずの帰り仕度をする振りをしている。明日香もまた瑞穂を見ようとはせず、早くその場から離れたそうにしていた。

何でこんな事になってしまったんだろう…。私達いつもあんなに仲がいいのに。瑞穂があんな事言ったのには何か理由があるはずだと瑞穂に話を聞こうと思ったけど、瑞穂は話すどころか私達を避け

ようとしている。明日香もそんな瑞穂を無視して、帰りたいようにしている。もしこの状態のまま夏休みに入ってしまったら。そしてそのまま仲直りするきっかけを失ってしまったら、そしてどうなるの？

「明日香待つてよ。」

私は明日香に声をかけて、それから瑞穂に視線を移した。そして「瑞穂も一緒に帰ろうよ。」  
と言っただけ、瑞穂はやはり返事をしなかった。

「沙和、もういいじゃん！帰ろう。」

明日香がさつき以上に強く私を引っ張ったので、私はよろける様に瑞穂から数歩離れた。

「自分が悪いのに無視するなんて、凄い嫌な感じ。」

続けて言った明日香の声は、きつと瑞穂にも聞こえただろう。なのに瑞穂は何も言わず、視線を向けることもしない。そんな二人の様子が悲しくて私は

「ちよつと待つてよ！」

と、大きな声を上げた。

私の声に驚いたかのように、明日香が私から手を離し、瑞穂も一瞬だっただけ私を見た。

私はそんな二人に

「ねえ、こんな…喧嘩したままでいいの？」

と尋ねた。その問いに二人は答ええない。黙ったまま私から視線を逸らしている。私は言葉を続けた。

「私達いつも三人でいたのに…喧嘩なんてしたくないよ！もしこのまま仲直りしなかったらどうするの？そんなの嫌だよ。…さつき瑞穂が言っみたいに、受験まで後半年位しかなくて、それが終わったら、私達嫌でも学校離れちゃうのに…！今だって…それに学校離れたって、ずっと友達でいたいよ…！」

話しているうちに、私の目から涙が溢れてきた。明日香がそれに気付いて慌てた様な顔をして、そして不貞腐れたような声で

「…瑞穂が悪いんだよ。」  
と言った。

「瑞穂が私達を馬鹿にするからいけないんだよ。沙和が…何か理由があるからだって言うから戻って来たけど、瑞穂何も言わないじゃん。私達の事無視したままで。凄いムカつく。」

私は泣き顔のまま明日香を見つめた。明日香は不機嫌そうな顔をしていて、でも私の顔をチラツと見ると、仕方なさそうに  
「でも…」

と言葉を続けた。

「瑞穂がちゃんと謝って、それで、何であんな事言ったのか話してくれるなら、許してあげてもいいよ…。」

明日香の言葉を聞いて、私は涙目のまま瑞穂を見た。瑞穂は何もせず、俯いたまま席に座っている。

「瑞穂。」

瑞穂は何も言わない。

「瑞穂…！」

さつきより大きな声で、もう一度瑞穂の名前を呼ぶ。それでも瑞穂は俯いたまま黙っていた。でもしばらくしてから

「…ごめん。」

と、呟くように言った。

それを聞いて私はひとまず安心して、涙を拭った。

「それで、何であんな事言った訳？」

明日香が苛ついた声のまま瑞穂に尋ねた。その問いかけに瑞穂はまた無言になったけど

「理由話さないなら許せない。」

と明日香が言うと

「…テストの点悪くて…イライラして…八つ当たりした。」  
と、言いずらそうに告げた。

「そんなこと？」

明日香が呆れたような声を上げる。

「悪いって言っても、どうせ私達よりはいいんでしょ？」

「それは…そうだけど。」

こんな時でもそれを否定しないなんて瑞穂らしい。明日香と私は顔を見合せて苦笑した。

「そんなに焦らなくてもまだ受験まで半年もあるんだし、瑞穂の成績なら一高受かるって。」

「…約束したの。」

「いい点取るって？まあでもさ、今回悪くても次のテスト頑張れば、先生も親も何も言わないでしょ。」

明日香の言葉を聞いて、瑞穂が首を横に振った。

「違うの。」

「？違うって、何が？」

不思議に思いながら瑞穂を見ると、瑞穂は何故かほんのりと顔を赤くした。

「ねえ瑞穂？何が違うの？」

明日香が返事を急かす様に再び瑞穂に尋ねると、瑞穂は言いずらそうに更に顔を俯けて、それからボソツと話し始めた。

「先輩と…約束したの。」

「誰？先輩って？」

私の問いかけに瑞穂が答えないので、代わりに明日香を見ると、明日香も分からないというように首を振った。仕方なく二人で瑞穂の答えを待つと、しばらくしてから瑞穂が言った。

「塾の先輩で、今年一高に受かった人。その人と約束したの…。私も絶対一高合格するって。」

「それって、男？女？」

私の後ろにいた明日香が瑞穂に近づいて、そして興味津々というように机に手を置いて身を乗り出した。瑞穂は顔を赤くしている。

「男の…先輩。」

「…付き合ってるの？」

「付き合ってる訳じゃないよ。…たまに電話したり、会ったりする

けど。」「

慌てて首を振る瑞穂に、

「でも瑞穂は、その先輩が好きなんですよ。」

と明日香が言った。

「そうなんですよ?」

明日香の二度目の問いかけに、瑞穂は俯いたまま、うん、と頷いた。

「それにしてもずるいよね。私達の事は聞くくせに、自分の事は言わないんだから。」

ちよつと膨れたように話す明日香の隣を、瑞穂が顔を赤くしながら歩く。その瑞穂の横を、私は嬉しい気持ちで歩いた。

「ねえ、その先輩ってどんな人なの?」

私の言葉に、

「やっぱり高校生って大人?」

と、明日香が便乗した。

「大人：かは分からないけど、クラスの男子とはちよつと違うかも。」

「恥ずかしそうに、でも嬉しそうに話す瑞穂を見て、明日香が

「いいなあ。」

とため息をついた。

「いいな、年上の人。何か色々教えてくれそうじゃん?」

「色々って?」

その意味が分からなくて、私は明日香の顔を覗き込んだ。瑞穂も同じ様に思っているらしく、不思議そうに明日香を見る。すると明日香は私達に顔を近付けて

「だから、」

と言って、こそこそつと“色々”の意味を囁いた。

「何言ってるの?!」

その意味を聞いた瑞穂が真っ赤になつて大声を出す。

「でも瑞穂だつて、考えたことあるでしょ？ 相手は高校生なんだから。」

「いたずらっぽく笑う明日香を見て、瑞穂はもごもごと口籠もつた。二人で会つたりしてゐるんでしょ？ …もしかして、もう教わつてたり…する？」

「する訳ないでしょ！ まだ付き合つてないんだから！」

照れながら大きな声を出す瑞穂を見て、明日香が笑う。二人のやり取りを聞いていた私も同じ様に笑つたけど、ふと気になる事を思ひ出して考え込んだ。そういうはこの話、前にも何処かでしたよな…。

「あ…！」

それがいつだったかを思い出して、私は思わず大きな声を上げた。明日香と瑞穂が驚いた様子を私を見る。そんな二人の様子はお構い無しに、私は瑞穂を見た。

「だから瑞穂、あの時、お兄ちゃんの事聞いたんだ！」

「何？ お兄ちゃんのことって？」

不思議そうに明日香が尋ねる。

「前にね、瑞穂が聞いたの。お兄ちゃんて高一だったよねって。それでその…そういう経験つてもうしてるのって。あれって先輩の事気にして、だつたんだあ。」

「やっぱり考えたことあるんじゃない。」

からかう様な目付きで明日香が瑞穂を見た。すると瑞穂は、真っ赤な顔のまま怒つたように背を向け、足早に歩き始めた。

「瑞穂？ 怒つたの？」

慌ててそれを追いかけると

「早くしないと塾に遅れるでしょ！」

と、私達を見ずに瑞穂が言った。

「照れてるんだよ。」

隣で明日香が笑いながら、私に耳打ちする。確かに後ろから見

も、瑞穂の耳が赤くなっているのが分かった。顔なんてもっと真っ赤なんだろっな。

そんな瑞穂が可愛くて、私達は笑いながら瑞穂を追いかけた。

## たからもの

「いつてきまーす。」

花火大会当日。

私は買ったばかりの浴衣をお母さんに着せてもらって、玄関を出た。

みんな可愛いって思ってくれるかな…？

そんな期待と不安を胸に、待ち合わせ場所へと急いだ。

花火大会に行くことが決まった時、明日香が

「みんなで浴衣で行こう。」

と提案した。どうせなら花火大会らしい、そして可愛い格好をして行こうというのだ。

私は明日香の提案に、すぐに賛成した。可愛い格好をしたいのも勿論あったけど、一緒に行く高瀬君に、可愛いって思っただけじゃなかったから。

そう思っただけ、この前お母さんにねだって、浴衣を買いに行ってきた。そこには色々な色や柄の浴衣がならんでいて目移りして、選ぶのが凄く大変だった。そして最終的に買ったのが、白地にピンクの花と蝶の模様がデザインされたこの浴衣。浴衣の柄に合わせてと、お母さんが蝶の髪飾りをつけてくれた。

「ごめんね、遅くなっちゃった。」

着慣れない浴衣で動きづらくて、私ははあはあと息をはずませながら待ち合わせ場所に着いた。そこには明日香と瑞穂が既にいて、それを見て私はほっとした。

最初花火大会に行くのを渋っていた瑞穂は、明日香に

「息抜きも大事なんだから、絶対一緒に行こう。」

と説得されなんとか頷いてくれた。けれど、本当に来るか心配だっ



だから、いてくれて凄く嬉しい。

「沙和の浴衣可愛いね。凄い似合ってる。」

私を見て、明日香がそう褒めてくれた。

「本当？」

嬉しくて照れ臭くて、少し赤くなりながらも自然と顔がほころぶ。

「ありがとう！明日香も凄く似合ってるよ。」

明日香が着ているのは、紫の生地に大きめの白やピンクの花の模様の浴衣。ちよつと大人っぽい浴衣だけど、それが明日香に良く似合ってる。

瑞穂は、白地に小さな水色の花の模様の浴衣。涼しげなその色使いが、瑞穂にぴったりだ。

「きつと男子もびっくりするね。」

と明日香が楽しそうに笑い、それから、高瀬君と田中君を探して歩き始めた。

高瀬君とは、夏休みに入ってから偶然一回だけ会うことが出来たけど、それから一週間以上会ってなかったから、会えるということだけでも凄く嬉しい。

「いたよ。」

明日香が二人を見つけて指を差した。その方向を見た途端、私の心臓はどくと大きく波打った。

高瀬君は黒いTシャツにジーンズという格好だ。普通のラフな格好なんだけど、あまり見ることはない私服姿は妙に新鮮で格好よくて、胸がドキドキする。

明日香が二人に駆け寄った。二人が手にしているかき氷に興味を示したらしい。何処で買ったのか聞くと、田中君が

「あそこ。」

と指差した。その方向には、沢山の人が群がる屋台。

「混んでるね……。」

と、明日香はため息をついたけど

「でも、絶対に食べたい。沙和達も付き合って。」

と屋台に向かった。私は瑞穂と一緒に、明日香の後についていった。

かき氷のお店には色々な味のシロップがあつて、買う順番を待っている間、どれを食べるか盛り上がった。そんな話をしている間も、私は高瀬君が気になって、チラチラと後ろを気にする。

そんな私に気が付いて、瑞穂が

「どうかした？」

と顔を覗き込んだ。

「どうもしないよ。」

と私は言つたけど、明日香に

「高瀬君のこと気にしてるんでしょ。」

と当てられて、顔を赤くした。

「浴衣姿、可愛いって思われてるか気になるんでしょ。」

…それも、あるけど。

「そんなに気になるなら聞いてみたらいいじゃん。」

「む、無理だよ！」

明日香の言葉に、私はブンブンと首を振った。

すると明日香は

「じゃあ、しょうがないから私が聞いてあげるよ。」と、呆れているんだけど楽しいって顔をして言った。

「ねえ、浴衣可愛いでしょ。」

かき氷を買い男子のいる場所に戻ると、明日香が何の前触れもなく、そう二人に聞いた。

本当に聞いている…！私は明日香の唐突な発言にびっくりしたけど、高瀬君が何て答えるのか気になって、じっと聞き耳を立てた。でも高瀬君は、何も言わなかった。

田中君が

「浴衣は可愛いんじゃない？」

とぶざけるように答える。明日香がそれを聞いて

「ひどーい！」

と言って殴る振りをした。

ふざけて笑う二人。私はそれを見て仲いいな、ってちょっと羨ましくなった。

私もあんな風に高瀬君と話したいな。

いつもそう思うんだけど、実際は話し掛ける勇氣も聞く勇氣もない。そんな自分が情けない。

…今日は絶対に、高瀬君といっぱい話す！

私は立ち止まって、自分の気持ちを奮い立たせるように、ほとんど溶けてしまったかき氷だった液体を一気に飲み干した。

空になった容器を、既にいっぱいになりかかっていたゴミ箱に捨て振り返ると、そこにいるはずの明日香達が、いなくなっていた。

もしかして、先行っちゃった…？

焦って辺りを見回すけれど、花火に押し寄せる人達に隠れてしまって、みんなの姿を見つけないことが出来ない。呆然と立つ私を、周りの人達が邪魔そうに見て通り過ぎていく。

一人になってしまった事が不安で泣きそうになった。けれど、みんなまだそんなに遠くには行っていないはずだと思いついて、歩きだそうとした。その時、誰かがグツと私の腕を掴んだので、私は驚いて、掴まれた腕の方向に反射的に目を向けた。

私の腕を掴んだのは高瀬君だった。彼は無表情のまま

「そつちじゃないよ。」

と私に告げる。

見つけてもらって安心して、私は何も言わず、高瀬君をただ見つめた。数秒後高瀬君に

「大丈夫？」

と聞かれなければ、そのままずっと彼を見ていたかもしれない。

「ごめんね…！あ、明日香達は？」

私ははっと我に返って、赤くなった顔を誤魔化すように、キョロ

キヨ口と辺りを見回す振りをした。すると高瀬君は

「あっち。」

と、私とは逆の方向を指して、私がそれを見たことを認めると、すぐにそっちの方向に歩き出した。

歩きづらい人混みと、慣れない浴衣。それでもはぐれる訳にはいかない、歩幅の広い彼を必死で追いかける。途中、人波に流されそうになったり躓きそうになって歩みを止めたりしたけれど、その度に彼は振り向いて、私を見失わないようにしてくれた。

何度かそれが繰り返された時、高瀬君が急に私の隣に並んだ。

「…速い？」

いつもと変わらない口調で私に尋ねる。

「ううん、そんな事ないよ。」

と私が首を振ると、

「でもさつきから、はぐれそうになってる。」

と彼は言った。

私が思ってることバレバレなのかな…。でも彼に気を遣わせたくない。

“大丈夫” そう言おうとしたて、口を開きかけたその時だった。

高瀬君の手が、そっと私の手に触れた。

「はぐれたら困るから…。」

高瀬君はそう言っ、私の手を引いて、歩き出した。

一瞬何が起きたのか分からなくて、私は彼にされるがまま足を踏み出した。でもすぐに手を繋がれているという状況を理解して、もししたら、心臓がどうにかなくなってしまいそうな位に大きく鼓動し始めた。顔も、凄く熱い…！

もう暗くなりだしているというのに、夏の蒸し暑さは昼間と変わり無く私達を包んでいた。けれど、それとは違った熱さが、高瀬君と繋がっている手から、どんどん全身へと広がっていく。

心臓の音が聞こえてしまっうんじゃないかと思った。それ位近い距

離に彼がいた。でも周りの喧騒が、高瀬君に聞こえないように、心臓の音を掻き消してくれる。

きつと高瀬君にとつたら、こんな何でもないことなんだ。春休みにジェットコースターに乗った時と同じように、ただ私を気遣ってくれているだけ。

でも、私の気持ちは、あの時とは違う。

私ね、高瀬君のこと、好きなんだよ。

勇気がなくて口に出せないこの想いが、繋いだ手から伝わって、高瀬君に届けばいいのに。そして、このままずっと高瀬君の手が、離れなければいいのって、思った。

無事にみんなを見つけると、繋いでいた手は自然と離れた。もうちょっと、繋いでいたかったな…。

離れたその手を見つめて、私は残念な気持ちになった。

「何処行つたの？心配したよ。」

瑞穂と明日香が、私に駆け寄る。

「ごめんね。」

心配させてしまったことが申し訳なくて、私は素直に二人に謝った。

花火を見る場所を確保して、始まるのを今か今かと待つ間、明日香が

「高瀬君と二人きりで、何か話した？」

と、私に尋ねた。

「何も…。」

「何も、話さなかったの？」

そう、高瀬君と二人で歩いている間、私達はお互い何も話さなかった。ドキドキしすぎて話せなかったというのもあるけど、彼がす

ぐ側にいて手を繋いでくれている、それだけで幸せだった。

手を繋いで貰ったこと、明日香達に言ったほうがいいかな…。私はちょっと悩んだけど、やっぱり今は秘密にしておこうと思った。二人だけのあの時間を口にすることが、なんだか勿体なかった。それにもし口にしたとしても、あの時のドキドキや幸せな気持ちは、きつとうまく伝えられない。だから、私の心の中だけに、大事に大事にしまっておくことにした。

ドーンという音と共に、歓声が上がる。

空には赤や緑やオレンジなどといった、色とりどりの花火が広がる。

「綺麗だね。」

私達は誰からともなくそう言い、目を輝かせた。

すぐ側には大好きな友達と、大好きな人。そして大好きな花火。

大好きなものに囲まれたその時間は、凄く幸せで、凄く大切に…。

「また来年も来たいな…。」

私の呟きに、明日香は

「うん…、来年もみんなで来れたらいいね。」

と言って、なんだかかしんみりしたような笑顔を見せた。

## 勉強

花火大会より前の、暑い日の事だった。

私はリビングで、ボーツとテレビを見ていた。

本当は、こんな事してちゃいけない。受験の為に勉強をしなくちゃいけない。夏休み前に明日香と話して、それは分かっていた。でも暑いし、分からない所があっても聞く人もいないしで、勉強をする気になんて全然ならなかった。

「沙和、明日香ちゃんから電話よ。」

お母さんの声に、私は抱えていたクッションを置いて、走るように電話口に向かった。

もしかしたら、遊びの誘いかも。

でも明日香の用事は、遊びとは全然関係ないものだった。

「勉強やってる？」

電話に出ると、明日香は私にそう聞いてきた。

「…やってない。」

ちよつと言いづらくて、小さな声でそう言つと

「そっか、私もやってない。」

と、明日香が安心したように電話の向こうで笑った。

「だって暑いしさあ。一人だとヤル気にならないんだよね。」

明日香の言葉に、私はうんうんと頷く。

「だからさ、一緒に勉強しない？」

遊びの誘いじゃなくて残念に思ったけど、でも一人でボーツしてるよりマシかも…と思ひ、私は明日香の誘いに賛成した。

「うん。…でも何処で？」

「家でも沙和んちでもいいけど。」

「私もどっちでもいいけど…でもさ、家だと勉強に飽きちゃって漫画読み出したりしちゃいそう。」

「そっか、そうだね…。」

私達は考え込んだ。

勉強するんだからなるべく静かで、誘惑がなくて、出来たら涼しい所がいい。でも、それって…。

「そうだ！」

何か思いついたように、明日香が声を上げた。

「そういえば先生が、夏休み中も学校に来るって言ってた。図書室も開けてくれるって。だから、学校の図書室にしよう。わからない所があったら先生に聞けるし、一石二鳥じゃん。」

「そうだね。そうしようか。」

次の日、私は勉強道具を持って、一応制服を着て家を出た。

明日香を迎えに行つて、それから、あまりの暑さに我慢出来なくてアイスを買って二人で食べた。そして話をしながら歩き慣れた道をゆっくりと歩いて、いつもの倍くらいの時間をかけて学校に向かった。

「せんせー。」

職員室を覗くと、丁度担任の先生がいたので、入り口から先生に声をかける。すると先生は席に座ったまま顔を上げて

「おー。どうした？」

と大きな声で話し掛けてきた。

「図書室で勉強しようと思って。だから図書室開けて。」

明日香がそう言うと、先生は

「確か開いてるはずだけど…。」

と言いながら立ち上がって、鍵が入っているのだろうケースを覗いて、

「開いてるから、そのまま行つていいぞ。」

と教えてくれた。

「分からない所があったら聞きに来るね。」

そう先生に告げて、私達は図書室に向かった。



図書室には、思ったよりも人がいた。部活があつたのかジャージを着て本棚を物色している生徒や、参考書を重ねているいかにも私達と同じ受験生らしき生徒。

久しぶりの図書室だけど、野球部を見ていた窓際の席が定位置のようになつていた私達は、迷わずその方向に向かった。でもそこには既に、制服を着た男子が座っていた。

「席、取られちゃってるね。」

「…うん。」

残念そうにしている明日香の横で、私の目はその男子の後ろ姿に釘付けになっていた。

あれって、もしかして…。

その男子が参考書を取ろうと横を向いた。それを見て、明日香が興奮した顔を私に向ける。

「あれ、高瀬君じゃん！」

「うん…。」

私は、まさかこんな所で高瀬君に会えると思っていなかったから、予想外の展開に足が震えて、その場に固まった。

明日香はそんな私の手を引き、窓際の、高瀬君が座っている席の前に向かった。そして

「高瀬君。」

と彼に声をかけた。

名前を呼ばれて、高瀬君は訝しげにゆっくりとこっちを見た。私の心臓は、明日香が何の断りもなく高瀬君を呼んだことに動転して、バクバクと大きな音を立てていた。

「勉強してるの？」

明日香が高瀬君に話し掛ける。明日香の問いかけに、彼は何も言わずただ頷いた。

「そこ眺めいいよね。校庭も見えるし。ほら、野球部が練習してるのも見えるじゃん？」

そこから野球部の練習が見える事は、明日香だけじゃなくて私も良く知っている。だってずっとその席に座って野球部を見ていたんだから。

夏休みだというのに、窓の外では野球部の男子が一生懸命練習に励んでいた。そちらに目を向けた高瀬君を見て、引退したけど高瀬君は野球部が気になるんだなって思った。だからその席に座ったんだなって。

「その席ね、沙和もよく座ってたんだよ。」

「え？」

明日香の言葉に、高瀬君と私は同時に声を上げた。その後高瀬君は私に目を向け、私は明日香を見て

「ちよっと、何言ってるの?!」  
と、真つ赤な顔をして慌てた。

ついさつき明日香は“そこから野球部が見える”と言っていて、そしてそのすぐ後に私が座っていたことを高瀬君に告げた。それって普通に考えたら、私がそこから野球部を見ていたっていうことになるよ…!

明日香が慌てる私を見て悪戯っぽく笑った。

絶対わざとだ。明日香はわざと私が野球部を見ていたことが分かるように、高瀬君に話したんだ。

私は赤い顔のまま、明日香を睨み付けた。でも次の瞬間、高瀬君がいる方から“ガタン”という音がしたので、明日香から目を離し高瀬君がいる方を見た。

高瀬君は、並べていたノートとか本を纏めて、席を立とうとしていた。

もしかして、私達うるさかった?だからここから離れようとしてる?

「ごめんね!高瀬君!」

私は慌てて高瀬君に声を掛けた。

「私達あっち行くから、だから、高瀬君はそこにいて。」

私は急いでその場を離れた。だってそこにいたら、高瀬君がまた席を離れそうだったから。

少し歩いて、私は明日香に文句を言おうと横を見た。でも明日香はそこに居なくて、私は焦って後ろを振り返った。

明日香は、さっきよりは離れているけど、まだ高瀬君の近くにいて、そして、高瀬君の方をじっと見ている。

「ちよつと！明日香！」

私は高瀬君に気付かれない程度で明日香を呼んだ。その声に、明日香ははっとしたような顔をして私を見た。

「何してるの?!」

近づいてきた明日香を睨むと、明日香は私の問いかけには答えず、変わりに、何だか神妙な面持ちをして私に言った。

「…沙和、今の、見た？」

「今のって？」

何のことが分からなくて明日香に問い直すと、明日香は

「え…、ううん、何でもない。」

と首を振って、それからもう一度、高瀬君の方を振り返った。

明日香があの日何を見たのか…。

それが分かったのは、夏休みが終わって、新学期が始まってからだった。

## 志望校

新学期が始まった。

放課後。

私はいつもと同じように帰る支度をして、いつもなら先に声をかけてくるはずの明日香の席を振り返った。でもそこに明日香は居なくて、不思議に思いながら、瑞穂の席に向かった。

「明日香は？」

私の言葉に、瑞穂が

「さあ……？」

と首を傾げる。

「何処行っただらうね。」

仕方なく、私達は明日香を待つことにした。

教室から、徐々にみんなが居なくなっていく。

授業で分からないところがあったからと、先生の元に向かう子。

大急ぎで塾に向かう子。

「なんかみんな、勉強頑張ってるね。」

私がそう言うと、

「二学期の成績が受験に影響するからね。」

と、瑞穂が答えた。

「沙和は、大丈夫なの？勉強。お兄ちゃんと高瀬君と、同じ高校行くんでしょ。」

「それなりには、やってるよ。…瑞穂こそ、塾大丈夫なの？先輩と同じ一高行くなら、ちゃんと塾に行かないといけないんじゃないの？」

「心配しなくても、まだ少し時間あるし、勉強もちゃんとしてるから大丈夫だよ。」

好きな人と同じ高校に行きたいという気持ちをお互いにからかつ

て、私達は赤くなつた顔を見合わせた。

何の為に高校に行くのか、その理由は様々だろう。高校で部活を頑張りたいとか、いい大学に行つていい職業に就きたいとか、将来の夢があるとか…。

私は今まで高校に行く理由なんて考えたことはなかった。ただみんなが行くからという理由と、お兄ちゃんがいるからという理由だけで、東高に行こうと思つていた。でも今は、それだけじゃない。

明日香と一緒に…は勿論だけど、高瀬君と同じ高校に行きたい。

正直勉強は好きじゃない。受験だつて面倒くさい。でも一緒にいたいというその想いが、強く強くやる気に繋がってくる。

「そういえばね、分からない所があつたんだ。瑞穂、教えて。」  
私はそう言つて、鞆からノートを取り出した。

瑞穂に勉強を教わつていた私は、後ろにふと気配を感じ振り返つた。するとそこには、何故か神妙な面持ちで私を見つめる明日香が立っていた。私の視線に気付いた瑞穂も顔を上げ、明日香を見る。

「明日香、何処行つてたの？」

明日香はその問いかけには答えず、ただ黙つて私を見ていた。  
「何？どうかしたの？」

瑞穂が明日香に声をかけた。すると明日香はゆっくりと私達に近寄つてきて、そして

「沙和…、あのさ…。」

と、言いずらそうに言葉を発した。

「…なに？」

明日香の様子に胸を騒つかせながら、私は真顔で明日香を見た。明日香は黙り込んで私から目を逸らした。

「なに、どうしたの？気になるから早く言いなよ。」

瑞穂の急かすような言葉。

明日香は逸らしていた視線を私に戻して、そして戸惑いながらも

口を開いた。

「…高瀬君、付属高、行くんだって…。」

「え！嘘！東高行くんじゃないかったの？」

瑞穂の驚いたような声を遠くに感じながら、私はただ黙って明日香を見つめた。

明日香が何を言ったのか分からなかった。いや、正確には、分かっただけ、理解が出来なかった。

明日香、何言ってるんだろう…。また私をからかって嘘ついてるの…？でもそれが嘘ではないことを、明日香の表情は物語っていた。思考が全然働かない。浮かぶのはただ、春休みに観覧車の中で高瀬くんが言った言葉。

「高瀬くん、東高、行ってくて…。だから、同じクラスに、なれたらいいねって…。」

張りついた喉からたどたどしく発せられる私の言葉を聞いて、瑞穂と明日香が心配そうに私を見る。でも私はそれに気付けなかった。混乱した頭の中は、徐々に徐々に明日香の言葉を理解していつても信じたくない思いが、それを遮るように膨らんでいく。

信じたいのは、明日香の言葉が嘘だということだけ。

「…冗談だよな？」

私はポーツとした視線を明日香に向けた。

「また、からかってるんでしょ？」

そんな私の願いを裏切り、明日香が目を伏せて首を振った。

「…夏休みに、図書室で高瀬くんに会ったでしょ？その時高瀬君、付属高の名前が書いてある冊子持ってた…。気になったから、田中に確かめてもらうように頼んだの。」

そして明日香は、田中君から聞いた事を話し始めた。

「高瀬君ね、ずっと付属に行きたかったみたい。付属で野球がしたいからって。でも、ずっとお母さん達に反対されて、近くの高校に行けって言われてたんだって。その近くの高校ってというのが、多

分東高だったんじゃないかな…。でもやっぱり付属に行きたいから、ずっとお母さん達と話してて、それで……」

ガタンッ！

大きな音をたてて、私は立ち上がった。その音に、びっくりしたように明日香達が顔を上げる。

明日香の話はまだ続いていた。でも私は、じっとその話を聞くことが出来なかった。

「沙和？どうしたの？」

心配そうに、瑞穂が私を見上げる。私は

「高瀬君に、直接聞いてくる！」

と言って、二人に背を向けて走り出した。

いつもの私なら考えられない行動。

どうしても直接本人から本当の事を聞きたくて、どうしようもなく、私は三組の教室に向かって走った。

後ろから明日香達が私を呼ぶ声が聞こえる。でも、その足を止めることは出来なかった。

三組の教室に着いて息を切らせながら中を覗くと、もう帰ってしまったのか、高瀬君の姿はそこにはなかった。

もしかしたら自転車置場にいるかもしれない。そう思い再び走りだそうとしたけど、教室から聞こえてきた会話に、思わず足を止めた。

「アユミ、付属行くんだって。」

「えー、そうなの？学校凄く遠くなっちゃうじゃん。友達とも親とも離れて、一人で大丈夫なのかな？」

「誰か他に付属行く人いないの？」

「高瀬が行くらしいよ。あとは、いないんじゃないかな。」

「えー、じゃあ二人だけ？」

「そういえばあの二人、最近良く話してるよね。もしかして、付き

合ってるのかな？」

「嘘、そうなの？」

「分かんないけど。今度アユミに聞いてみる？」

「沙和…。」

いつの間に来たのか、明日香と瑞穂が横に立って、心配そうに私を見つめていた。

私は二人から目を逸らして、泣きそうになる気持ちを必死に抑えながら、唇を噛んで下を向いた。

騒つく教室の中、私は机に置かれた用紙をじっと見つめた。

「今週中に出せよ。」

そうやって先生が配った、進路調査の用紙。

今まで何度か配られたその用紙に、私は迷いもなく東高の名前を記入してきた。

お兄ちゃんがいる東高。明日香も行く東高。そして、高瀬君が行くと言っていた東高。

でも、高瀬君の志望校は、そこじゃない。東高に行っても高瀬君はいない。私じゃない女の子と一緒に、他の高校に行くんだ…。

私は、机の上に置かれた用紙を手にとって、そして、ぐちゃぐちゃに丸めて、机の中に押し込んだ。



## 曇り

なんだか嫌な夢を見て目を覚ました私は、枕元にある時計を手にとった。時間はまだ五時を回ったところ。もう一度寝ようかと目を瞑りかけたけどそんな気にもなれず、布団から出てリビングに向かった。

ここ最近、こんな風に良く眠れない日が続いていた。高瀬君が付属に行くと聞いた、あの日から。

いつもは仕方なく部屋でポーツと時間を潰して、決まった時間に学校へと向かうのだけれど、今日はいつもより早く登校することにした。

人の疎らな廊下を通り、職員室へと向かう。担任の先生を見つけて「先生。」

と声をかけると、先生は授業に使う教材らしきものから目を離して「おう、山口か。おはよう。どうした？」

と、私に笑いかけた。

先生の笑顔に承えるように私も笑いたかったけど、でも、そんな気分にはどうしてもなれなくて、俯いたまま

「おはようございます。」

と挨拶だけ返し、それから

「あの…進路調査の用紙無くしちゃったので、もう一枚下さい。」と告げた。

本当は無くしたんじゃない。あの用紙は、教室の机の中にくしゃくしゃになって入っている。それは分かっているんだけど、無くしたことにはなかった。だってそんな状態の紙を提出する訳にはいかないし、それに、何でそんなにくしゃくしゃなのか聞かれても、答

えることが出来ないから…。

先生は仕方なさそうに引き出しを開けて、一枚の用紙を手渡した。「今日中に出せよ。」

その言葉に頷いて職員室を後にすると、私は教室ではなく図書室へと向かった。

窓際の席に座り、さっき先生から貰った用紙を机に広げる。「山口沙和」と名前だけ記入したところで手が止まってしまい、私はため息をつきながら顔を上げた。

窓の外では野球部の部員らしき男子が数人、ジャージを着て校庭を走ったり、キャッチボールしたりしている。私は頼杖についてそれを見つめた。

ここでこうして校庭を見るのは、放課後野球部の練習を見ていた春以来だ。最初は今日みたいに一人でこの席に座っていたけれど、そのうち明日香や瑞穂も一緒になって…。楽しかったな。

ここから見える野球部はちょっと遠いけど、でも、すぐに高瀬君を見つけることが出来た。誰よりも一生懸命で、誰よりも格好いい彼の姿を。

きつと高瀬君も、こんな風に朝も練習してたんだろつな。野球、本当に好きだもんね。

だから、付属を受験することにしたんだ。

あの頃は、高瀬君が付属に行くなんて思いもしなかった。一緒に東高に行つて、そしてまた高瀬君が野球をしている姿を、近くで見られるんだって信じてた。

でもそれは、違う高校に行つたら、絶対に叶わないんだ。

疎らだった生徒が段々増えてきた。静かだった図書室にも、廊下からの楽しそうな声が聞こえて来る。

明日香達、もう来たかな…。

結局書けなかった進路調査の用紙を鞆にしまい、私はゆっくりと立ち上がって教室へ向かった。

休み時間。

トイレに行くという瑞穂に付き合っ、私達は廊下に出た。賑わう人達の間を他愛ない話をしながら歩いてみると、前方の人混みの中に高瀬君の姿を見つけた。波打つ鼓動を感じながら、私は目を伏せた。

こうして高瀬君と偶然会うことも、前はあんなに嬉しかったのに、今は少し辛い。顔を見ると苦しくて、泣きそうな気持ちになる。だからなるべく会いたくないんだけど、でもそれに反して、顔を見たい話しかけてほしいって衝動も湧いてくる。

伏せていた目を開けて窺うように高瀬君を見たその瞬間、私はそうしてしまったことを凄く後悔した。

高瀬君が、女の子と話していた。私には見せたことのない表情で。

こんな所見たくなかった。高瀬君が他の女の子と仲良くしてる所なんて…！

高瀬君と話してるあの子が、アユミちゃん…？私には言ってくれなかった志望校の話も、あの子にはしてるの？

それはそうだよ、同じ高校に行くんだから…。でも、そんなのずるい。仕方のないことだって分かっているけど、そんなの嫌！

何であの子には言っ、私には言っしてくれないの？何であの子とは話して、私には話しかけてくれないの？

お願い…。他の女の子と仲良くしないで！

我が儘で醜い気持ちで、心がいっぱいになる。

こんなの嫌だよ。自分のことも高瀬君のことも、嫌いになりそうだよ…。

「沙和、あの二人、別に付き合っている訳じゃないみたいだよ。」  
俯く私の顔を覗き込んで、明日香が言った。きつとまた田中君から聞いてくれたんだろう。

少しだけほつとしたけど、でも嫌な気持ちは変わらなかった。そんなのどうでもいいとも思った。付き合っけていなくても、私よりも他の子の方が高瀬君と仲がいいっていう事実は変わらないから。

何で、高瀬君と一番仲がいい女の子は、私じゃないの？  
どうすれば一番になれるの？

やっぱり、近くにいないとダメなの……？

放課後、明日香達には先に帰ってもらって、私は一人で職員室に向かった。やっと書くことの出来た進路調査の用紙を出す為に。

本当にこれでいいのだろうか。自分でもまだ分からない。でも、どうしても諦めたくはなかった。ここで終わりになんてしたくなかった。

その気持ちだけで選んだ、全てを未来に委ねただけの考えなしの答え。

今の私は自分の気持ちのままに突っ走ってしまっていて、自分の出した答えがどんなものであるのか気付けないでいた。

## 雨雲

「沙和ご飯よ。起きなさい。」

お母さんの声。

私は重い体をゆっくり起こしてため息をついた。

実は、ずっと前に起きていた。でも今日は休み。学校に行く必要もない。だからずっと布団に潜っていた。

出来たら寝てしまいたかった。寝てしまえば嫌なことを考えずに済むから。でも私の思いと反して頭はどんどん冴えていき、眠ることも出来なくて、ただベッドに横たわっていた。

ドアの外から、朝食の美味しそうな匂いが漂ってくる。昨日はご飯も食べずに帰ってすぐ部屋に閉じこもったから、流石にお腹が空いている。

こんなに胸は重いのに、お腹は空くんだ…。

少し情けなくなりながらも私は立ち上がり、パジャマのまま一階に向かった。

キッチンに行くと、既にみんなが揃っていた。お兄ちゃんは休みだというのに、もう服を着替えてご飯を食べている。私も椅子に座り、ご飯を食べ始めた。

誰も喋らない静かな朝食。きつといつも喋る私は何も言わないから、みんなも何も話さないんだろう。

その静寂を破ったのはお母さんだった。

お母さんは、持っていたお箸を置いて私を見た。

「沙和、ご飯食べた後に話があるから、リビングにいなさい。」

一人になりたかった私は、眉をしかめてお母さんから視線を逸らした。

「大事な話だから。」

と、お母さんが言葉を続ける。

隣でお兄ちゃんが、興味深気に私を見た。お父さんは、お母さんと同じような表情で私を見ている。

そんなみんなの視線を浴びて嫌とは言えなくなって、私は渋々頷いた。

食事が終わると、お母さんは片付けもそこそこにして私をリビングのソファ―に座らせ、自分はその隣に座った。お父さんがその近くに立つ。

お兄ちゃんはずっと何処かに出掛ける用事があるはずなのに、何故かキッチンの椅子に座ったまま遠巻きに私達を見ていた。

一体何なんだろう…。

私は居心地が悪くて、俯く様にみんなから視線を逸らした。

「沙和、志望校変えたって本当なの？」

「何で……?!」

何で知ってるの?!

私はびっくりして、顔を上げた。するとお母さんが

「先生が連絡してくれたのよ。いきなり志望校変えたからって心配して下さって。」

と言った。

「どうして急に志望校変えたりしたの?それもよりによって付属だなんて。」

お母さんの言葉に、私は黙って再び俯いた。

理由はただ一つ。高瀬君と同じ高校に行きたいから。

でもそんな事、お母さん達には言えなかった。好きな人がいるって言うのが恥ずかしかった。

「何かやりたい事でもあるの?」

その質問にも黙ったままでいると

「何とか言いなさい!」

と、お母さんが大きな声を出した。

「沙和、付属に行くとなると、家から出る事になるんだぞ。」

それまでじつと私達の話聞いていたお父さんが、口を開いた。  
「やりたい事なら近くの高校でやればいいだろう？何も高校生のうちから家を出る必要はないんじゃないか？」

「そうよ。それに付属って私立校なのよ。学費とか寮費とか、色々お金がかかるの。再来年にはお兄ちゃんだって大学に行くし、沙和だって大学に行くかもしれないでしょ？申し訳ないけど、家はそこまで余裕はないの。だからどうしてもっていうんじゃないなら、近くの高校に行きなさい。それでもやっぱり付属に行きたいなら、ちゃんと理由を話しなさい。」

…駄目だもん、付属じゃなきゃ。付属じゃなきゃ高瀬君の近くに居られないもん。けどそんな事、お母さん達に話したくない。

「沙和、聞いているの?!」

お母さんの怒った様な声。

いつもの私ならすぐに謝るところだけれど、今はそんな気分になれなかった。

どうしてみんなで反対するの？私の気持ちは考えてくれないの？

お金の事なんて知らないよ！行きたいって言うてるんだから行かせてくれたっていいじゃん!!

「沙和?!」

「理由なんてどうでもいいじゃん！行きたいから行きたいって言うてるの!!」

お母さんが私の名前を呼ぶのとほぼ同時にそう言い放ち、私は部屋へ向かって全力で走った。

あれからお母さん達は、私の顔を見る度に志望校の話をしてきた。それが嫌で聞きたくなくて、私はなるべくみんなと顔を合わせないようにした。だから今日もギリギリまで部屋に籠もり、無言のまま急いで朝食を食べて、何も言わずに玄関から飛び出すように学校に



向かった。

いつもより学校に着くのが遅かった所為か、教室へと続く廊下には大勢の生徒がいた。楽しそうに話しているみんなの中で、私だけが暗い気持ちで歩いている。

全てが嫌に思えた。お母さんもお父さんもお兄ちゃんも高瀬君も周りにいる人達もみんな。誰も私の気持ちを分かってくれない。

でも、明日香達なら分かってくれる筈だ。二人共好きな人と同じ学校に行きたいって考えを抱いているんだから。私の想いを理解してくれる親友なんだから。

そんな二人に心配をかけたくなって、私は気分を変えようと思いきり顔を上げた。その瞬間前方に高瀬君の姿を見つけて、ぎゅうって胸が苦しくなって足を止めた。

高瀬君の志望校を聞いたあの時から、私は高瀬君と目を合わせる事が出来なくなつた。悲しくて苦しくて、そんな気持ちが嫌で、ずっと高瀬君を避けていた。

高瀬君は何も悪い事なんてしていない。嘘を吐いた訳でも私をいじめた訳でもない。ただ私が高瀬君の行動に勝手に傷ついてるだけ。そして、思い通りにいかないからと拗ねているだけ。

これではただの八つ当たりだ。何となく気付いてはいるものの、どうしても高瀬君の顔を見る事が出来なかつた。だから私は、また高瀬君から視線を逸らして歩き出した。

「ねえ、」

高瀬君とすれ違ったその瞬間、私はいきなり腕をぐっと掴まれた。「何で無視するの？」

掴まれた衝撃で反射的に顔を上げると、そこにはいつも私が見ているのと同じ表情をした高瀬君がいた。

「俺、何か悪い事した？」

突然の事でどうしていいか分からなくて、何も言えないまま私は

視線を下に落としたり。そんな私を、高瀬君がじっと見据える。

言いたいことならいつばいある。何で志望校のこと話してくれなかったの？とか、他の女の子と仲良くしないで、とか…。でもそれを言う権利は、きっと私には無い。

彼女でもないのに。

友達ですらないかもしれないのに…。

そう思うと何も言えなくて、私は黙ったまま俯いていた。

どれくらいそうしていたのか。

突然高瀬君が手を離れた。そして一瞬私を睨む様に見てから、何も言わず背中を向けた。

「あ……。」

待って！

私は心の中でそう叫んで、高瀬君を見た。でもそれを声にすることは出来なかった。

だって、引き止めたとしても何を言ったらいいの？分からないよ…。

悩んでいるうちに、高瀬君は私からどんどん離れて行く。まるで私を突き放すみたいに。

もしかして、私、嫌われた……？

ずっと黙っていた私が面倒くさくなったのかもしれない。もうどうでもいいと思われてしまったかもしれない。

私は慌てて高瀬君の名前を呼ぼうと口を開いた。けれど何故か声が出なくて、代わりに大粒の涙が溢れ出した。

恋をするって、凄く素敵なことだと思ってた。いつも楽しくて幸せで心が温かくなって。

でも今の私の心は真っ暗で、そしてきつと凄く醜くい。

…悲しいよ。

胸が、苦しいよ。

こんなことなら、恋なんてしなれば良かった……。

## ジレンマ

なんとか涙を止めて教室に入ると、瑞穂が驚いたように私に駆け寄って来た。そして

「どうしたの?!」

と、私に問い掛けた。

いくら涙を止めたとはいえ、この赤い目を見れば泣いていたことはバレバレだろう。

「何でもない…。」

と私は首を振ったけど、その拍子に再び涙が零れてしまった。

「沙和…?」

心配そうに私を見る瑞穂。そんな瑞穂に何か言わなきゃと思った時、廊下から

「沙和!」

と大きな声を出して明日香が飛び込んできた。

明日香は真っ直ぐ私に駆け寄って来て

「大丈夫?!高瀬君に何か言われたの?」

と、凄く勢いで私に尋ねてきた。

「トイレで加奈ちゃんに聞いたの。沙和が三組の野球部の男子に何か言われて泣いてたって。それって高瀬君でしょ?」

明日香の言葉に、私は戸惑いながら頷いた。

私が高瀬君と一緒にいてそして泣いていた事、もう広まってるんだ…。でもそれは、高瀬君に何か言われたからじゃないのに…。私が何も言わなかったからいけないのに。

「…高瀬君は、何も言っていない…。」

私は涙声で、二人に告げた。

「高瀬君が悪いんじゃないから、私が何も言わないから…。だから高瀬君に嫌われちゃったの…。」

「どづいこと?」

明日香が眉を寄せながら私を見た。でも、私はその理由を言いたくなかった。自分がこんなに醜い気持ちを抱いてるなんて、二人に知られたくなかった。

「…ねえ、沙和。」

暫く黙っていた瑞穂が口を開いた。

「志望校、付属にしたって本当？」

「え？何それ！」

私の隣で、明日香が再び大きな声を上げる。でもそんな明日香には目も向けず、瑞穂は驚いて顔を上げた私をじつと見て告げた。

「それって、高瀬君と一緒にいたいからだよね？…でも、私は止めたほうがいいと思う。だってもしかしたら、また高瀬君の所為で泣いたり傷ついたりするかもしれないだよ。そんなの嫌でしょ？それに、今は私や明日香が沙和の話を聞けるけど、沙和が付属行ったら、こうやって近くで話を聞いてあげることもないんだよ。」

「そうだよ！こんな風に沙和の事泣かせる人なんて、やめちゃいなよ！付属なんて行かないで、一緒に東高行こうよ！」

やめる…？何を？

二人は、何を言ってるんだろう？

「…何言ってるの？」

涙目でいきなり顔を上げた私を見て、二人は不思議そうな表情をした。

「え、何って…。高瀬君、沙和を泣かせるような事したんでしょ？だからもうやめちゃいなよって…。」

「高瀬君は悪くないよ。悪いのは私だよ…！二人共私の事応援してくるって言ったのに、何でそんな事言うの？」

確かに私は高瀬君の所為で傷ついた。恋なんてしなければ良かったとも思った。でもだからって高瀬君を忘れようなんて思ってない。

私が欲しいのはそんな言葉じゃない。望むのは、高瀬君に一番近い女の子になることだけ。

きつと私は、自分の力でどうにも出来ないこのもどかしさを、二人に何とかして欲しかったんだ。そして、嫌われてしまったかもしれないというこの現実には、救いの手を差し伸べて欲しかったんだ。でもそれは叶わなかった。

放課後の教室に、私は一人で残っていた。明日香と瑞穂には“考えたいことがあるから”と行って、先に帰ってもらった。でも本当は少し違う。

家に帰りたくなかった。家に帰って、お母さん達に高校の話を読まれるのが嫌だった。

明日香達にも反対されてしまった今、相談できるのは誰一人としていない。それが重くて暗い雲となって、私の心を覆う。

それに、私は自分の気持ちでさえも良く分からなくなっていた。

高瀬君の近くにいたいと思う気持ちは変わっていない。同じ高校に行けば、高瀬君と今よりずっとずっと仲良くなれるんじゃないか、付属に行く事を決めた理由となったそんな期待も、まだ残っていた。でも、本当に仲良くなれるんだろうか……。嫌われてしまったかもしれないのに。

こんな状態が続くなら、一緒の高校に行く意味なんてないんじゃないだろうか。瑞穂が言ったみたいに、傷つくかもしれないし泣くかもしれない。…そんなの嫌だ。

でも……。

期待と不安が渦巻いて、頭の中がぐちゃぐちゃになる。そしてそんな自分に苛々する。

こんな状態の時にお母さん達にまた色々言われたら、キレてしまいかもしれない。でも外はもう夕闇に染まっていて、流石にこんな時間まで帰らなかつたら心配されるかもと思い、私は仕方なく鞆を

持ち、重い足取りで家に向かった。

「沙和！こんな時間まで何してたの?!」

家に入るなり、お母さんが大きな声を出した。

もう外は暗くなっていた。こんな時間まで帰らなかった私を心配してたんだって、普通だったら理解出来る。

でも今の私には、そんな事考える余裕はなかった。怒鳴られているといふ事がただ面倒くさくて、私はお母さんの顔を見ずに部屋へと続く階段へ向かった。

「沙和!!」

そんな私を見て、お母さんが更に大きな声を上げる。

「…うるさいな！放っておいてよ!!」

私はそう言い捨てて、階段を駆け上がって部屋に飛び込んだ。

“うるさい”なんてお母さんに言ったのは初めてだった。今まではもしそう思ったとしても、決して口には出さなかった。

…お母さんが悪いんだよ。私の気持ちを考えもせずに怒鳴るから。でもあんな事言っちゃって、もしかしたらお母さん、悲しんでるんじゃないだろうか…。

私は唇を噛んで布団に潜り込み、ぎゅっと目を瞑った。

何も考えたくなかった。考えたら悲しくなって苛々して、暴れてしまいそうだった。でも私の頭の中には気持ちとは裏腹に、色々な思いが浮かんでくる。自分の事なのに、コントロールが効かない。何で？もう嫌だよ!!

そんな風に葛藤していると、暫くして、私の部屋のドアが開く気配がした。

「沙和。」

…お兄ちゃんだ。何しに来たんだろう…？

私は耳を澄ませて、お兄ちゃんの様子を窺った。

ガチャんと、テーブルに何か置く音がした。そして

「飯。母さんが食べるって。」

とお兄ちゃんが言った。

布団の隙間からそつとテーブルの方を見ると、そこにはお茶碗とコロッケが乗ったお皿が置かれていた。それを見て、私は自分のお腹が空いていることに気が付いた。

でも、絶対食べたくない。食べてしまったら、きつと負けたような気分になる。だから私は布団を被ったまま、小さな声で

「いらない。」

と、お兄ちゃんに告げた。

「お前、いい加減にしろよ。」

私の言葉を聞いたお兄ちゃんが、呆れたような声を出した。

「いつまで意地張ってんだよ？それじゃあまるで、ただ拗ねてるだけのガキじゃん。」

「ガキじゃないよ！」

私はばつと起き上がって、お兄ちゃんを睨み付けた。

「意地張ってなんかないもん！みんなが私の気持ちを考えてくれないからいけないんじゃない！」

「…やっぱりガキじゃん。」

お兄ちゃんがため息をつく。

「いきなり付属行きたいとか言いだすし、でもその理由は全然言わねえし…。ただ我儘言ってるだけだろ。」

…我儘？

お兄ちゃん、そんな風に思ってたの？私の気持ちは全然考えてくれてなくて、それどころか私の事ガキだって馬鹿にしたの？

「…ひどいよ。」

私は涙目になってお兄ちゃんを見た。

「我儘なんて言ってるじゃないよ！ちゃんと理由あるもん！」

「じゃあ言えよ。」

一瞬戸惑った。でもこのまま子供扱いされるのは嫌だったから



「お母さん達には、言わないで。」

と前置きしてから

「…好きな人が行くから、だから私も付属に行きたいの。」  
と告げた。

「…それだけ？何かやりたい事があるとか、そういうのはねえの？」

「……別に、無い。けど、それだけでも充分な理由でしょ?!」

お兄ちゃんが、再びため息をついた。

「…そいつと付き合ってる訳？」

「…付き合ってるじゃないよ。…それどころか、もしかしたら、嫌われてるかもしれない……。でも、それでも、近くにいたいって思うんだもん！」

それを聞くと、お兄ちゃんは私に近寄ってしゃがみ、俯く私の顔を覗き込んだ。

「沙和の気持ちも分からなくはねえよ。でもさあ、物理的な距離だけ近くても意味ないんじゃない？それに、同じ高校に行くとか以前に、お前にはやらなきゃいけないことがあると思うけど。」

「とにかくもう一度、良く考える。」

お兄ちゃんは、そう言って部屋を出て行った。

お兄ちゃんが何を言ったのか、私にはその意味が良く分からなかった。

それよりも苛々してどうしようもなく、私は壁に枕を叩きつけて、また布団に潜り込んだ。

## 渦

日曜日。私は明日香の家の近くに立っていた。そして、明日香の部屋の窓をずっと見ていた。

どれくらいの間こうしているだろう。いい加減そうしている事にも疲れてきた。

でも、明日香の家の方に足が進んでいかなかった。かといって帰ることも出来なかった。

この数日間、私はずっと一人で考えていた。

高校の事。高瀬君とアユミちゃんの事。お父さんやお母さんの事。それから、明日香達の事とかお兄ちゃんが言った言葉の意味とか……。アユミちゃんよりも高瀬君に近い女の子になりたくて付属を受験しようと思ったけど、みんながそれに反対している。そして今、私自信も悩んでいた。

同じ高校に行っただけで、本当に高瀬君と仲良くなれるのだろうか。もしかしたら、嫌われているかもしれないのに。

もし仲良くなれなかったら、付属に行く意味なんてない。他に何かやりたいことがある訳でもないのだから。

それに、付属に行ったら明日香と離れてしまう。瑞穂もお兄ちゃんもお母さんやお父さんも、みんな会えなくなる。会えるのはきつと休みの日の、週に一度位のものだろう。

いや、高校生になったら明日香達は忙しくなってしまうって、そんなに会えなくなるかもしれない。私よりも仲のいい友達が出来て、私と会うことすらなくなるかもしれない。

そんなの絶対嫌だ。

でも付属に行くのを止めたら、高瀬君と会えなくなる。そして高瀬君は私の知らない色んな女の子と仲良くなって、きっと私の事なんて忘れてしまうだろう。

もうどうしたらいいのか分からなかった。

どっちを取っても嫌な事がある。そして今のこの状況も嫌なことばかりだ。

少し前までは、本当に楽しかった。

夏休みには高瀬君と花火を見に行った。ほんの少しだけ手を繋いでくれて、凄く凄く幸せだった。

明日香と瑞穂はどんな時も心から私の事を応援してくれたし、お母さんやお父さんもいつも私に優しくかった。お兄ちゃんはまだ自分からは話し掛けてはくれないけれど、いつも私の事を気に掛けて私の話を聞いてくれた。

ほんの数週間しか経っていないのに、あの頃と今では状況が全く変わってしまった。そしてきっとこれからも、状況はどんどん変わって行く。

決して同じではいられない。大好きな人全員とずっと一緒に居るといふことは、きっともう不可能なんだ。

誰と一緒にいるのか、決めるのは私自身しかない。例えばみんなに反対されたとしても、自分の未来なんだから。

分かっているのに分からなかった。誰も失いたくなくて、みんなと近くにいたくて、どうしても決められなかった。

だから明日香に相談したかったんだけど、高瀬君の事を反対して今の明日香に相談しても、欲しい答えは見つからないんじゃないだろうか……。それでも誰かに話を聞いてほしい。そう思って、どちらにも足を進められずにいた。

「あれ？沙和ちゃん？」

後ろから名前を呼ばれて、私はその方向を顧みた。するとその人は「やっぱり沙和ちゃんだ。」

と言って、笑顔で手を振った。

「ゆみさん…。」

「こんにちは。久しぶりだね。」

「こんにちは。」

ゆみさんに挨拶されて、私は慌てて挨拶を返し、ぺこりと頭を下げた。

「おい、ゆみ。これ、忘れてる。」

その時近くに止まっていた車から、何やら紙袋を持った明日香のおじさんが出てきた。おじさんはゆみさんの隣にいる私を見て

「あれ、明日香の友達だよね。」

と、私に声を掛けてきた。

「こんにちは。」

私は今度はおじさんに挨拶をして、再び頭を下げた。

二人は遊園地の時とは違う、綺麗な格好をしていた。ゆみさんはブルーのワンピースの上に白いカーディガンを羽織っていて、おじさんは濃いグレーのスーツを着ている。

「…何処か、行くんですか？」

二人の格好を不思議に思い、私はそうゆみさんに尋ねた。するとゆみさんは

「明日香ちゃんの家だね、結婚するって報告に来たの。」

と言って、幸せそうに頬笑んだ。

「結婚するんですか？おめでとございます。」

口ではそう言ったけど、心から祝福することが出来なかった。

私はこんな悩んでるのに、二人は本当に幸せそうにしてる。それが羨ましくて、嫉ましくて…。

「沙和ちゃんは？明日香ちゃんの所に遊びに来たの？」

「私は……。」

ゆみさんの質問にはいともいいえとも言えず、私は黙って俯いた。「どうかしたの？」

そんな私をゆみさんとおじさんは、不思議そうに見つめた。

「沙和ちゃん、良かったらちょっと話さない？」

暫くして、ゆみさんがそう私に声を掛けた。

「あんまり時間がないから、長くは話せないけど。」

いきなりのゆみさんの提案にちよつと戸惑ったけど、断る理由が浮かばなかった私は

「はい。」

と言つて、誘われるままにゆみさんの後について行った。

おじさんを外に置き去りにして、ゆみさんと私は車の中に入った。おじさんは携帯灰皿を片手に一人で寂しく煙草を吸っている。それを見ていたら、なんだか悪いことをした気になってきて

「ゆみさん、いいんですか？」

と尋ねると、ゆみさんは最初何のことを言われているのか分からないといった顔をしていたけど、私の視線の先におじさんがいることに気付いて、

「ああ、いいよ別に。」

と笑った。

「それより沙和ちゃん、明日香ちゃんと何かあったの？」

「え……。」

ゆみさんの質問に、私は何て答えたらいいのか分からず、視線を落とした。

明日香と何かあったのかと聞かれれば、何も無いという訳ではない。明日香の言葉に反発を抱いたのは事実なんだから。

でもそれは明日香だけに該当することじゃない。瑞穂とかお母さ

んとか高瀬君とか、みんなに該当すること。

「…明日香だけじゃなくて、みんな、です。」

私の答えを聞いて、ゆみさんが首を傾げて私を見た。

「みんなが、どうしたの？良かったら聞かせて？」

「…いいんですか？」

勿論と頬笑むゆみさんを見て、私は何故か泣きたい様な気持ちになつた。

ずっと誰かに聞いてほしかった。私の気持ちを分かって欲しかった。そして今ようやく私の話を聞いてくれる人を見つけた。

私は、高瀬君が付属を受験する事から始まって、アユミちゃんの事、みんなに反対された事、そして私の気持ちまで、一つも隠さず素直にゆみさんに話した。

## みんなの気持ち

私が全てを話し終えると、ゆみさんは私の目を見て優しく頬笑んで、それから

「みんな沙和ちゃんの事が好きなんだね。」  
と言った。

「え?!」

ゆみさんの言葉に、私は驚きの声を上げた。今私が話したのは、みんなが私の言う事を反対してるという話だ。それが何故、好きだということになるのか…。

「絶対違います。だって、私の事好きだって思ってくれてるんだったら、みんな賛成してくれるはずだもん。」

「じゃあ沙和ちゃんは？沙和ちゃんは高瀬君のことが好きなんだよね。高瀬君が違う高校に行く事、心から賛成した？」

「それは……。」

「反対するのは、みんなが沙和ちゃんの事、好きだからだよ。好きだから一緒にいたいって思うし、心配もするんだよ。沙和ちゃんもその気持ちは分かるでしょう？」

「…はい。」

最初高瀬君が付属へ行くと聞いた時、私は凄く悲しかった。そんなの嫌だって思って信じたくなって、出来たら嘘だって言って欲しかった。

正直、みんなの気持ちは分からない。本当に私の事が好きなのか、だから反対してるのか。

でも、好きだからこそ一緒にいたいと思う気持ちは、嫌という程分かる。それは正に、今自分が抱いている気持ちだから。

「みんなに反対されて嫌だなんて思うのは分かるけど、自分の事だけじゃなくて、みんなの気持ちも考えてみたらどうか。きつとみんな、理由もなく反対なんてしないよ。」

みんなの気持ち…。

反対する理由…。

今まで自分の気持ちばかり優先してて、そんな事考えなかった。

「沙和ちゃん、良く思い出してみて。みんな反対するとき、何で反対なのか、その理由を言っただけでなかった？」

…そう言われてみれば言っていたかもしれない。その中にはお金の事とかもあつたけど、よくよく考えてみれば、私の事が心配だとか一緒にいたいとか、そういうニュアンスの言葉も確かにあつた。「それとね、沙和ちゃんが本当に付属行きたいって思ってるなら、みんなにちゃんと理由を話さないよ。みんなを納得させるだけの理由と説得力と根気がないと、絶対理解してもらえないよ。沙和ちゃんが一生懸命話して本当に付属に行きたいんだって事を伝えれば、みんなも賛成してくれると思うよ。」

理由。確かにそれは大事な事かもしれない。でもゆみさんにそう言われても、私は理由をお母さん達に話したくなかった。なんとなくだけど、好きな人が行くからって理由だけでお母さん達が納得してくれるとは思えなかった。現にお兄ちゃんは賛成してくれなかった。

「それにしても、何か懐かしいな。」

突然ゆみさんが笑った。

私はゆみさんが何を笑っているのか分からなくて、俯いていた顔を上げると、ゆみさんは

「あ、ごめんね。ちょっと昔の事を思い出して…。」

と言って、窓の外を見た。

「昔の事…？」

「うん。大学に行く時、私も同じ様な事で悩んだなって思ってた…。隆弘…あ、明日香ちゃんのおじさんの名前なんだけど、隆弘と別の大学に行ってたっていうのは、前話したよね。」



そういえば遊園地で明日香が好きな人と同じ高校に行きたいって  
いう話をした時、ゆみさんがそんな事を言っていた気がする。

私はその時の話を思い出して、こくと頷いた。私が頷いた事を  
確認して、ゆみさんが再び話した。

「その時ね、私も悩んだの。隆弘と同じ大学に行こうかどうか。結  
局違う大学に行ったんだけど。」

「…何で、違う所に行ったんですか？」

私は思わずゆみさんに尋ねた。

確かゆみさんとおじさんが付き合い始めたのは、高校の時だった  
って言っていた。離れてしまつて寂しくなかったのだろうか。

「どうして……、そうだなあ。一番の理由は、私のやりたい事が隆  
弘の行った大学にはなかったからかな。」

「…やりたい…事。」

「そう。最初はね、やりたい事が無くても近くにいたいから、一緒  
の大学に行こうって思ってた。でももしそうしたら、私は隆弘のや  
りたい事を邪魔しちゃうんじゃないかって考え始めて…。だって他  
に知り合いもいなくてやりたい事もなかったら、つまらないじゃな  
い。そしたら唯一頼れる彼に、私は付きまよっちゃうんじゃないか  
つて。そんなの嫌だったから、寂しくてもこっちに残って自分のや  
りたい事やる事にしたの。こっちには友達も家族もいるしね。そん  
な落ち着いた状況の中で自分は自分なりに頑張つて、それで彼のや  
りたい事も応援しようって思ったの。」

「寂しいとか、他の女の人と仲良くしたらどうしようとか…考えな  
かったんですか？」

「ちよつとは考えたよ。でも、寂しかったら会いに行けばいいし、  
疑いたくなつたら話せばいい。」

「会いに、行ったんですか？」

「行ったよ。いっぱい行った。…沙和ちゃんもさ、もし高瀬君と学  
校が離れちゃつても、会いたくなつたら会いに行けばいいんじゃない  
い？話したくなつたら電話すればいいんじゃない？」

にっこりと笑うゆみさんの目を、私は見る事ができなかった。ゆみさんが会いに行ったのをおじさんが受け入れたのは、きつと二人が付き合っていたからだ。ゆみさんと私では、状況が全く違う。「そんなの……付き合ってる訳でもないのに……。それに、嫌われてるかもしれないし……。」

「付き合つてなきゃ会いに行ったら駄目なんて、誰が決めたの？友達だって会いたかったら会いに行くでしょ？それと、嫌われてるって高瀬君に言われた訳じゃないんでしょう？」

「そうだけど……。」

「とりあえず、高瀬君と一度話してみたら？何を言われるか怖いかもしれないけれど、今勇気を出さなかったら後できつと後悔するよ……多分同じ高校に行く事より、話す事の方が大切だと思うよ。」

その後ゆみさんは、明日香の家に行かなければいけないからと、車を降りておじさんの所に向かった。私も車から降りて、ゆみさんとおじさんにお礼を言い、家に帰ろうと歩き始めた。

「あ、沙和ちゃん。」

数歩歩いた所で、ゆみさんが再び私を呼んだ。そして真っ直ぐ私の目を見て、はつきりとした声で告げた。

「何も言わなかったら、何も伝わらないんだからね。伝えたい事があるなら、ちゃんと言葉にしなきゃ駄目だよ。」

じゃあねと手を振るゆみさんの姿を、私はじっと見つめた。きつと今、ゆみさんはとても大切な事を私に教えてくれた。そんな気がした。

私は今まで、言わなくても分かってくれるはずだという勝手な思いを抱いていた。でもそんなことある筈はないんだ。言葉にしても上手く伝わらないこともあるというのに、それさえもせずに伝わる

なんて事は、よっぽどのがない限りあり得ないんだ。

この前お兄ちゃんが言った“やるべき事”が何なのか、何となく分かった気がした。

誰と一緒にいるとか何処の高校に行くとか、そういうのも大事だけど、それよりも大事なことがきつとある。

とりあえず、もう一度良く考えよう。

私はもう見えなくなつたゆみさんに心の中でもう一度お礼を言うて、それから家へと向かつて歩きだした。

## やるべき事

「二人共ごめんね。この前私の事考えて色々言ってくれたのに、私、あんな態度取っちゃって…。」

朝の教室。

登校した私は、真っ先に明日香と瑞穂の所に向かい、そう言っって頭を下げた。

「別に…いいよ。私達も沙和の気持ち、あんまり考えてなかったし。

」  
瑞穂がそう言っつと、明日香はちよつと複雑そつな表情を私に向けた。

「でもさ…、高瀬君、沙和の事泣かせたんでしょ？それは許せないよ。」

「それは、この前も言っただけ、本当に高瀬君が悪いんじゃないの。」  
「じゃあ何で泣いたの？」

「それは…。」  
出来たら二人に知られなくなつた、私の醜い気持ち。でもそれを言わなければ、高瀬君はこのまま悪く言われてしまう。

言わなければ、伝わらない。

私は勇気を出して、その理由を二人に告げた。

高瀬君が付属に行くと聞いて凄く嫌だつた事。なんで私には言ってくれなかつたんだらうと悲しかった事。アユミちゃんに嫉妬した事。八つ当たりにも似た気持ちを抱いていた事。

こんな事言ったら二人に呆れられちゃうんじゃないかと不安に思いながらも、ドロドロと心の中に渦巻いていた暗い気持ちの全てを打ち明けると、二人は真面目な顔でそれを聞いて、それから

「そつなんだ。」

と言っつて深く息を付いた。

「こんな事考えてて…、私本当に嫌な子だよね……。」「  
俯いて呟く私の顔を明日香が覗き込む。そして明るい声で私に告  
げた。

「そんな事ないよ。私も同じ様な事、考えた事あるもん。」

「…本当？」

「うん。瑞穂は？考えた事ない？」

「私も、ある。」

「凄く嫌な気持ちなんだけど、自分でもどうしようも出来ないよね。  
でもそれって本当に相手を好きだから思う事だし、ある程度はしよ  
うがないんじゃない？」

二人の笑顔を見て、私は泣きたいくらいほつとした。

こんな醜い気持ちを抱いた事があるのは、私だけじゃないんだ。  
こんな私の事を、二人は分かってくれるんだ…。

「それにしても、凄いな。」

瑞穂がため息を吐きながら頬笑んだ。

「え？」

何が凄いのか分からなくて瑞穂をじつと見ると、瑞穂も私をじつ  
と見て

「ついこの前までお兄ちゃんお兄ちゃんって言った沙和が、そん  
な気持ちになるなんて。沙和、本当に恋してるんだね。」  
と言った。

「うん。本当に高瀬君が好きなんだね。」

明日香もそう言っ私を見る。

「…うん。」

改めてそう言われると恥ずかしくて、私ははにかみながら二人か  
らちよつと視線を外して返事をした。でも

「じゃあ沙和は、やっぱり付属に行くんだね。」

という明日香の言葉に、再び二人に視線を戻した。

「ううん。やめた。東高行く。」

数日間悩んで、ようやく出した答え。

色んな人に反対されて反発して、それから色んな言葉を貰って考えて。そして出した結論。

高瀬君の近くにいたいという思いは、今も変わらず抱いている。でも付属に行ったからって仲良くなれる保証なんてないし、もし仲良くなれなければ私は一人ぼっちだ。そんなの寂しいから、だったら好きな人がいっぱいいる、ここにいた方がいいと思った。それに付属に行かなくなつて、高瀬君と仲良くなれる方法はきつとある。今の私は、高瀬君から遠い場所にいる。仲良くしたいと思つているのに、どんどん離れて行く。でも勇気を出して頑張れば、きつと今よりも近くなれる筈。

「今日、放課後、高瀬君の所行つてくる。行つて、この前の事謝つてくる。」

受け入れてもらえるのか、本当は凄く不安で心細いけど、でも言わなきゃ何も伝わらない。

「私も付き合つよ。」

私の言葉に、明日香がそう言つて力強い目をして頬笑んだ。瑞穂も「私は一緒に行けないけど……頑張つて。」

と、明日香と同じ目で私を見た。

「うん。ありがとう。」

二人のその表情に、私はいっぱい勇気を貰った。

そして放課後。

今日に限つて長くなった先生の話を聞き終えて、私と明日香は瑞穂にバイバイだけ告げて廊下に出た。

「頑張つて。」

と、後ろから瑞穂の声が聞こえる。“ありがとう”と心の中で呟いて、私達は高瀬君のクラスに急いだ。

帰り支度を済ませた他のクラスの子達が、下駄箱へと向かっている。その中には三組の子の姿もある。

もしかしたら高瀬君も帰っちゃったんじゃない…。

不安になりながら三組の教室を覗くと、そこにはもう高瀬君の姿はなかった。

「…いないね。」

明日香が心配そうな顔で私を見る。

「どうする？明日にする？」

明日香の問いかけに、私はブンブンと首を大きく横に振った。

今日じゃなきゃ嫌だった。だって明日になったら怖くなって、決心が鈍ってしまうかもしれない。だからどうしても今日中に言いたい。

「もしかしたらまだ自転車置き場にいるかもしれないから、行ってくる。」

そう言って走り出した私の後を、明日香が

「ちょっと待って。」

と言いながら追いかけて来る。自転車置き場にたどり着いた時には、二人共おでこから汗が吹き出していた。

「沙和…、高瀬君…いた？」

下を向いて息をはあはあといわせながら、明日香が私に尋ねる。

私も凄く疲れて呼吸を整えたかったけど、そんなことをしているうちに高瀬君が帰ってしまうかもしれないと思って、肩で息をしながらも必死で辺りを見回した。

「どう？」

「…いる。」

「え?!何処？」

呟くように発した私の声を聞いて、明日香が頭を上げた。

「何処？」

「ここにはいない…けど、でもまだ絶対学校にいる。だって自転車あるもん。」

「本当?!」

「うん。でも何処にいるんだろう。教室にはいなかったし…。野球部の練習見に行ってるのかな?それとも先生の所?それとも、さっきはたまたま教室にいなかっただけで、今は教室にいるのかな…。」  
「どうしよう…。何処から探せばいいの?」

探して見つければいいけど、もしかしたらすれ違いになってしまいかもしれない。だったらここで待ってた方がいいのかもしれないけど、でも高瀬君は直ぐには来ないかもしれないし、こんな緊張した気持ちですつと待ってるなんて耐えられない。

「沙和はここで待ってなよ。」

焦る私を見て、明日香が私にそう告げた。

「私が学校の中探して来るから。だから沙和はここで、高瀬君が帰らないように見張ってなよ。」

明日香はそれだけ言うと、私の返事も聞かずに校舎へと走っていった。

高瀬君、今何処にいるの?誰かと一緒にいるの?

もし見つかったとしても、無視されたり聞いてもらえなかったりしたら、私はどうすればいいんだろう…。

一人にされたせいかな、不安がどんどん募ってくる。緊張で足が震える。

「沙和!いたよ!」

どのくらい時間が経ったのか、明日香が凄い勢いで私に駆け寄ってきた。

「高瀬君図書室にいたよ!」

明日香に手を引かれながら、私はもつれる足で図書室へと向かった。近づくとつれ、鼓動がどんどん大きくなる。息をするのが大変



な位、胸が苦しい。

図書室に着いて中を覗くと、高瀬君があゝの窓際の席に座っていた。その姿を見たら足が竦んでしまい、私は全く動けなくなった。

「沙和、何やってるの？高瀬君の所行かないの？」

隣で明日香が私を急かす。それでも足は動かない。

そんな私を見兼ねたのか、明日香が

「じゃあ私と呼んできてあげる。」

と言って足を踏み出した。

「…待つて！」

その姿を見た私は、大きな声で明日香を呼び止めた。その声に明日香が立ち止まり、驚いたような顔で私を見る。

「自分で、行く。…だから明日香はここで待つてて。」

勇気を振り絞って一步を踏み出す。そしてその勇気が消えてしまわない様にと一氣に高瀬君に近寄って、そして

「高瀬君。」

と背後から彼の名前を呼んだ。

ペンを持っていた高瀬君の手が、ぴくりと止まった。そして、その顔がゆっくりと私の方に向けられる。

それは今私が自分の目で見ている風景なのに、まるでテレビに映し出されている画像の様な、そんな錯覚に陥った。…何でだろう。緊張して頭に血が上っている所為…？

高瀬君が私をじつと見ている。早く、何か言わないと…。

「…あ、あの、話があるんだけど…。」

それだけ言って、私は俯いた。言わなきゃいけない事はいっぱいあるのに、うまく声が出せない。

突然“ガタン”という音がして、私ははっと顔を上げた。

目の前には、椅子から立ち上がった高瀬君の姿。

高瀬君は私をちらっと見てから無言のまま歩きだした。そして数歩進んだ所で立ち止まり、私の方に振り返った。

「話、あるんでしょ。」

「う、うん…。」

高瀬君が再び歩き出す。その背中を怖くて泣きそうな気持ちで見つめながら、私は震える足で高瀬君を追い掛けた。

## 謝罪

あまり人が来なそうな廊下の隅で、高瀬君が立ち止まった。私はそれを見て、高瀬君から二メートル位離れた所で足を止めた。

さつきよりも心臓がうるさかった。足も更に震えていた。それに気を取られて高瀬君の

「何？」

という声を聞き逃しそうになったけど、それでも何とかその声は私の耳に届き、私は俯けていた顔を高瀬君に向けた。

高瀬君が面倒くさそうに私を見ている。私がか言わなければ、彼はこの前の様に私を置いて去ってしまうかもしれない。早く…早く言わなくちゃ…！

二メートルの距離が、彼の存在を遠くに感じさせる。

…こんなに離れた所にいたら、私の声は届かないんじゃないだろうか。ここからじゃ私の気持ちはきつと届かない。

震える足をどうにか動かし、私は高瀬君に近付いた。一、二、三歩進んだ所で足を止め、それから、勢い良く

「ごめんなさい…！」

と頭を下げた。

「この前、あんな態度取っちゃってごめんなさい。嫌な思いさせてごめんなさい。もう絶対にしないから…。」

頭を下げる私を、高瀬君はどんな表情で見ているんだろう。それを見るのが怖かった。でも彼の顔を見て話さなければ、きつと気持ちが届かない。

顔を上げた私の目の前には、じっと私を見つめる高瀬君の姿があった。その視線はさつきまでの面倒くさそうなものではなくて、ただひたすら真つ直ぐに私に向けられていた。

射ぬかれそうなその視線に、私は動揺した。こんなに真っ直ぐに高瀬君に見られるのは初めてだった。どんな顔をすればいいのかわからない。

頭の中が真っ白になる。彼に伝えようと用意していた言葉は、綺麗に消えてしまった。

動揺のあまりまた彼から目を反らしかけたけど、でもここで反らしたら二度と彼の顔を見られなくなるような気がして、必死でそうしようとする気持ちを抑えた。

相変わらず頭の中は真っ白で何を言ったらいいかわからない。でも何か言わなければいけない。準備した言葉が無くなってしまったなら、ただ自分が思っている事を素直に口にするしかない。

「あ、あのね……」

私は思い切って口を開いた。私の気持ちが高瀬君に伝わるのか凄く不安だけど、でも伝える為には言っしかないんだ。

「……あのね、春休みに高瀬君が東高に行くって言うてて、私凄く嬉しかった。一緒の高校に行けるんだって。でもこの前明日香から、高瀬君が付属に行くって聞いて、凄く悲しかった。何で私には言ってくれないのって。他の女の子には話すのに、何で私には話してくれないのって、凄く悲しかった。」

そこまで聞いて、高瀬君の表情が少し変わったような気がした。でも今の私にはそれに気を止める余裕は無く、一回大きく息を吸ってから更に言葉を続けた。

「高瀬君と離れたくなかったから、だからみんなに付属に行くって言ったの。そしたらみんなに反対された。他にやりたい事もないし周りに知ってる人もいないんだから、止めたほうがいいよって。それでもどうしても行きたくて悩んでたら、ゆみさんに言われたの。みんなを説得するには、それなりの理由と説得力と根気がないと駄目だって。でも私にはみんなを納得させる位の説得力なんてないし、それに、高瀬君に思うのと同じ位、明日香や瑞穂やみんなと一緒にいたいから、だからやっぱり東高に行くことにしたの……。」

そこまで言つて、私はぎゅっと目を瞑つた。

本当はまだ付属に行きたいという気持ちを捨てきれてはいなかった。高瀬君と一緒にいたいという気持ちは、まだ私の中で燻っていた。

本当にこれでいいのか、今の私にはまだ分からない。でも私なりに悩んで決心してみんなに言つた事なんだから、もうそうしないといけないんだ。

私は瞑っていた目を開けて、再び高瀬君を見た。高瀬君は、なんだか困つたような顔をして私を見ている。

でもどうしても言いたい事がもう一つあつた。高瀬君に告げることで自分に言い聞かせたい、そんな言葉が。

「高瀬君は、頑張つてみんなを説得したんだよね。どうしても付属で野球がしたいから、時間を掛けてみんなに話したんだよね。…高校離れちゃうのは寂しいけど、高瀬君が野球好きなの知ってるから、だから私も応援する！頑張つて絶対合格してね。」

高瀬君の目が大きく見開かれた。それから左手を耳の後ろに当て、私から視線を逸らした。

やっぱり困らせちゃつたんだ…！

勢いにまかせて言葉を発した所為で、自分が何を言つたのか良く覚えてないけど、でもきつと変な事を言つたんだ。

「ごめんね！」

私は慌てて再び高瀬君に謝つた。

「変な事言つちゃつてごめんね。えつと…もう絶対言わないから。」

私の言葉を聞いても、高瀬君は目を逸らしたままで黙っている。

「あの…勉強してたんだよね？邪魔しちゃつてごめんね。」

私は居たたまれなくなつて、そう言つて高瀬君に背中を向けようとした。その時

「…気にしてないから。」

という高瀬君の呟くような声が聞こえて、私は再び彼を見た。

高瀬君はまだ私から視線を逸らしていた。けれど、そのままの体勢でもう一度

「気にしてないから。」

と、さつきよりもはっきりした声で私に告げた。

許して…貰えたんだ……。

心臓が、さつきまでとは違った大きな音をたてる。嬉しくて、安心して、泣きそうになる。

その後高瀬君は、困ったような表情をしたまま無言になった。でも暫くしてからふと私に視線を向けて、そしたら何故かはにかんだような笑顔になって、そして

「受験、俺も頑張るから、だから山口さんも頑張つて。」  
と言った。

高瀬君が……笑ってくれた。しかも、苗字だけど、私の事名前では呼んでくれた…！

それがまるで夢の様で、言葉で言い表わせない位嬉しくて、私は高瀬君が去った後も、そこから離れられなかった。

「沙和！どうだったの？」

図書室の近くで待っていた明日香が、私を見つけて駆け寄ってきた。

「さつき高瀬君図書室に戻ったけど、沙和、ちゃんと話せたの？」

「…明日香。」

私はまださつき起こった事に呆然としていて、虚ろな目をして明日香を見た。でも明日香を見た瞬間、喜びが胸の中から沸々と湧き出してきた、私は

「明日香〜！」

と大きな声を出して、彼女に抱きついた。

「な、何?!」

突然の事に明日香が慌てている。

「何があつたのかちゃんと話して！」

「高瀬君が…高瀬君がね、笑ってくれた！」

そのまま暫く明日香に抱きついて少し冷静になつた私は、さつきあつた事を明日香に話し始めた。自分が何を言ったのかよく覚えていないけど、謝つた事や応援すると言つた事や、思い出せる限りのすべての事を明日香に伝えた。

「高瀬君が笑ってくれたんだよ！しかも私の名前を呼んでくれたし。凄いいよね！」

興奮しながら告げられる私の何度目かのその言葉に、明日香が一緒に緒になつて

「良かったね！」

と喜んでくれる。

勇気を出して本当に良かった。もしかしたら高瀬君を困らせちゃう位変な事を言ったのかもしれないけど、でもちゃんと伝えようと頑張れば、気持ちって伝わるんだ。

「でもさ、」

突然明日香が、何かに気付いたような表情をして私を見た。

「何？」

私は明日香が何を思いついたのか全然見当がつかなくて、そしてそんな事よりも嬉しさの方が大きくて、笑顔のまま明日香を見た。すると明日香は、私が想像もしていなかった事を口にした。

「何か、沙和の言つた事って、告白みたいだね。」

「…え？」

さつきまで笑顔だった私の表情が、一瞬にして固まる。

「…な、何で？」

「だって沙和、高瀬君に“一緒にいたい”って言ったんでしょ？“寂しい”ならまだ分かるけど“一緒にいたい”なんて、男子には普通言わないよ。もしそれを言うとしたら、好きな人に対してだけだよ。」

「…え…、そうなの…？」

私は高瀬君に、自分の気持ちを知って欲しかった。私の気持ちをちゃんと伝えたかった。でも…告白しようなんて、思ってた…。

「明日香、どうしよう…！」

さつきまでとは打って変わって、私の心の中は焦りと動揺でいっぱいになった。

「私、告白しようなんて思ってなかったのに…！どうしよう…！どうすればいいの？」

「あ、でも大丈夫だよきっと。高瀬君て鈍感そうだし、そこまで気付けてないよ。」

「本当？」

「うん。本当だって。」

「でも…気付いてたら、どうしよう…！」

どんなになだめても慌てふためく私を見て、明日香が

「大丈夫だってば。」

と言って、それから

「沙和、動揺しすぎだよ。」

と、可笑しそうに笑った。



## 神頼み

ほぼ最後となる進路調査が済むと、三年生の教室は勉強一色になっていた。この前までテレビやゲームや遊びの話をしていたとは信じられない程、ほとんどの人が勉強に必死になっている。私達もその波に飲まれて、真剣に勉強をするようになった。

瑞穂はもともと勉強に励んでいたからさほど変わりはないだろうけど、私と明日香の生活は明らかに変わった。今まで買ったことなんてなかった問題集を買って、家に帰るとテレビも見ずにすぐ勉強を始める。分からないことはその日のうちにお兄ちゃんに聞いたり次の日学校で先生に聞いたりして、今までみたいに分からないままで放置することが無くなった。学校での会話も、自然と勉強や受験の話題が増えた。

もうすぐ冬休み。

この休みが終われば、すぐに私立の試験や公立の前期試験が始まる。せつかくの休みなのに、遊んでる暇なんかない。

「冬休みさ、初詣位はみんなで行こうよ。」

終業式が終わった帰り道、明日香がそう提案した。

「毎日家に籠もって勉強なんて、絶対無理！せめて一日位は気晴らししようよ。さすがに瑞穂もお正月は塾ないでしょ？」

「そうだね。冬期講習は受けるけど、三が日は休みだったと思う。

私も神社で合格祈願したいから、初詣は行くよ。」

「…結局受験の話になるんだ。」

そう言っつて、明日香がつまらなそうな顔をする。それを見た瑞穂が「受験生なんだから当たり前でしょ?!」

と、厳しい口調で明日香に告げた。

「沙和も行くよね？」

「うん。今のままでと受かるか自信ないから、神様にお願いしとこ  
うかなって。」

「そっか！そうだね。神様にお願いすれば何とかなるかもしれない  
ね。色々お願いしたい事あるけど、私も受験に合格しますようにっ  
てお願いしよう。」

「何言ってるの？」

私と明日香の会話を聞いて、瑞穂が冷やかな目で私達を見た。

「努力があつてこそその神頼みだよ。何もしないでお願いしたって、  
絶対に叶わないんだからね。だから初詣に行く時以外は、ずっと勉  
強する事！分かった？」

「…はあい。」

瑞穂の力説に、私達はうなだれながら返事をした。

勉強しないと合格出来ないって、そんな事は分かつてる。けどち  
よつと位なら、そういう事考えてみたっていいじゃん…。

「何か瑞穂…、先生みたいだね。」

明日香が瑞穂に聞こえないように、私の耳元で囁いた。

「うん。本当。」

私が小さな声で明日香の意見に同意すると、それに気付いた瑞穂  
が私達を見て怖い顔をした。

「何か言った？」

「ううん、何も言っていないよ。」

今話してた事が瑞穂にばれない様にと、私と明日香は笑って適当  
に話を誤魔化した。それからそれ以上突っ込まれない為に早足で歩  
き始めた。

そしてお正月がやって来た。

殆んど家において外にあまり出なかった所為か寒さに免疫がなくな  
っていて、私は冷たい風に必死に耐えながら神社へと続く道を歩い

た。明日香も私と同じらしく、ずっと“寒い”を繰り返している。「ちよつとは我慢できないの？」

そんな明日香に、瑞穂が呆れた様な声を出す。

「だって寒いんだもん！…瑞穂は寒くないの？」

「…寒いけどさ。でももうちよつとで神社なんだから我慢して。お参りが済んだら、何か暖かい物奢ってあげるから。」

「本当？絶対だよ！」

瑞穂にそう言われて、明日香はようやくおとなしくなった。

寒さに耐えながら辿り着いた神社は、大勢の人で賑わっていた。

どこを見ても人だらけ。お参りをしようとする人の列は、中々進んでいかない。それどころか人の波の所為で、境内から押し出されそうになる。

「マジ無理。寒くて凍えそうだし中々進まないし…。」

数十分その状態に置かれて、明日香が泣き言を言い出した。

「もう帰りたい。」

「何言ってるの？初詣行こうって言いだしたの明日香でしょ？」

「そうだけど…。でもこんなに混んできると思わなかったんだもん！人混みの所為か、瑞穂の顔にも苛立ちが見えてきた。私も正直イライラしそうになっていたけど、お正月からつまらない言い争いなんてしたくなくて、何とかみんなの気分を変えようと必死で話題を考えた。」

「そうだ瑞穂！前期試験、本当に受けないの？」

ようやく見つけた話題はあんまり考えたくない受験の事だったけど、何も話さないよりはましだと思って、私は言葉を続けた。

「瑞穂なら絶対前期試験合格できるのに、どうして受けないの？」

「え…。」

瑞穂の顔が赤くなった。それは明らかに寒さの所為だけじゃない。明日香もそれに気付いたみたいで、不思議そうに瑞穂を見る。

瑞穂は暫く黙っていたけれど、やがて言いずらそうに口を開いた。

「…後期試験で入りたいから。」

「だから、何で？」

「…何でだっついていいでしょ。」

「ええ？教えてよ。」

その理由が知りたくて、私は更に瑞穂を問い詰めた。さっきまで不機嫌そうにしていた明日香も、好奇心に満ちた目で瑞穂の顔をじつと見ている。

その視線に耐えきれなくなったのか、瑞穂は仕方なさそうに口を開いた。

「…先輩が…後期試験で合格したから、私もそうしたくて…。」

「先輩って、瑞穂の好きな人の事？」

私の問いかけに、瑞穂は更に顔を赤くして黙って頷いた。

「瑞穂可愛い。」

それを見た明日香が、満面の笑みで瑞穂をからかい始めた。

「好きな人と同じ条件で高校に入りたいなんて、マジで恋する乙女じゃん。」

「う、うるさいよ！」

「やっぱり高校入ったら告白する訳？」

「それは…合格してから考えるっ。」

「いいなあ、好きな人と一緒の高校生活。それは受験勉強も頑張れちゃうよね。」

「そうか…。受験に合格したら、瑞穂は好きな人と同じ高校に行けるんだ…。」

私は志望校に合格しても、好きな人と一緒に高校に行ける訳じゃない。大好きな友達はあるけど、好きな男子はそこにはいない。

高瀬君はきつと付属に合格して、中々会えなくなるだろう。そしてたらきつと私は高瀬君に会いたくて、毎日寂しい想いを抱くだろう。自分で違う高校に行くって決めて納得したはずなのに、考え出すと止まらなかつた。好きな人と同じ高校に行ける瑞穂が、凄く羨ましかつた。

「…いいな。」

思わず口にした呟きに、明日香と瑞穂がはつとした様に見た。そして心配そうな表情をする。

「あ、ごめん！何でもないよ。」

私は慌てて笑顔を作った。せつかく明るい雰囲気になってたのに、私の所為で暗くなるのは嫌だった。

「沙和、やっぱりまだ高瀬君と一緒に高校行きたい？」

私の思いとは裏腹に、瑞穂が真剣な表情で私を見つめた。

「その話はもういいじゃん。それより瑞穂の先輩の事もって教えてよ。」

何とか話を逸らそうと、私は瑞穂にそう告げた。でも瑞穂は「教えてよ。」

と言つて、ひたすら真剣な表情で私を見る。それでも私が話を逸らそうとすると、瑞穂は

「私も言ったんだから、沙和も言つてよ。」  
と、じつと私を見つめた。

多分私は何を言つても、瑞穂は私の気持ちを聞こうとするだろう。それはきつと興味本位とかじゃなくて、私を心配しての事なんだ。

「…うん。」  
話を逸らすことを諦めて、私は小さく頷いた。

「高瀬君と同じ高校行きたいつて、まだちよつと思つてる…。でも高瀬君が付属受かる様に、ちゃんと応援するよ。それに私も…東高に行くつて決めたから、絶対に合格する。」

「沙和…。」  
瑞穂が切なそうな顔をして私を見る。

「そんな顔しないでよ！大丈夫だから。」

私はこの空気を変えたくて、わざと元気に瑞穂に告げた。

「…ずるい。」

「えっ？」

思いもしなかった言葉を聞いて、私と瑞穂はその言葉を発した明日香を反射的に見た。

「ずるいって…、何が？」

明日香が何を言っているのか分からなくてそう尋ねると、何故か明日香は不貞腐れた様な顔をして、じつと私達を見た。

「だってずるいじゃん。二人だけ恋してて、私はしてないなんて。」

「…そんな事言われても…。」

「明日香だって恋すればいいじゃん。」

「…相手がいないもん。」

「田中君は？」

「田中はもうただの友達なの！そんな感情とつくにないよ。」

そんな事を言われても、どうしたらいいのか…。明日香に何を言ったらいいのか分からなくて、私と瑞穂は黙り込んだ。

「よし、決めた！」

そんな沈黙を破るように、明日香が大きな声を出した。

「高校行って凄い格好いい人見つけて、その人と付き合う！」

「うん、そうしなよ。」

「そうやって神様をお願いする！」

「…は？」

再びの明日香の予想外な言葉に、私と瑞穂は顔を見合わせた。

「…それって…。」

「神様をお願いしてどうにかなる事…？」

「誰が何と言っても絶対に叶えてもらう！駄目って言われても聞かないから！」

本気なのかふざけているのかわからない明日香の言葉と真面目な表情が可笑しくて、私と瑞穂は声を出して笑った。

## バレンタインデー

冬休みが終わるとすぐ、私立高校の受験があった。高瀬君もきつと受けただろう。

応援しているはずなのに、複雑な気持ちになる。落ちてほしいとは思わないけれど、受かってしまったらやっぱり寂しい。だって高瀬君が受けたのは、私とは別の、しかも遠くにある高校。高瀬君がそこに受かるという事は、中々会えなくなるということが決まるのと一緒にだから。

私立受験の事を、明日香と瑞穂は一切口にしなかった。そしてただひたすら勉強に励んでいた。

それもその筈、数日後には公立高校の前期試験が迫っていて、その後一ヶ月程で私達が受ける後期試験があるのだから。

私達が勉強するのと同じ位、他の子達も勉強している。少し気を抜いただけで、蹴落とされてしまうかもしれない。毎日がそんな状態の中で、人の事なんて気にしている暇はない。

その日のお昼休み、私達は瑞穂の席に集まり、分からない所を瑞穂に教わっていた。

数日後に控えた受験と結果待ちの生徒の所為で、教室中がピリピリしている。

そんな空気を余所に、廊下で歓喜の悲鳴が上がった。『おめでとう』とか『よかったね』という数人の声も聞こえて来た。

「もう結果が出た子もいるんだね。」

その声を聞いて、瑞穂がため息混じりに言葉を発した。

「私達も早くあんな風に話したいよね。」

よく見ると、教室の中に安心したような顔がちらほら見受けられた。その表情をしているのは皆私立を受けた人ばかり。…そうか、私立受験の結果、もう出てるんだ…。

「…高瀬君も、受かったのかな…。」  
私立受験が始まってから三人の内の誰もが口にしなかった話題。周りの安心した顔を見ているうちに、私は思わずそれを口にしていた。

すぐ傍で明日香と瑞穂がはっとした表情をしている。二人の勉強の邪魔をしてはいけないと、私は

「続きやろう。」

と言ってノートに目を移した。

「…あのさ、沙和。」

そんな私に明日香が声を掛ける。

「田中に聞いてみようか。高瀬君が付属受かったのかどうか…。」

「え、いいよ!」

明日香の言葉を聞いて、私は慌てて首を振った。

「田中君だつて勉強忙しいのに、そんな手間取らせるの悪いよ。それに…もし聞くなら、高瀬君から直接聞きたいから…。」

「…そっか。」

私は明日香に向かってえへへと笑い

「勉強の続きやろうよ。」

と、再びノートに視線を移した。でも明日香は私をじっと見たまま  
で、そして

「沙和、高瀬君に告白しないの?」

と聞いて来た。

「え…!」

明日香のいきなりの問いかけに驚いて、私は持っていたシャープ  
ペンシルを床に落とし、慌ててそれを拾った。

「だって、もうすぐバレンタインデーじゃん。」

そんな私を見ながら、明日香が言葉を続ける。

…そっか、もうすぐバレンタインデーなんだ。受験の事で頭がい  
っぱいで、そんな事忘れてた。

去年のバレンタインデーは、田中君にチョコをあげる明日香に付



き合って、一緒に野球部の練習を見に行った。その後田中君と帰るといふ明日香と別れて、偶然会った高瀬君と一緒に帰ったつけ…。あの時の私はまだ恋を知らなくて、でも高瀬君と一緒に帰ってくれた事が嬉しくて、凄くドキドキした。今思えば、高瀬君を意識しだしたのは、あの日からだったのかもしれない。

「止めた方がいいよ。」

私達の話は黙って聞いていた瑞穂が、突然顔を上げて私達を見た。「バレンタインデーって試験直前だよ？そんな時に勉強以外の事に気を取られるなんて良くないって。」

「でも中学最後のバレンタインデーだよ？高校が離れちゃったら、チョコ渡す機会も無くなっちゃうかもしれないじゃん。」

「それは、そうだけど。でも、もし告白して駄目だったらどうするの？そしたら本当に受験どころじゃなくなっちゃうよ？」

「…駄目かな…？」

言い争っている明日香と瑞穂の声を遠くに聞きながら、私はぼつりと呟いた。

「チョコ…渡しちゃ駄目かな…？」

「え！」

その呟きを聞いて、明日香と瑞穂が一齐に私の顔を見る。

「沙和、告白するの?!」

自分で言っておきながら驚いたような明日香の声を聞いて、私は赤くなって首を横に振った。

「告白なんてしないよ！そんなの怖くて出来ない。ただ、去年高瀬君が、私を作ったチョコ食べて『美味しかった』って言ってくれたの思い出して…。またそう言ってもらえるなら、チョコあげたいなっ…。」

「私はいいと思う！」

明日香が笑顔で私を見た。

「沙和の作ったチョコ美味しかったもん！だから今年も高瀬君にチョコあげなよ。」

明日香の言葉を聞いて嬉しくなって、それから今度は少し不安になりながら瑞穂の顔を見た。瑞穂は私の視線に気付くと、少し考えながら

「まあ、受験に影響しなきゃいいんじゃない？」

と言った。

「本当？じゃあ私、高瀬君にチョコあげる。それで、その時に付属受かったのか聞いてみる。」

「頑張つてね！」

「うん！」

明日香の応援の言葉に、私はドキドキしながら頷いた。

「でも今はとにかく勉強だよ。バレンタインデーに気を取られて高校に落ちる訳にはいかないでしょ？」

確かに、そうだ。

瑞穂に促され、私達は勉強を再開した。

そしてバレンタインデーの朝。

私は自分の部屋で、前日お母さんと一緒に作ったチョコを、おと紙袋の中に入れた。

去年と同じクリアパックの中に、一つだけ青い包装紙に包まれた箱。

気合いを入れてる訳じゃないんだけど、何となく特別な物にしたくて、この前明日香に付き合ってもらって選んできた。

高瀬君、美味しいって思ってくれるかな…。考えただけでドキドキする。

「沙和、そろそろご飯食べなさい。」

一階から聞こえるお母さんの声。私は  
「今行くー。」

と言つて、慌てて階段を駆け降りた。

キッチンにはすでにみんなが集まっていた。私はそれを見ながら  
「おはよう。」

と挨拶をし、自分の椅子に座った。そんな私をお父さんとお母さん  
が、何故か不思議そうな顔で見つめる。

「沙和、お父さんとお兄ちゃんにチョコ渡さないの？」

「あ！そうだった！」

お母さんの言葉に、私は急いで椅子から立ち上がり、昨夜のうちに  
用意しておいたチョコプレートに向かった。

毎年朝一番にチョコプレートを渡していたのに、それを忘れている  
なんて心配になったのか、お母さんが

「具合でも悪いの？」

と私の顔を覗き込んだ。

「大丈夫だよ。」

お父さんとお兄ちゃんにチョコプレートを渡し終えて、私はそう言  
つて椅子に座った。そして朝食を食べ始めると、隣でお兄ちゃんが  
ニヤニヤしながら私を見た。

「…何？」

目玉焼きをつつく手を止めてお兄ちゃんを見ると、お兄ちゃんは  
「別にー。」

と言つて、ニヤニヤしたまま私から目を逸らした。

もしかしたらお兄ちゃんは気付いてるのかもしれない。以前言っ  
たことのある私の“好きな人”に、私が今日チョコプレートをあげよ  
うとしているのを。

恥ずかしくなつてお兄ちゃんから目を逸らした私の耳元に、お兄  
ちゃんが顔を近付けた。そしてお母さん達には聞こえない位の声で  
「まあ、頑張れ。」

と言つて、私の頭にぽんつと手を乗せた。

## 視線

朝の廊下は、思っていたよりも静かだった。チヨコレートの話が全く聞こえない訳じゃないけれど、それを話題にしている子は明らかに去年よりも少ない。

きっと他の学年の廊下は、バレンタインデー特有の賑わいをみせていると思う。でも私達三年生は受験を目前に控えているから、みんなそれどころではないのだろう。

そんな中、私は心臓を大きく鼓動させながら教室へと向かった。手に持っている紙袋の中には、去年より一つ多いチヨコレートのパッケージ。明日香達の分と先生の分、それから自分の分と、高瀬君に渡す分。合計五つ。

去年よりたった一つパッケージが増えただけなのに、その一つ分が妙に重く感じる。

私は胸の苦しさを和らげるように“はあーっ”と大きく息を吐いて、それから教室に入った。

「沙和！チヨコレート持って来た？」

挨拶をするより先に、明日香がそう言って私に駆け寄ってきた。教室に入った瞬間に声を掛けてくるなんて、まるで私を待ち構えていたみたいだ。

「おはよう明日香。うん持って来たよ。」

私はそう言って、袋からチヨコレートのパッケージを一つ取り出し明日香に渡した。

「はい、これ明日香の分。」

「そうじゃなくて…！」

それを手に取りながら、明日香は少し大きめの声を出した。でもすぐにはっと何かに気が付いたような顔をして、それから今度は私に顔を寄せて小さな声で話し出した。

「そうじゃなくてさ、高瀬君にあげる分、持って来たの？」

「え？う、うん…。持ってきた。」

私は持っていた紙袋を開いて、明日香の前に差し出した。他の物とは一っだけ違う青い包装紙に包まれたそれは、すぐに明日香の目に留まったようだ。

「ちゃんと、この前一緒に選んだケースに入れて来たよ。」

「本当だ。綺麗にラッピング出来てるじゃん。」

「うん。これ包む前にね、違う箱で何回か練習したから。思ったよりも上手く包めた。」

そんな事を二人でこそ話していると、後ろから私の名前を呼ぶ瑞穂の声が聞こえた。

瑞穂は私達に歩み寄ると、明日香と同じ様に

「高瀬君にあげるチョコ持ってきた？」

と私に尋ねてきた。私は

「うん。」

と言って、今までしていた様に紙袋を開いて、瑞穂に見せた。

「ちゃんと瑞穂の分も持って来たよ。あ、それから、先生にも渡すから付き合って。」

「それはいいけど…、高瀬君には渡さないの？」

「…えっ？」

私はそう尋ねられて、顔を赤くしながら瑞穂から視線を逸らした。

チョコレートは朝一番に渡す、それが今までの私のポリシーだった。誰よりも早く渡して一番に喜んでほしかったから。私が毎年そうしていた事を、明日香も瑞穂も知ってる。

でも高瀬君には、何故かそれが事が出来なかった。

喜んでほしいという気持ちは勿論ある。他の女の子より先に渡したいという気持ちもある。でも心臓がドキドキすぎて体が言う事をきかない。告白する訳じゃないんだからもつと気楽にすればいいのに、高瀬君にチョコレートを渡すと考えるだけで緊張して、足が

すくんでしまっていた。

「と…とりあえず、先生に渡してからにする。だから二人共、職員室に付き合って。」

私はそう言っつて、自分用に持つてきたチョコレートを一粒口の中に放り込んだ。口の中でチョコレートを溶ける様に、この甘さで緊張が少しでも解ければいいのに…。そう思った。

チョコレートを渡せないまま時間はどんどん過ぎていき、とうとう放課後になってしまった。

チョコレートは渡したいけれど、教室にいる高瀬君を呼び出すのは恥ずかしかったので、私は自転車置き場の近くで、明日香と二人で高瀬君を待った。

家に帰ろうと校舎から出てくる人達が、私達の方をじろじろ見ながら通り過ぎて行く。

多分みんな、私がチョコレートを渡そうとしているのに気が付いているのだろう。でもその視線に気圧される訳にはいかない。だって、高瀬君にチョコレートを渡して、去年みたいに“美味しい”って言っつて欲しいから。それと、高瀬君が付属に受かったのかを、高瀬君の口から聞きたいから。…でももし“チョコレートなんていらぬい”って、拒絶されちゃったらどうしよう…。

そんな事を考えて手を震わせながら唇を噛んでいる私に、明日香が「沙和、来たよ。」

と言っつて、私の腕を揺すつた。その言葉に心臓を今まで以上に高鳴らせながら、私は恐る恐る明日香の視線を辿つた。

その視線の先には、田中君と二人で校舎から出てくる高瀬君の姿があつた。

「なんで田中も一緒なの？」

と、明日香が何故か苛立つたような声で呟く。

「沙和、とりあえず行こう。」

そう言って、明日香が私を見る。

「私田中と話してるから、その間に高瀬君にチョコレート渡しなよ。」

「え…、う、うん。」

「早くしないと高瀬君帰っちゃうよ。」

明日香に急かされて、私は苦しい位胸をドキドキさせながら、明日香に付いて高瀬君達の元に向かった。

「田中！」

明日香が大きな声で田中君を呼び止めた。それに気付いて田中君と隣にいる高瀬君が、足を止めてこっちを見る。

そんな二人を見て、私は持っていたチョコレートのパッケージを自分の後ろに隠した。どうせすぐに渡すんだから、隠す必要なんてない。でももし渡す前に拒絶されたらどうしようとか、チョコレートを渡す事がバレバレなのは恥ずかしいとか考えたら、思わずそうしてしまった。

「何？」

田中君が近くに来た明日香に疑問の言葉を投げ掛ける。すると明日香は

「ちゃん」と勉強してる？」

と、バレンタインデーとは全然関係ない事を田中君に話し始めた。

「は？してるよ。」

「そんな事言って、本当はゲームばかりやってるんじゃないの？」

「してねえよ！」

「本当に？」

私は暫くじつと二人の会話を聞いていた。するといつまでも動くうとしない私に気付いて、明日香が“なにやってるの？”と言いたそうな顔をして、ちらっと私を見た。

その表情にびくっとして、私は視線を下に落とした。それから大きく息を吐いて、唇を噛んだ。

…そうだよ。明日香だって協力してくれてるんだ。早く高瀬君にチヨコレート渡さなくちゃ。

私は顔を上げて、思い切って高瀬君を見た。高瀬君は何か考えている様な表情をして、視線をあちこちに動かしていた。私が声を掛けなければ、その視線は私の方に向かないかもしれない。

「あ、あの、高瀬君。」

私は勇気を出して高瀬君の名前を呼んだ。その声に気付いて、高瀬君がゆっくりと私に顔を向ける。

早くチヨコレート渡さなくちゃ。そう思って後ろからパッケージを出そうとした時、校舎から出てくる大勢の人達がふと目に入った。そのまま明日香の方に視線を向けると、明日香も田中君もじっと私の方を見ている。

こんなみんなの見てる所でチヨコレート渡すなんて絶対に無理…！

私は再び高瀬君に視線を戻して

「あ、あのね…、ちょっと…向こうに来てもらってもいい？」

と高瀬君に告げた。そして高瀬君が頷くのを確認すると、私は背中に明日香達の視線を感じながら、高瀬君の前に立って歩き出した。



## お守り

校舎の陰のあまり人の目に付かない場所に着くと、私は立ち止まって高瀬君の方に振り返った。それに気付いて、高瀬君も足を止める。

こんな所まで来てもらったんだから、早くチョコレート渡さなくちゃ。そう思つて、私はドキドキしながら高瀬君の前にパッケージを差し出した。

「あ、あのね…、これチョコレートなの。良かったら食べて…！」  
差し出されたパッケージを、高瀬君は暫く黙つて見つめていた。それからふと視線を上げて、ちよつと擦れた声で私に尋ねた。

「…何で？」

え…！

何でつて……。

まさかそんな風に聞かれるなんて思つていなくて、私は動揺して視線を泳がせた。

何て答えればいいんだろう…。まさか好きだからなんて言えないし…。

散々悩んだ末に、私は明日香達にも言った、多分一番無難な答えを高瀬君に告げる事にした。

「去年…高瀬君、私があげたチョコ、“美味しかった”つて言ってくれたから。だから今年も食べてほしくて…。」

その言葉を聞くと、高瀬君は顔をしかめて、私から視線を逸らした。

もしかして…迷惑だった…？

彼のその表情を見て、私は泣きそうになつて俯いた。

去年高瀬君が言ってくれた“美味しかった”という言葉。今年も

その言葉を聞きたくて、私はチョコレートを渡そうと決心した。でももしかしたら、本当は凄く迷惑だったのかもしれない。去年の高瀬君の言葉は、ただ私に気を遣って言うてくれただけのものだったのかもしれない。その証拠に今高瀬君は、不機嫌そうな顔をしている…。

「あの…ごめんね…。」

泣きそうな気持ちを必死で抑えながら、私は口を開いた。

「迷惑…だったよね…。その…、無理に受け取らなくていいから…。」

それ以上何か言ったら泣いてしまいそうで、私はきゅっと唇を噛んでその場から離れようとした。

その時

「ちよつと待つて…！」

と私を呼び止める高瀬君の声が聞こえて、私は泣きそうな表情をしたまま高瀬君の顔を見た。すると高瀬君は

「違うから…。迷惑じゃないから。」

と、慌てた様な目で私を見た。

多分高瀬君は、私に気を使ってくれているんだ。私が傷つかないように、必死に考えてくれているんだ…。

「…いいよ。無理しなくて。」

視線を落としてそう告げると、高瀬君は

「本当に迷惑じゃないから。」

と言つて、私の前に右手を差し出した。

その手に驚いて顔を上げると、高瀬君は左手を耳の後ろに当てて、困った様な表情をしていた。その後暫く何も言わず俯いていたけれど、ふと私を見て

「…くれるんでしょ？チヨコ…。」

と、呟くように言った。

本当に…渡していいの？無理してないの…？

高瀬君の本当の気持ちを知りたくて、私は彼の目をじっと見つめながら確認の意味を込めて

「…無理しなくても、いいよ?」

と再び告げた。すると

「無理なんて、してない。」

という、はつきりとした声が返って来た。

「…本当?」

それでもまだ不安でそう尋ねる私の目を見て、高瀬君がこくんと頷いた。

おずおずと差し出したパッケージを、高瀬君が無言で手にする。

本当に、受け取ってくれた…!

それがどうしようもなく嬉しくて、私は思わず

「ありがとう。」

と高瀬君に伝えた。すると高瀬君は一瞬驚いた様な表情になって、それから視線を下に向けて、何故か可笑しそうに笑い出した。

「な、何で笑うの?」

笑われた事に動揺して私がそう尋ねると、高瀬君は顔を上げて

「だってチヨコを貰ったのは俺なのに、くれた山口さんが“ありがとう”って、可笑しいじゃん。」

と言った。

「それは、確かにそうかもしれないけど…、でも言いたかったんだもん!」

高瀬君に笑われて恥ずかしくて、私はちよつとムキになってそう言った。それでもまだ高瀬君は笑っている。そんな彼を見ていたら私も何だか可笑しくなって来て、高瀬君に釣られる様に笑い始めた。

暫く二人で笑って一息つくつと、高瀬君がはにかんで

「俺、付属受かったよ。」と私を見た。

「え…?」

それを聞いた私の心に、ちくんと痛みが走った。

受験の結果がどうだったのか、私は本人の口から聞きたいと思っていた。そしてそれが叶った。それなのに、さっき痛んだ心から、悲しみが溢れて来る。離れてしまう事が、これで本当に決まっちゃったんだ…。

でもここで寂しい顔なんてしちゃいけない。だって私は高瀬君に、応援すると言ったんだから。それに、受験の合格はとても喜ばしい事なんだから…。

「おめでとう！良かったね。」

無理矢理笑顔を作って高瀬君に祝福の言葉を伝えると、高瀬君は「ありがとう。」  
と言ってほっとしたように微笑んだ。

彼が笑ってくれるのは凄く嬉しい。そしてその顔が見られる事も、でも私は、これ以上笑顔を作っている事は出来ない…。

笑顔が消える前に高瀬君から離れたくて“戻るね”と言おうと口を開きかけた時、高瀬君が制服のポケットから何かを取り出して、私に差し出した。

「これ、山口さんにあげる。」

それは“学業成就”と書かれたお守りだった。きつと高瀬君が試験の時に持っていた物なんだろう。

そんな大事な物を、私に…？

「…何で？」

私は思わず高瀬君にそう聞いた。まさか高瀬君からお守りを貰うなんて、予想もしていなかったから。

高瀬君は私の疑問の言葉を聞くと、私から視線を離し目を泳がせ始めた。もしかして、返事に困ってる…？

私はふと、さっき高瀬君に“何で？”と聞かれた時の事を思い出した。

あの時の私は、まさかそんな事を聞かれるなんて思わなくて、なんて返事をすればいいのか凄く悩んだ。それを経験して、その質問

が凄く困るものだと知っているのに、私はそれを高瀬君に投げ掛けちゃったんだ…！

「あ、あの、高瀬君…。」

私は慌てて高瀬君の名前を呼んだ。

もう理由なんてどうでも良かった。それよりも、高瀬君を困らせてしまった事の方が気になった。だから“変な事聞いてごめんね”と言おうとしたんだけど、それよりも前に高瀬君が口を開いた。

「…俺の受験、応援してもらったから。だから今度は、俺が山口さんを応援しようと思って…。」

心臓がどくんつと鳴った。そして、何か温かいものが全身に広がった。

高瀬君が私を応援してくれるなんて…。そんなの、嬉しすぎる…！  
お守りも勿論嬉しいけれど、高瀬君のその言葉が、なにより私の力になる。

「これ、俺が受験の時に持ってたやつだから、効き目は絶対あると思う。」

高瀬君はそう言つと、視線をお守りから私に移した。そして

「受験、頑張つて。」  
と微笑んだ。

「沙和、そろそろ時間よ。」

一階から、お母さんの声が聞こえる。私は「はい。」

と返事して、自分の部屋を見渡した。

忘れ物は無い。必要な物は全部持った。あとは、今まで一生懸命勉強してきた成果を、試験で出すだけだ。

「大丈夫？落ち着いて、頑張るのよ。」

一階に降りた私に、お母さんが声を掛ける。でもそう言ったお母さんの方が何だか落ち着かないように見えて、私は笑いながら

「大丈夫だよ。」  
と言った。

「あ、沙和行くんだ。」

玄関に向かう私に気付いて、お兄ちゃんがリビングから顔を出した。

「精々滑らないように気を付けろよ。」

「な、何でそういう事言うの?!絶対に大丈夫:あ!」

よそ見をしながら歩いていた所為か、私は玄関マットに足を捕られて転びそうになった。それを見ていたお兄ちゃんが、慌てて腕を掴んで私を支える。

「だから言っただろ。:お前、本当に大丈夫?」

「だ、大丈夫だよ!!」

心配そうな目をするお兄ちゃんに、私は体制を整えながら赤くなつて言い放った。

絶対に、大丈夫。今まで一生懸命勉強してきたんだから。やれる事はやった筈。

それに:。

私はコートのポケットに手を入れて、薄い長方形の感触を確かめた。それは高瀬君から貰った、高瀬君が受験の時に持っていたお守

り。

「このお守りを持っていて、高瀬君は受験に合格した。それに今の私には、“応援する”と言ってくれた高瀬君の言葉がある。」

「じゃあ、行ってくるね。」

お母さんとお兄ちゃんに笑顔で手を振って、私は大きく息を吸い込み玄関のドアを開けた。

## 卒業

体育館に並べられた椅子に、生徒達が座っている。その中からすすり泣く声が聞こえて来て、私も釣られる様に目に涙を浮かべた。

卒業の日。

着慣れた制服ともこの校舎とも、今日でお別れだ。いつもは長くて退屈な校長先生の話も、今日は貴重なものに思える。

過ごしている間は長く感じた三年間も、今思えばあっという間だった。

入学してすぐ、席が近かった明日香や瑞穂と仲良くなった。学校にいる時も遊びに行く時も、私達はいつも一緒だった。楽しい事も辛い事も、三人で分かち合ってきた。

クラスの子とも色々話したな。たまに男子と女子で言い合いする事もあったけど、苦手だった体育祭とか、合唱祭とか、クラスのみんなで協力して応援しあって頑張った。修学旅行の時は恋の話で盛り上がったっけ。

そんなクラスの子とも、今日でお別れ。中には同じ高校に行く子もいるけれど、もしかしたらもうほとんど会わなくなる子もいるかもしれない。

そんな事を考えていたら涙が止まらなくなって、もっとみんなと居たかった、もっとみんなと話したかったっていう想いが、どんどん溢れて出して来た。

私は下を向いて、必死で嗚咽を堪えながら涙を拭った。

式が終わって教室に着くと、私達から少し遅れて先生が入って来た。

先生は黙ったままゆっくりと私達を見回して、それから

「みんな、卒業おめでとう。」

と口を開いた。



「こうして全員で卒業式を迎えられて、先生は本当に嬉しいですよ。しかも全員進路が決まって…、本当に良かった。」

先生の言葉を聞いて、みんなキョロキョロと周りの子を見始めた。そして目が合うと、どちらからともなしに頬笑み合う。

公立の二次試験の合格発表があったのは、卒業式の少し前だった。試験の日は『絶対に大丈夫』と自分に言い聞かせていた私も、さすがにその日は朝から落ち着かなかった。発表の時間になって自分が合格したと知った時は、悲鳴を上げる位嬉しかった。その後明日香も瑞穂も、そしてクラスの全員が合格したと知って、私達はみんな喜び合った。勿論お父さんもお母さんもお兄ちゃんも喜んでくれた。でも全員の合格を本当に一番喜んだのは、先生だったのかもしれない。

「みんなは今日で中学を卒業して、それぞれが新しい進路へと向かいます。全員が一緒に居られるのも、今日で最後です。でも三年間この中学で学んだ事やみんなで過ごした事は、決して忘れないでください。先生もみんなと過ごせた事を決して忘れません。…みんなの先生で居られて、本当に幸せでした。ありがとう。」

先生の目が潤んでいる様に見えた。そして私の目からも涙が溢れた。卒業式であんなに泣いたのに、一体どれだけ泣けばいいんだろ…。でも涙は全然止まらなかった。そしてそれは私だけじゃなかったみたいで、教室のあちこちからみんなのすすり泣く声が聞こえて来た。

「先生！」

突然、一人の男子が立ち上がった。私達は涙目のまま一斉にその男子を見た。すると彼は

「俺、このクラスで本当に良かった。それから、先生が担任で本当に良かったです。ありがとうございました！」  
と先生に告げた。それを聞いた先生は

「ありがとう。先生も、佐々木の先生で良かった。」

と頬笑んだ。

「私も！」

ガタンツと椅子を鳴らして、今度は千穂ちゃんが立ち上がった。

「私も、先生の事もこのクラスの事も本当に大好きでした。ありがとうございました！」

それを皮切りにして、次々とみんなが立ち上がって先生にお礼の言葉を伝えた。先生も言葉をくれた一人一人に、お礼や激励の言葉を伝える。私も泣きながら先生にお礼の言葉を伝えると、先生はそんな私を見て優しく頬笑んでくれた。

一体何人が先生に言葉を伝えただろう。ふと先生の目から涙がこぼれた。

初めて見る先生の涙に驚きながらも、私達の目からも涙が溢れた。それを見ていた教室の後ろや外にいるお母さん達からも、すすり泣く声が聞こえて来た。

それは、寂しいとか嬉しいとか感謝とか、色々な気持ちが入り交じった涙。決して悲しいだけの涙じゃない。

「またいつか、絶対に全員で会いましょう。」

みんなの言葉が終わると、先生は涙目のままそう言って笑った。

「はい！」

私達も泣きながら笑って、先生の言葉に返事をした。

「本当にこれで卒業なんだね…。」

一人、又一人と帰っていく教室の隅で、明日香が呟く様に言った。

「うん…そうだね…。」

私もそう呟いて、また溢れそうになった涙を慌てて拭いた。

教室のあちこちから『また会おうね』とか『元気でね』といった

声が聞こえてくる。私達の所にも帰る間際の子達が挨拶に来て、その度に寂しい気持ちになりながらも笑顔で挨拶を返した。

突然、私達から少し離れた場所で

「えー!!」

という数人の子の大きな声が聞こえた。びっくりしてそちらに視線を向けると、話題の中心にいるのは、どうやら修学旅行の時同じ部屋だった知美ちゃんの様だった。

何があったのか気になって、私はじっと聞き耳をたてた。ちょっと離れた場所に居るから良く聞こえないけれど、知美ちゃんの周りにいる子達は、知美ちゃんの事を心配している様だった。

「…後悔したくないから。」

知美ちゃんの声が聞こえた。するとみんなは口々に「頑張つて!」

と知美ちゃんに伝え、それを聞いた知美ちゃんは

「うん。」

と力強く頷いて、教室を出て行った。

「どうしたんだろうね?」

知美ちゃんが教室から出て行った後、私はそう言って明日香と瑞穂を見た。

「うん。」

そう言いながら、明日香と瑞穂が顔を見合わせる。

「何?」

その答えが気になって二人を見ると、瑞穂がふと私を見て

「ねえ、沙和。」

と私の名前を呼んだ。

「何?」

「今日、高瀬君と会った?」

「え…?」

突然の瑞穂の言葉に、私は顔を赤くした。

「…卒業式の時にならんと見たけど、でも、会ってはいない…」

「高瀬君と、何も話さなくていいの？」

瑞穂の問いかけに、私の心臓が重く早く鼓動し始める。

「…話したいよ。話したいけど…」

「絶対話した方がいいって。だって今日が最後になっちゃうかもしれないんだよ？」

…瑞穂の言う通りだ。だって私達は、今日で中学を卒業するんだから。この学校で高瀬君と会う事は、多分二度とない。

いつかゆみさんが言っていた様に会いたかったら会いに行けばいいんだろうけど、もし会いに行ったらとしても会えるかどうかなんて分からない。それ以前に、本当に会いに行かれるかどうかすら分からない。

高瀬君が近くにいる確実なチャンスは、もう今日だけなんだ。今日を逃したら、二度と話せないかもしれない。

「私…」

「沙和。」

口を開いたその時、後方で私を呼ぶ声がした。

「…お母さん。」

振り返ると、そこにはお母さんの姿があった。お母さんは私達に近付くと、笑顔で

「みんな、卒業おめでとう。あと、受験合格も。本当に良かったわね。」

と言った。

「ありがとうございます。」

明日香と瑞穂が、お母さんにお礼の言葉を返す。

「まだ色々話したい事はあるだろうけど、お母さん、買い物したりしなきゃいけないから…。だから沙和、そろそろ帰りましょう。」

「…え？」

お母さんの言葉を聞いて、私は顔を曇らせた。そして明日香と瑞穂に顔を向けると、二人共心配そうに私を見ていた。

「また春休みにも会えるでしょう？」

「そんな私達を見て、お母さんが声を掛ける。」

「そうだけど…。」

確かに明日香と瑞穂とは春休みにも会えるけど、でも今私が帰りにたくない理由はそれじゃなくて…。

「ねえ、春休みにみんなで遊ぼうよ。」

暫く黙ってお母さんと私を見ていた明日香が、笑顔で言った。

「田中達も誘うからさ。だから、今日はこれでバイバイしよう。」

「え…。」

“達”という事は、高瀬君も一緒にという事なんだろう。明日香は多分私が悩んでいるのを見て、必死で考えてくれたんだ。

「うん。絶対に遊びに行こう。」

瑞穂も笑顔で私を見る。

「じゃあ、帰りましょうか。」

「…うん。」

私はまだ後ろ髪が引かれる思いでいたけれど、仕方なくお母さんの言葉に頷いた。二人がこう言ってるんだもん、また高瀬君と会えるよね…。

「明日香ちゃんも瑞穂ちゃんも、また家にも遊びに来てね。」

「はい、絶対行きます。じゃあ、沙和またね。」

「うん、またね。」

私を笑顔で見送る明日香達に手を振ると、私はお母さんに付いて教室を後にした。

## 大好きなこと

廊下をきよろきよろと見回しながら、私はお母さんの隣を歩いて  
いた。

今日で最後となるこの学校をよく見ておきたい、そんな気持ちも  
あったけど、それよりも、もう一度でいいから高瀬君の姿が見たか  
った。

春休みに明日香が高瀬君達を誘ってくれると言っていたから多分  
また会えると思うけれど、でも中学の制服を着た高瀬君には二度と  
会えない。それにこの校舎で　私が高瀬君に恋をしたこの場所で、  
高瀬君に会えるのは今日で最後。

高瀬君が過ごした教室。高瀬君と挨拶を交わした廊下。夏休みに  
偶然会った図書室。いつも一生懸命野球の練習をしていた校庭。あ  
ちこちに残っている高瀬君との思い出。でも今そこには彼の姿はな  
い。

会えないのかな…。

私はなんだか切なくなつて、また泣きそうになつた。でもその気  
持ちは必死で押さえて、下駄箱で靴を履き替え外に出た。

少し歩いた所で立ち止まり、もう一度校舎を見る。

三年間通つたこの場所とも、本当にお別れなんだ…。ここで高瀬  
君と会う事も、もうないんだ…。

「沙和。」

お母さんに呼ばれて、私は校舎から視線を外した。そしてお母さ  
んの方に振り返ろうとした時、校舎の陰の人の目に付かない所に、  
誰かが立っているのに気が付いた。よく見ると、それはさつき教室  
から出ていった知美ちゃんだった。

何してるんだらう…？

気になつた私は、知美ちゃんがいる場所にちよつとだけ近付いた。

すると知美ちゃんの近くに、もう一人誰かがいるのが目に入った。学ランを着ているその男子は、確か隣のクラスのバレー部だった人だ。　　そういえば修学旅行の時、隣のクラスのバレー部の人が好きだって知美ちゃんが言ってた。じゃあ、もしかしたらあの人って…。

『後悔したくないから…』

ふと私の頭の中に、さつき教室で言っていた知美ちゃんの言葉が浮かんだ。あの時は分からなかったけど、今なら分かる。きつとその言葉は、好きな人の事を思い浮べて言った言葉だったんだ。

それまで俯いていた知美ちゃんが、思い切った様に顔を上げて彼に何か言った。それを聞いた彼は驚いた様な表情になって、じつと知美ちゃんの顔を見つめた。

知美ちゃんが言ったのは、多分『好き』っていう気持ち。どんな答えが返ってくるか分からなくて怖いけど、後悔したくなくて、だからめいっぱいの勇気を出して彼への想いを伝えたんだ。

私は…？

私はこのままでいいの？

高瀬君に何も言わずに帰ってしまって、後悔しないの？

春休みに遊べるように、明日香が高瀬君達を誘ってくれるって言うっていた。だから多分また会えるって思った。でもそれは“多分”で、“絶対”じゃない。もしかしたら断られて、もう会えないかも

しれない。

そしたら私はどうするんだろう。もう会えないからって諦めるの  
だろうか…。うつん、それよりも、何であの時話さなかったんだろ  
うって絶対後悔する。高校に入ってもその後も、ずっとずっと後悔  
する。

「お母さん！」

私は知美ちゃん達から視線を外してお母さんに顔を向けた。そして

「私…私ね、どうしてもやらなきゃいけない事があるから…、だか  
ら先に帰ってて！」

とだけ言って、校舎に向かって走り始めた。

「え?!ちよつと沙和?」

後ろでお母さんの私を呼ぶ声が聞こえる。でもそれには振り返ら  
ず、校舎の中に入った。

高瀬君はまだ学校にいるだろうか…。うつん、絶対いる!そう信  
じたい。

急いで三組の教室に向かい中を覗いて見回したけれど、やはりそ  
こに高瀬君の姿はなかった。…もう帰ってしまったんだろうか。焦  
りが徐々に込み上げてくる。

「あれ?沙和?帰ったんじゃないの?」

名前を呼ばれて振り向くと、そこにはそれぞれのお母さんという  
明日香と瑞穂が立っていた。

私は二人のお母さんには目もくれず

「高瀬君見なかった?!」

と凄いい勢いで明日香に聞いた。聞かれた明日香は驚いた表情をして  
瑞穂と顔を見合せて、それから

「うつん、見てないよ。」

と首を振った。

「どつしたの?」



その様子を見ていた瑞穂が私に寄って来た。

「何かあったの？」

瑞穂の言葉に私は首を振った。そして

「何かあったって、訳じゃないよ。でも、どうしても高瀬君と話したいの！後で後悔したくないの！」  
と告げた。

「よし。じゃあみんなで探そう！」

それを聞いた明日香が力強い目で私を見た。

「早くしないと高瀬君帰っちゃうよ。」

明日香は彼女のお母さんに

「先に帰ってて。」

と告げると、

「沙和早く！」

と言って廊下を走り始めた。瑞穂も同じ様にして、明日香の後を追いかける。

私は、その様子をただ黙って見ている二人のお母さんに向かってペコリと頭を下げて、それから明日香と瑞穂を追って廊下を走り始めた。

「高瀬君、何処にいるんだろう。」

「とりあえず手分けして探した方がいいんじゃない？私あっちの方見てくるから、沙和と明日香は別の所探して！」

「うん。じゃあ私は外見てくる。沙和は学校の中探しなよ。」

私達は一旦別れて、高瀬君を探し始めた。

高瀬君、どこにいるんだろう……。教室にも廊下にもいなかった。

図書室を覗いても職員室を覗いても、何処にもいない。あと高瀬君が行きそうな場所って、高瀬君の姿を良く見た場所って……。

……。もしかして。

はっと思いついて、私はその場で足を止めた。

高瀬君の姿を良く見た場所。高瀬君が好きで良く行っていた場所。

さつき見た時はそこにはいなかったけれど、でももしかしたら今はそこにいるかもしれない。

「沙和！」

立ち止まっていた私の元に、明日香がはあはあと息を切らせながら近付いて来た。

「高瀬君、いたよ！今、野球部の部室から出て来て、校庭の方に向かった…！」

「やっぱり…！」

どうして気付かなかったんだろう。高瀬君が本当に好きで、一生懸命で、部活を引退してもずっと気にしていたそれをやっていた場所。大好きな野球を、みんなとやっていた場所。

「私、瑞穂探してくから、沙和、先に行つてなよ。」

「うん。」

私は必死で廊下を走り下駄箱で靴を履き替えると、そのまま校庭に向かった。するとそこには、制服姿のまま楽しそうに野球をしている高瀬君達の姿があった。

一緒に野球をしている人達の中には、田中君の姿もあった。あと数人の同級生らしき男子と、それに交じって一年生や二年生らしき男子。それぞれみんなが楽しくそうで、凄くはしゃいでて。

「沙和。」

しばらくすると、明日香が瑞穂を連れて私の所にやって来た。

「どうしたの？」

二人はそう言うと、私が見ている場所に視線を向けた。

「…本当に、野球好きなんだね。」

瑞穂が微笑みながら、でもちょっと呆れたようなため息を吐いて呟くように言った。

「…うん。」

視線を校庭に向けたまま、私は瑞穂の言葉に頷いた。

「沙和どうする？田中に言つて、高瀬君連れて来てもらおうか？」

「うっん。」

明日香の問いかけに、私は小さく首を振った。

「終わるまで待ってる。…それに、もう高瀬君が野球をしてる所見れないって思ってたから、見れるの嬉しいし…。だから、終わるまで見ていたい。」

「そっか。」

私の言葉を聞くと明日香と瑞穂は微笑んだ。そして二人共、再び校庭に目を向けた。

## 校庭

誰が言うともなしに、私達の足は自然と鉄棒の方に向かっていた。まだ明日香が田中君と付き合っていた頃毎日のように来ていた、校庭の隅の鉄棒が設置されている場所。私達はあの頃していた様に鉄棒に凭れ掛かると、何も言わずに、楽しそうに野球をしている彼らに目を向けた。

思えば、高瀬君を初めて知ったのもこの場所だった。私達の方に飛んできたボールを、寸前で受け止めてくれたのが高瀬君だった。あの時は彼の顔も良く見えなくて、名前だって後で明日香に聞くまで知らなかったけど、ぴんと伸びた背筋がとても印象に残った。明日香に彼の名前を聞いて彼が誰なのかを知った後、私は知らないうちに彼の事を目で追うようになっていた。放課後にはこの場所で、それ以外にも廊下ですれ違った時だとか。

二年の時のバレンタイン、春休みに行った遊園地。彼と接する事がだんだん増えて、いつの間にか私は彼を好きだと意識し始めていた。ちゃんと自覚したのは修学旅行の時だったけれど、でもきつとそれよりずっと前から、私は高瀬君の事が好きだったんだ。それに最初に気付かせてくれたのは、明日香だった。

私はちらつと明日香を見た。明日香は私の視線には気付かず、じつと前を見ていた。多分明日香が見ているのは、田中君の姿なんだろう。一年前にもそうやって見ていた様に。

二年生になつて付き合い始めた二人は、本当に仲が良かった。私達から見ても羨ましい位だった。でも進路の事で喧嘩してすれ違って…。春休みに涙を見せて以来泣くことはなかったけれど、多分あの時明日香は、物凄く悩んだと思う。そして結局別れる道を選んで、でもその後も友達として田中君と仲良くしてて…。

きつと明日香にも色々と思ひ出す事があるんだろうな。

瑞穂は塾があるからあまり一緒には来なかったけれど、たまに一

緒に来た時には本当に色々な事を話した。

まだ私が恋を知らなくて『お兄ちゃんが好き』と言っていた頃、瑞穂はムキになって明日香と私の気持ちの違いを話したっけ。その事をお兄ちゃんに話した時や私がおかしな事を言った時、瑞穂は怒ったり呆れたりからかったりしていたけれど、でもいつも私達の事を考えてくれた。明日香と田中君の事も、私と高瀬君の事も、瑞穂は色々とアドバイスをしてくれた。時には喧嘩もしたけれど、本当に頼れる存在だった。

でもこれからは私も瑞穂の役にしたい。好きな先輩がいる、私達とは別の高校に行く瑞穂。その瑞穂が何か悩んだ時に、いつでも話を聞いてあげたい。例え高校が離れても、ずっとずっと仲良くしていきたい。

色々な気持ちを抱きながら、私達は校庭を眺めていた。楽しかった事とか辛かった事、それから、これからの事とか、本当に色々な気持ちを。

どれくらいの時間が経ったのか。楽しそうに野球をしていた高瀬君達が、一ヶ所に集まった。そして自分達の足跡が残る地面を綺麗に整備すると、何やら楽しそうに話ながら校庭の外に歩きだした。

「沙和、高瀬君帰っちゃうよ。早く行かないと…!!」  
隣で明日香が私を急かす。

私はドキドキと高鳴る胸を少しでも落ち着かせようと大きく息を吸って、それから

「…行って来るね。」  
と二人に告げた。

「一人で大丈夫？」

心配そうに尋ねる瑞穂の言葉に頷き、高瀬君がいる方向へと向かう。

何て言っただけ呼び止めたらいいいんだろう…。他の男子もいるし、嫌がられないかな…。

不安になりながら高瀬君目がけて足を進めると、みんなと一緒に歩いていた高瀬君がふと立ち止まり、今まで楽しそうに野球をしていた校庭を、じっと見つめた。

声を掛けるなら、今しかない…！こんなチャンスは、きつともう来ない。

高瀬君と一緒に歩いていた男子達は話に夢中になっていて、高瀬君が立ち止まった事にまだ気付いていない。彼らが高瀬君を呼ぶ前に、早く…早く声を掛けなくちゃ…！

「高瀬君！」

数メートル離れた場所から、私は高瀬君の名前を呼んだ。それに気付いた高瀬君が、ゆつくりと私の方に顔を向ける。

それと同時に、高瀬君の少し前を歩いていた男子達が振り返った。そして興味深そうに高瀬君と私を交互に見始めた。

思いもしなかった彼らの視線に、私は思わず足を止めた。まさかこんな風にみんなに注目されると思わなかった。こんなにみんなが見ている中で、私の気持ちを高瀬君に伝えるなんて、そんな事、出来ない…！

「高瀬！」

私達に注目している男子の中から、高瀬君の名前を呼ぶ田中君の声が聞こえた。その声に反応して、高瀬君がそちらに目を向ける。

私はびくびくしながら、田中君を見て、それから高瀬君に視線を移した。

もし田中君が『帰ろう』と言ったら、高瀬君は男子達と一緒に帰ってしまうんじゃないだろうか。高瀬君がここから離れてしまったら、私はどうしたらいいんだろう…。

でも、田中君がその後続けた言葉は、私にとってかなり意外なものだった。

「俺達、先に行ってるわ！」

田中君はそう言うと、周りにいる男子達を先導するかのようになり、先に立って歩き始めた。それを見た男子達が、慌てた様に田中君の後を追う。まだちらちらと私達を気にしている男子もいたけれど、田中君に何か言われると、仕方なさそうに去って行った。

多分彼らは私が今から高瀬君に何を言うのか、薄々気付いているのだろう。それを考えると恥ずかしいけど、でもここで冷やかされなくて、本当に良かった。

もし田中君が『先に行ってる』って言うてくれなかったら、男子達は今もここにいたかもしれない。田中君のお陰で、私は高瀬君と二人になれた。

ありがとう…！

田中君の後ろ姿を見ながら、私は心の中で彼に感謝をした。

高瀬君はその場所から動く事はなく、男子達が去っていく姿を黙って見ていた。そして彼らの姿が小さくなると、田中君の背中を見ていた私に近寄り、私の目の前で足を止めた。

それに気が付いて、私はドキドキしながら高瀬君に目を向けた。緊張の所為か、高瀬君の顔を見る事は出来なかった。代わりにさつき野球をしている時に付いたのである彼の制服の汚れを、ぼんやりと見つめた。

言う言葉は決まっているのに、何故か声が出て来なかった。高瀬君の顔を見たいのに、彼がどんな表情をしているのかと思うと怖くて、中々顔が上げられない。

何も言えずに、私はその場に立ち尽くした。高瀬君も何も言わな

かつた。

二人の間に、長い沈黙が流れた。



## 高鳴る鼓動

私と高瀬君の間に流れる沈黙。それをどうにかしなくちゃいけないと思いつつも、私は何も言えずに立ち竦んでいた。ずっと探していた高瀬君が今、一緒にいた男子から離れて私の目の前に居てくれるというのに。

きっと彼は、私がか言うのを待っていてくれるのだろう。分かっているのに、中々言葉が出て来ない。

私、どうしたいの？

勇気を出せない自分が齒痒くなって、私は自分自身に問いかけた。

何の為に高瀬君を呼び止めたの？

それは…、後悔したくないと思ったから。彼に気持ちを伝えたいから。

そう思ってるんだったら、言わなくちゃ。自分の気持ちを、高瀬君に伝えなきゃ…！

「あ…さ。」

私達の間流れていた沈黙が破れた。それを破ったのは、私ではなく高瀬君だった。

私は彼の声に肩を震わせ、反射的に顔を上げた。何を言われるんだろう…それを考えると怖くて、自然に心臓の音がうるさくなる。

「受験、どうだった？」

高瀬君が、真つすぐに私を見て言った。その言葉を聞き、私はほつとして小さく息を吐いた。

もしかしたら『帰る』と言われてしまっんじゃないかと思っていたから、そうじゃなくて本当に良かった。うるさかった心臓が、少しだけ落ち着いた様な気がする。

「うん…。合格したよ。」

「そっか。」

高瀬君が私の返事を聞いて、安心した様に微笑む。彼のその表情を見て、私の心も喜びで一杯になった。

高瀬君、私の受験の事、本当に気にしてくれていたんだ。『応援する』というあの言葉は、嘘じゃなかったんだ。

彼の言葉には、いつだって嘘がない。時にはその言葉に傷つく事もあるけれど、いつも正直で、真つ直ぐで…。

ぶっきらぼうだけど、本当は凄く優しい人。そんな人だからこそ、私は彼を好きになったんだ。

高瀬君を好きになって、本当に良かった。

そう思ったら、どうしようもなく好きだって気持ちを伝えたくなかった。もう結果なんてどうでもいい。私の気持ちを高瀬君に知って

ほしい。

私は顔を上げて、口を開こうとした。でもその前に高瀬君が

「あのさ…。」

と、私に声を掛けた。

せつかく気持ち伝えようとしたのに、言いそびれてしまった。

タイミング、悪いなあ…。

でもそんな事言っても仕方ない。言いたいと思うなら、またタイミングを見つけて言えばいいだけの事だ。

私は気を取り直して

「何？」

と高瀬君に尋ねた。すると高瀬君は、何故か私から視線を逸らしてそれからちよつと言いにくそうに口を開いた。

「あのさ…、春休み、何処か遊びに行かない…？」

「え…？」

予想外のその言葉に、私はふと考え込んだ。

春休みが終わったなら、高瀬君はみんなとは離れた高校に行く。だからその前に、みんなで遊びたいって思ってるんだ。

誘ってもらえたのは凄く嬉しいし、私だっけ行って行きたいと思う。でもそうになると、好きって気持ちを伝えるの、今はやめた方がいいのかも…。

結果はどうでもいい…とは言っても、告白して振られたら、確実に高瀬君とは気まずくなってしまうだろう。もしたら高瀬君だって私と会わずらくなるだろうし、遊びに行く話も無かった事になるかもしれない。それは、出来たら避けたい。

「…嫌なら、いいけど…」

高瀬君が呟くようにそう言った。その言葉にはっとして顔を上げると、目の前に不機嫌そうな表情をした高瀬君がいた。

「ち、違うよ！嫌じゃないよ…！」

私は慌てて高瀬君に告げた。

「行きたい…っていうか、絶対に行く！明日香と瑞穂にも伝えるから、だからみんなで遊びに行こう…！」

それまで視線を逸らしていた高瀬君が、ちらっと私を見た。そしてまた視線を逸らして、ぼそつと呟いた。

「…みんなの方がいいなら…それでもいいけど…。」

え…？それ、どういう意味？

『それでもいい』って事は、そうじゃないって事だよ…？

もしかして…もしかして…それって…。

「…二人で…って事？」

もし違っていたら本当に恥ずかしいんだけど、でもどうしても確かめずにはいられなくて、私は赤い顔をして高瀬君を見つめた。でも高瀬君は私の問いかけには反応せず、不機嫌そうな表情で外方を向いたまま、左の手のひらで耳の後ろを擦っていた。

やっぱり違ったのかも…！どうしよう、凄く恥ずかしい。しかも私に変な事言っちゃったから、高瀬君、困ってるよ…！

「ご…ごめんね！変な事言って！」

私は赤い顔のまま、慌てて高瀬君に言った。

「困らせちゃったよね…？あの…今の、忘れて！」

その言葉を聞いた高瀬君の手が、ピタツと止まった。そしてゆっくりと私に視線を向け、ぼそつと呟いた。

「…忘れられたら、困る。…二人でって、それ、間違ってるから…。」

心臓がうるさい位に鼓動する。嬉しい気持ちと信じられないという思いが、ごちゃ混ぜになる。

…今の、嘘じゃ、ないよね…？聞き間違えじゃないよね…？！

「…嫌なら、いいけど…。」

高瀬君は再びそう言うと、拗ねたような表情を私に見せた。

「い、行く…！絶対に行く…！！」

嬉しすぎて頭に血を上らせながら、私は必要以上の大きな声で高瀬君にそう告げた。すると高瀬君は安心した様な表情になって、それからちよつと可笑しそうに、笑った。

「沙和、どうだった？！」

高瀬君がその場から去ると、それを待っていた様に、明日香と瑞穂が私に駆け寄ってきた。私はまだ頭に血が上った状態で、ぼーっとしながら明日香達に視線を向けた。

「高瀬君に好きって言えた？高瀬君、何て言ってた？」

「…あ！」

明日香の言葉に、私ははっと我に返った。

そういえば私、高瀬君に自分の気持ち言っていない。高瀬君の誘いに舞い上がってしまったって、好きって言うの忘れてた！

「い、言っていない。」

私は動揺しながら、明日香達にそう告げた。すると二人は「何やってるの？！」

と、私を責めるように大きな声を出した。

「自分の気持ち言いたくて、高瀬君を探してたんじゃないの？！」

「う…うん、そうなんだけど…、すっかり忘れちゃって…。」

「すっかりって…。」

私の言葉に、瑞穂が呆れた様のため息を吐く。

「じゃあ今まで何してたの？高瀬君と何話したわけ？」

「え…、それは…。」

瑞穂の言葉に、私は赤くなつて下を向いた。そしてぼそぼそと小さな声で、さつき高瀬君に言われた言葉を口にした。

「…一緒に遊びに行こうって、高瀬君に誘われた。」

「え、そうなの？良かったじゃん。じゃあその時に告白すればいいね。それで、いつ行こうって高瀬君言つてた？予定空けとかなきゃ。勿論瑞穂も行くよね？」

明日香がそう言つて瑞穂を見る。瑞穂は明日香に尋ねられて

「うん、そうだね。行こうか。」

と答えている。

そんな二人の会話を聞いた私は

「ち、違うの…！」

と言つて慌てて顔を上げた。

「違うって、何が？」

明日香と瑞穂が、不思議そうな顔で私を見る。

私は一瞬言い淀んだ。さっきの高瀬君の表情を思い出して、心臓がまた大きく鼓動し始めたから。でも明日香達に高瀬君に言われた事を黙っている訳にもいかないので、更に顔を赤くして

「そうじゃなくて…、二人で行こうって…。」

と言つた。

「えー！！！」

私の言葉に、再び二人が大きな声をあげた。でもそれはさっきの責める様なものとは違う、驚きと歡喜に満ちた声。

「それってデートだよ？！凄い！沙和、良かったじゃん！」

「高瀬君から言われたんでしょ？！それって高瀬君も、沙和を好きつて事だよ？！」

「そ…そうなのかな…？」

赤くなつて俯く私に

「絶対そうだよ！」

と嬉しそうに、二人が声を掛ける。

「それでいつ行くの？高瀬君、いつ行こうって言つてた？」

「いつって…。そういえば、言われてない。」

「え？じゃあ、早く高瀬君に聞かないと。沙和、高瀬君に携帯の番号聞いた？」

「…聞いてない。それに私も、家の番号、言っていない。」

「えー！どうするの？！それじゃ連絡取れないじゃん！」

再び責めるように明日香に言われて、私は動揺して二人を見た。

「どうしようっ…！」

「どうしようって…。とにかく、高瀬君の事追いかけて聞いて来なよ！早くしないと高瀬君帰っちゃっよ！」

「う、うん！分かった。」

瑞穂にそう急かされて、私は高瀬君を探そうと急いで走り出した。

## 着信

高校の合格祝いに、お父さんが白い携帯電話を買ってくれた。この中に、何人の電話番号が登録されるのかな。

卒業式から数日後、私は自分の部屋で携帯電話の着信履歴を見つめながら、はあっとため息を吐いた。ディスプレイに表示されるのは、何度見ても明日香と瑞穂の名前のみ。

この買って貰ったばかりの携帯電話には、六件の電話番号しか登録されていない。明日香と瑞穂と家族と家、その六件。この中に、今一番知りたい高瀬君の電話番号は登録されていないのだ。

高瀬君に遊びに誘われたあの卒業式の日、私は高瀬君の連絡先を聞こうと、急いで彼を探し回った。でも既に彼は帰ってしまったていたみたいで、何処を探しても見つかる事が出来なかった。だから私は高瀬君の連絡先を知らないし、高瀬君も私の連絡先を知らない。そんな状態で電話がかかってくるなんて絶対にあり得ないんだけど、何度も何度も着信履歴を見ては、その度にため息を吐く。

私は携帯電話をテーブルに置いて、近くにあったクッションを抱え込んだ。そしてもう一度ため息を吐いて、そこに顔を埋めた。

…高瀬君の電話番号、明日香に頼んで、田中君に聞いてもらおうかな。そうすれば連絡取れるし。

でも私から高瀬君に電話するの、なんとなく恥ずかしいかも…。いや、恥ずかしいというよりも、多分物凄く緊張する。



じゃあ逆に、田中君から高瀬君に私の携帯番号を伝えてもらうのはどうだろう…。でもそれだと『そっちからかけて』って言うてるみたいで、なんとなく図々しいかなあ…。

…やっぱり明日香に聞いてもらおう。それで私から高瀬君に電話しよう。間違いなく緊張するだろうけど、こんな風にモヤモヤ考えてるよりはずっといい。

それにこのまま考えてても、ただ不安が募るだけだ。高瀬君があの日連絡先を覚えてくれなかったのは、実は私をからかっただけだから…そんな風に思い始めてしまいそうだ。

私はクッションに埋めていた顔を上げて、テーブルに手を伸ばした。ちょうどその時、着信を知らせるメロディが携帯電話から鳴り出したので、私はビクツと肩を震わせ、それから携帯電話を手にとってディスプレイを確認した。

電話を掛けてきたのは、偶然にも明日香だった。そのタイミングの良さに嬉しくなりながら、通話ボタンをぼちつと押して

「もしもし、明日香？」

と大きな声で話し出すと

「うわっ、びっくりしたあ。沙和出るの、超早くない？」

と、明日香が驚いた様な声を出した。それがおかしくてクスクスと笑いながら

「私もちょうど、明日香に電話しようと思ってたところなんだ。」

と伝えると、明日香は

「何？どうしたの？」

と、自分の用件は言わずに私に尋ねてきた。

「あのね…、明日香にちょっとお願いがあるんだ。」

「え？何？」

「うん…。あのさ、田中君から高瀬君の電話番号、聞いてもらえないかな？」

「どうして?」

「どうしてって…。高瀬君に私から連絡してみようかなって、思ったから…。」

それを聞くと、明日香は急に黙り込んだ。その沈黙に、もしかしたら駄目ってことなんだろうかと不安になり、恐る恐る

「明日香…?」

と彼女の名前を呼ぶと、明日香は

「沙和、高瀬君からまだ連絡来ないの?」

と私に問いかけた。

「うん。だって…高瀬君、私の番号知らないし。だから私から電話してみようって。」

「……………しいな。」

「え?」

「ううん!何でもない。とにかく、もう少し高瀬君からの連絡、待ってみなよ。」

「え?だから高瀬君、私の番号知らないって…。待ってたって来る訳ないじゃん。」

「絶対大丈夫だから。」

「大丈夫って、何が大丈夫なの?」

彼女が何を言っているのか分からなくて、私は責め立てるように明日香に尋ねた。でも明日香はその質問に答えることはせず、代わりに

「あ、キャッチ入った。ごめん沙和、また電話するね。」

と言って、突然電話を切ってしまった。

「え、ちよっと明日香?」

慌てて彼女の名前を呼んだけれど、電話は既に切られていた。ツーツーという機械音だけが携帯電話から聞こえてくる。

結局、高瀬君の電話番号は聞けなかった。本当に、どうしたらいいんだろう…。

私ははあっとため息を吐くと、携帯電話をテーブルに置いた。

「沙和！ご飯よ。」

一階から、夕食が出来た事を告げるお母さんの声が聞こえた。

「はい。」

そうお母さんに返事をして、ちらつと携帯電話を見る。

「ご飯食べ終わったら、もう一度明日香に電話してみようかな。それで今度こそ高瀬君の電話番号を聞いてもらおう。」

私はノロノロと立ち上がり、部屋のドアを開けた。ちょうどその時、携帯電話の着信メロディが鳴った。

もしかして明日香かな？さっき中途半端に電話切られちゃったから、もう一度掛け直してくれたのかも…。

私はドアを開けっ放しにしたまま、テーブルの方に向かった。

そして携帯電話を手に取ると、ディスプレイに表示されているのは明日香の名前ではなくて、全然見た事がない携帯電話の番号だった。

誰だろう…。もしかしたら間違い電話かな？

一瞬電話に出る事を躊躇ったけれど、もし間違い電話だったら違っている事を教えてあげた方がいいかも…と思い、私はちよつとビクビクしながら通話ボタンを押した。

「…もしもし？」

「もしもし…。山口さん？」

電話の相手は、男の人だった。その人が私の名字を口にする。

その声に聞き覚えがあつて、私は心臓をどくんつと波打たせた。そして震える声で

「…はい。」

と返事をする、電話から

「あの、高瀬だけど…。」

という声が聞こえてきた。

「な…なんで私の携帯番号…？」

突然の事に心臓をドキドキさせながら尋ねると、高瀬君は

「昨日水野さんに偶然会って、それでその時教えてもらった。」  
と言った。

「水野って…明日香？」

「うん。」

私の疑問に、高瀬君が返事をする。でも明日香、さっき電話した時、そんな事言っていなかったのに…。

…そういえば『連絡待ってみなよ』とか『絶対大丈夫』とか明日香言ってた。あれってもしかしなくても、高瀬君に私の携帯番号を教えたからだっただ…！

「あのさ…。」

電話の向こうから、少し低いトーンの高瀬君の声が聞こえた。その声にドキドキしながら

「うん、何？」

と尋ねると、高瀬君は

「あのさ…、遊びに行く話だけ…。」

とちよつと言いずらそうに言った。

「う…うん。」

次に続く言葉が何なのか、ドキドキしながら相づちを打つと

「急だけど…、明日か明後日、暇？」

と、高瀬君が私に尋ねた。

「無理だったら、いいけど…。」

私は顔を赤くして、彼には見えないのにブンブンと数回首を振った。

「だ、大丈夫！明日でも明後日でも、いつでも暇だよ！」

私の少し上擦った声を聞いて、電話の向こうの高瀬君が小さく笑った。姿は見えないけれど、どんな表情をしているのか何となく分かる。

「じゃあ、明日でいい？」

暫しの間を空けて、高瀬君がそう尋ねた。私はさっきみたいに上

擦った声を出さぬ様なるべく冷静を装いながら、高瀬君の誘いに「うん。」と返事をした。

高瀬君の着信履歴。それがディスプレイに表示されている。言葉にならない程嬉しくて、何度も何度もそれを見返す。

明日になったら高瀬君に会えるんだ。どうしよう、凄く楽しみで落ち着かない…！

ふと視線を感じて、私は部屋のドアの方を見た。するとそこには意味深な顔をしたお兄ちゃんが立っていた。

「な、何?!」

私は驚いて大きな声を上げた。いつからそこにいたんだろ…。それを考えると恥ずかしくて、自然と顔が赤くなる。

お兄ちゃんは私の大きな声に動じる様子もなく

「飯。」

とたった一言私に告げた。

「あ、うん。」

そういえばさつきお母さんにそう言われたっけ…。私は慌てて立ち上がると、お兄ちゃんに付いて廊下を歩きだした。

「あのさあ。」

ふとお兄ちゃんが私の方に振り向いた。そしてニヤニヤした顔で、私を見る。

「さつきの電話、男?」

「だ、誰だっけいいでしょ!!」

やっぱり聞かれてたんだ!! 私は恥ずかしくなって、お兄ちゃんに向かって再び大きな声を出した。

「ぶっん。」

お兄ちゃんはそう言うとニヤニヤしたまま前を向いて、それから

階段を降り始めた。

何で聞かれちゃったんだろう。タイミング悪いよ！でも知られちゃったなら、いっそ協力してもらおうか…。

「あの…、お兄ちゃん。」

私は階段の中間地点にいるお兄ちゃんに声を掛けた。それに気付いて、お兄ちゃんが私を見る。

「あ、あのね、ご飯食べおわったら、一緒に服選んで欲しいの。」

「は？何で？」

「訳は後で話すから。だからお願い！」

「…めんどくせえな。」

お兄ちゃんはそう言つと、頭をボリボリと掻きながらキッチンに向かった。その後を、私も急いで追いかけた。

## 待ち合わせ

昨夜は中々眠れなかった。なのに今朝は、いつもより早く目が覚めた。窓辺に向かいカーテンを開けると、目の前にほとんど雲のない青空が広がっている。

こんなに良い天気なのに、心の中はざわざわして落ち着かない。期待と不安が入り交じった、複雑な気持ち。

とりあえず、シャワーでも浴びて落ち着こうかな……。私はパジャマの上に厚手のカーディガンを羽織ると、タオルを持ってバスルームに向かった。

その日お父さんはいつもの様に、朝早くから仕事に向かった。お兄ちゃんも何か用事があるらしく、朝食を食べるとすぐに家から出て行った。

私はお母さんと二人でちょっと早い昼食を取り、そわそわしながら自分の部屋に向かった。そして昨日お兄ちゃんと一緒に選んだ花柄のワンピースに着替えて、鏡の前で自分の姿を何度もチェックする。

似合ってるかな？変じゃないかな？高瀬君、この格好“可愛い”って思ってくれるかな？

高瀬君との待ち合わせは午後一時。その時間までにはまだ余裕がある。でもどうしても落ち着かなくて、クローゼットから春物の白いコートを出し、私は一階へと向かった。

「お母さん、ちょっと遊びに行ってくるね。」

リビングでテレビを見ているお母さんに声を掛けて、コートを羽織り玄関へと向かう。そして靴を履こうとしゃがみ込むと

「明日香ちゃん達と出かけるの？」

と、お母さんがリビングから顔を覗かせて私に尋ねた。

「え、えっと…明日香達とは一緒じゃないけど…、学校の友達。」

誰と遊ぶのか言うのが躊躇われて、私はしどろもどろにお母さんの問いに答えた。だって男子と二人でなんて言ったら、お母さんに何て思われるか分からないし、しかもそれが好きな人とだなんて、そんな事は恥ずかしくて絶対に言えない。

お母さんは私の答えを聞くと、私の姿を上から下までじっくりと見つめた。そして何を納得したのか

「ふうん。」

と小さな声で言っつて、ちよつと悪戯っぽい笑みを浮かべた。

もしかして、ばれた？確かに今の私の格好は、ただ友達と遊ぶつて感じのものじゃないけど…。

これ以上何か言われる前に家から出よう！私は顔を赤くして

「い、行つてきます！」

と大きな声でお母さんに告げた。その声を聞くとお母さんは

「気を付けて、楽しんでいらつしやい。」

と言っつて、微笑みながら私に手を振つた。

高瀬君との約束の時間まで、あと約三十分。こんなに早く行つても絶対高瀬君は来ていないだろう。けれど落ち着かなくて、ゆつくりとなんてしていられなくて、私は足早に待ち合わせ場所である学校の近くの公園に向かつた。

昼時の所為か、公園はわりと静かだった。ほんの数人の子供の声だけが、公園の中から聞こえてくる。

「お兄ちゃん、もう一回！」



そんな子供の声を聞きながら、私は公園に足を踏み入れた。

広場では兄弟らしき二人の子供が、ゴムボールを使ってキャッチボールをしていた。そしてその近くに、子供達と一緒に遊ぶ、私と同じ位の年の男子の姿。

…あれ？あの人つてもしかして…？私はその姿に胸を高鳴らせながら、彼らに向かって足を進めた。

そこにいるのは、間違いなく高瀬君だった。高瀬君が、凄く楽しそうな笑顔で子供達と遊んでいる。

そんな彼の笑顔を見ていたくて、私は高瀬君に声を掛けることはせず、公園の隅っこでその姿をじっと見つめた。

「じゃあ投げるぞ。」

小学生位の男の子にそう言って、高瀬君がゆっくりとボールを投げる。男の子はボールの軌道をじっと目で追い、必死に手を伸ばしてそれをキャッチすると

「やった！お兄ちゃん！取れたよ！！！」

と、嬉しそうに高瀬君に駆け寄った。

「おお、やるじゃん！」

嬉しそうにはしゃぐ男の子の頭を、高瀬君も嬉しそうに笑いながらわしわしと撫でる。

「ボクにもー！ボクにも投げて。」

その傍らで、さつきボールを取った子よりも少し小さい保育園児位の男の子が、高瀬君にそうせがむ。

「おまえには無理だよ。」

ボールを取った男の子がその子にそう言ったけれど、高瀬君は

「じゃあ、一回だけな。」

と言って、さつきよりも緩やかにその子にボールを投げた。

小さい男の子は、さつきの男の子がしていた様に必死に手を伸ばしてボールを取ろうとしたけれど、ボールはその子の頭の上を少しだけ越えて地面へと落ちた。ひたすらボールを見つめて上を向きす

ぎた所為か、ボールが落ちるのと同時に男の子がぼてんつと尻餅をつく。

「大丈夫か？」

それを見ていた高瀬君が直ぐに駆け寄り、その子を抱き上げる。するとその子は

「うん。痛くないよ。」

と笑い、それを見た高瀬君も

「そうか。お前強いな。」

と微笑んだ。

「でも、ボールいつちやった。」

高瀬君に抱き抱えられながら、その子が振り向いてボールを探してキョロキョロとする。

「ボク取ってくる。」

それを聞いた大きい方の男の子が、暫くキョロキョロと辺りを見回してから、私の方に駆け寄って来た。知らないうちに、ボールは私の目の前まで転がって来ていたのだ。

「：山口さん。」

走っている男の子を見ていた高瀬君が、その先にいる私に気付く。私は心臓をドキドキさせながら、彼に向かって小さく手を振ると、ボールを拾って男の子に渡した。

「あのひとがお兄ちゃんが待ってたひと？」

地面に下ろされた小さい方の男の子が、そう言って高瀬君を見上げている。

「もしかしてデート？」

それを聞いた大きい方の男の子が、悪戯っぽく笑いながら高瀬君と私を交互に見る。

高瀬君はその質問には答えず、代わりに

「それより、もういい加減帰らないと、お母さんに怒られるだろ？」と二人に告げた。するとそれを聞いた二人は

「あー、忘れてた！」

と大きな声を出し

「じゃあお兄ちゃんまたね！」

と手を振って、近くの家へと走って行った。

「知ってる子なの？」

私の方にゆつくりと歩いてくる高瀬君に向かって、私はそんな事を問いかけた。すると高瀬は

「いや…ここに来たらいたから…」

と、私の顔を真っ直ぐ見ながらその問いに答えた。

「子供、好きなんだね。」

「…好きって訳じゃないけど。妹とか親戚の子供とたまに遊んだりするから、相手するのに慣れてるだけで…」

「妹がいるんだ。今いくつなの？」

「今年中一。」

「じゃあ高瀬君より三つ年下なんだね。私は二つ年上のお兄ちゃんがいるんだ。」

新しく高瀬君の事を知れて嬉しくて、私は聞かれてもいないのに自分の事を話した。

「お兄ちゃんと妹って、うちと同じだね。」

そんな偶然さえも幸せに思えてくる。

「でも俺、姉ちゃんもいるから。今大学生の。」

「そうなんだ…。じゃあうちとは違うね。」

ちよつと残念な気持ちになりながら、私は高瀬君の顔を見上げた。でも女の子二人に挟まれて、高瀬君って家ではどんな感じなのかな？ちよつと見てみたい。

「じゃあ…、そろそろ行く？」

高瀬君はそう言つと、乗って来たのであろう自転車、公園の隅の人の目に付かない場所に移動した。その後をただひたすら追いかけていると、高瀬君はくるっと振り返って

「ちよつと、付き合っしてほしい場所があるんだけど…」

と、申し訳なさをうに私を見た。

## プレゼント

「何処、行くの？」

高瀬君の少し後ろを歩きながら、私は彼に問いかけた。すると高瀬君は立ち止まって

「妹の誕生日プレゼント買うの、付き合っただけ欲しいんだけど…。」と、私を見た。

そうなんだ、もうすぐ妹さん誕生日なんだ。ちゃんとプレゼントを買ってあげるなんて、高瀬君っていいお兄ちゃんだなあ。

「妹さんって何が好きなの？」

「え…よく分かんないけど…、そういうば熊みたいなぬいぐるみ持ってたかも…。」

熊かあ…。熊ってどんな熊だろう。熊のキャラクターなんていっぱいあって分からない。

「じゃあとりあえず、駅前の雑貨屋さんに行ってみる？」

私は高瀬君の隣に並び、そう言って歩き出した。すると

「ごめん、付き合わせちゃって…。」

と申し訳なさそうに高瀬君が言うので、私は大きく首を横に振り

「謝まることなんてないよ！私、雑貨屋さん好きだもんっ。」

と、満面の笑みで高瀬君を見た。

私、凄くはしゃいでる。

高瀬君にバレちゃうかな？

でもやめる事は出来なかった。高瀬君と一緒に居られる事が、嬉

しくて嬉しくて。

駅前の雑貨屋さんは、春休みの所為か大勢の女子で賑わっていた。ちらほらと男子の姿も見受けられるけど、彼らはみんな彼女に付き合って来たという感じで、商品を物色している女子の少し後ろに立っている。

きゃあきゃあと楽しそうな声でいっぱいのお店に入る事を、高瀬君は暫く渋っていた。確かに中は女子だらけだし、凄く混んでいる。でも春休みだし、きつと何処もこんな感じだよと高瀬君を説き伏せて、私達は店内へと入った。

大勢の人の所為で前に進むのも大変だったけれど、それでもなんとか人混みを掻き分け高瀬君の妹さんが持っているというキャラクターグッズの売り場までたどり着くと

「わあ全部可愛い。色々あって迷っちゃうね。」  
と、自分の物を買うわけではないのに目をキラキラさせながら、私は商品を一つ一つ手に取って眺めた。

高瀬君は私の隣で、無言のまま商品をじっと見ている。何を買うか悩んでいるのだろうか？ そうだよな、同じ女子でも悩むのに、男子が女子にプレゼントを買うなんて、何を選んだらいいのかもの凄く悩むかもしれない。

「何かいいのあった？」

私は高瀬君の顔を見上げて、彼にそう尋ねた。でも高瀬君は

「どれがいいのか分からない。」

と言って小さくため息を吐き、商品から目を離して

「どれがいいの？」

と私に尋ねてきた。

「え？」

確かに私は同じ女子だけど、高瀬君の妹さんの事は全然知らない。そんな私に聞かれても、どれがいいかなんて全く分からない。

それでも高瀬君は私の顔をじつと見て、私の意見を求めている。

…何をプレゼントにするのか、本当に私が選んじゃっていいのかなあ？

「えっと、じゃあ…。高瀬君の妹さん、今年中学なんだよね？それなら、メモ帳とかペンとか、普段使いそうな物なんてどうかな？あとのキーホルダー、バッグに付いたら可愛いかも。」

高瀬君は黙って私の話を聞き、それから言われるままに商品を手にとった。そしてそれらを持って、何の迷いも無いといった感じでレジへと向かった。

「え、本当にそれでいいの？」

選んだ手前不安になり、慌てて高瀬君を追いかけると、彼は

「いいと思うけど。」

と言って、私の方に振り返った。

「でも全部私が選んだ物だよ？私、高瀬君の妹さんの事全然知らないのに…。」

「でも俺も分かんないし。」

…本当にいいのかな？私は不安になって、高瀬君が持っている商品を見つめた。本当にこれでいいのかな？高瀬君の妹さん、これを貰って喜んでくれるかな…。

「大丈夫だよ。」

不安そうな私を見て、高瀬君が声を掛けた。

「山口さんが選んでくれたので、大丈夫だから。」

「…そう？」

高瀬君に『大丈夫』と言われて少しほっとして、私ははにかみながら

「喜んでくれるといいなあ…。」

と呟いた。そんな私を見て、高瀬君が優しく微笑んだ。

レジの前も大勢の人で込み合っていた。そんな女の子だらけの列に並ぶなんて嫌だと高瀬君が呟くので、私も彼に付き合っただけの列に並ぶ事にした。

あまりの混み様に、高瀬君はちよつと不機嫌そうだ。でも私は彼の隣に並んでいるという事が嬉しくて、思わずニヤニヤしてしまった。

少し前に、私達と同じ様に列に並ぶ男女が立っている。きっと二人は恋人なんだろう。私達もこんな風に並んで立っていたら、恋人同士に見えるのかな…？

無言の高瀬君に時折話しかけながらも、私はキョロキョロと辺りを伺った。そしてもうすぐ私達の番という所で、目の端に何やらキラキラしたものが映って、視線がそれに釘付けになった。

列から逸れてレジの脇にあるそれに向かい、一つ一つをじつと見つめる。そこにあるのは、色々な種類の携帯ストラップ。キャラクターが付いたものやハートや星のチャームが付いたものや、可愛い物が沢山ある。私はその内の一本の、ピンクのハートのチャームが付いたキラキラと光るストラップを手に取った。

私の携帯電話には、まだストラップが付いていない。これ付けたら、きつと可愛いだろうな。

「…どうしたの？」

レジの順番が回ってきた高瀬君が、私の手元を覗き込んだ。

「これ、可愛いなと思って。」

そう言っただけで私が高瀬君にも見える様にストラップをつまみ上げると、高瀬君は

「ちよつと貸して。」

と私の手からストラップを奪い、そのままそれを店員さんに渡した。…それも妹さんのプレゼントにするのかな？いいなあ。私もあれ欲しかったな。



高瀬君はそのストラップと一緒に、さっき選んだ商品をレジにいるお姉さんに渡すと、さっさと会計を済ませ出口に向かって歩き出した。その後を、私が慌てて追いかける。

「疲れた…。」

お店から出ると、高瀬君はそう呟いて大きく息を吐いた。

「凄く混んでたもんね。」

ようやく彼に追い付いて、隣で私がそう言うと

「喉乾かない？」

と高瀬君が私を見るので

「そうだね。ちよつと乾いたかも…。」

と、彼の意見に同意した。

「じゃあ、何か飲み行く？」

「うん。そうしようか。」

相当喉が乾いているのか、高瀬君はスタスタと早足で歩き出した。今まで分からなかったけれど、高瀬君ってこんなに歩くの速いんだ。スピードもそうなのかもしれないけれど、歩幅だって私と全然違う。それに今気付いたって事は、彼がさっきまで私に合わせてゆつくりと歩いてくれてたって事だ。

「あ、ごめん。」

少し遅れて歩く私に気付いて、高瀬君が足を止める。

「歩くの、速かった？」

本当に私の事、気にしてくれてるんだ。その優しさが凄く嬉しい。

「ううん。大丈夫。」

私は首を振り、笑顔で高瀬君の横に並んだ。

「何処か、行きたい所ある？」

ファーストフード店でオレンジジュースを飲んでいる私に、正面に座っている高瀬君が声を掛ける。

「ううん、何処でもいいよ。」

そう言つて、私はにやけた顔で高瀬君をちらつと見た。本当に何処でもよかつた。寧ろ、このままここに居てもいいと思つていた。だつて、高瀬君と一緒にだから。高瀬君といられるなら何処だつていい。

「高瀬君は？何処か行きたい所ないの？」

でもそれじゃあ彼がつまらないかもしれないと思い、私は上目遣いで高瀬君を見た。

「高瀬君が行きたい所でいいよ。」

「でもそれじゃあ…。さつきは俺に付き合つてもらつたんだし…。」

「ううん、私は本当に何処でもいいの。だから、高瀬君が行きたい所に行こうよ。」

私の言葉を聞くと、高瀬君は悩む様に頬杖をついて、視線を窓の外に向けた。

店の中から見える春休みの街は、色々な人で賑わっている。さつき雑貨屋さんにはいた様な楽しそうに笑う女子や、仲良く歩く恋人であろう男女。それから、部活に行つて来たのか制服を着ている子とか、子供を連れて忙しそうにしているお母さんとか、いつもと同じ様に働いているサラリーマンっぽい人とか…。

高瀬君の視線に釣られて窓の外を見ていた私の耳に

「学校、行かない？」

という高瀬君の声が聞こえて、私は視線を彼に戻した。

「学校つて…、中学？」

「うん。…引つ越す前に、もう一度見たいと思つて。」

そうだった…。高瀬君、もうすぐ引つ越すんだつた…。ここから離れた所にいつちやうんだつた…。

その前に、中学に行きたいと思つてるんだ。いっぱい思い出がある、もう通う事がない中学に…。

「うん。行こう！」

大きな声で応えた私を、高瀬君がじつと見つめる。

「いいの？中学で…。」

「うん、勿論。私も行きたいし。」

そう言うと私はジュースを一気に飲み干して、高瀬君と同時に椅子から立ち上がった。

## 優しさ

春休みの学校は静まり返っているんだと、私は思っていた。しかし意外にも、大勢の人の声が聞こえて来る。

高瀬君が何の迷いもなく声のする方へ足を進め、その後を私が追いかける。向かった先は校庭。そこには大勢の野球部員がいて、みんな懸命に練習に励んでいた。

「春休みなのに、こんな時間も練習してるんだね。」

「…うん。休みが終わったら、結構すぐに試合が始まるから…。」  
「そっか。」

そういえば去年、野球部の試合を見に行った。あれは確か、修学旅行が終わってから割とすぐの出来事だった気がする。

三年生にとっては最後となる試合。練習に熱が入るのも不思議じゃない。きつと去年の今頃、高瀬君もそうしていた様に。

真剣な眼差しで練習を見つめる高瀬君の隣に立って、私も校庭に視線を向けた。

春の日差しは暖かく、穏やかに私達を包んでいた。でも時間が経つに連れ、まるで夜が近づいている事を知らせるかの様に、風は冷たくなってくる。その冷たい風に身震いし、私は小さくくしゃみをした。それに気が付いて、高瀬君が私を見る。

「寒い?」

「ううん、大丈夫。」

本当はちよつと寒くなって思っていた。昼間は暖かったから割りりと薄着でも平気だったけど、こんなに風が冷たくなるなら、もう少し暖かい格好をしてくれば良かったな…。

高瀬君は暫く無言で私を見ていたけれど、ふと校舎の方に目を向け  
「中、入ろうか。」

とポツリと呟いた。

「中って…、学校の中?」

私の質問に、彼がこくりと頷く。

「でも、入っていいの？」

「ちよつと待つてて。」

そう言うが高瀬君は私をその場に残し、校庭の野球部員がいる方向に走って行った。そして隅にいる顧問の先生と何やら話をして、こちらに戻って来た。

「入ってもいいって。」

私の目の前に来ると、高瀬君は私を促す様に校舎に視線を向けてそう言った。

「本当に？入っていいの？」

「うん。先生に許可貰ったから。」

校舎へと向かう彼の横に並んで歩きながら、私はドキドキと胸を高鳴らせた。嬉しくて仕方がなかった。だってもう二度と、高瀬君と一緒に学校に入る事は無いと思っていたから。でも今私達は、一緒に学校の中に入ろうとしている。しかも、二人だけで。

「先生に何て言って許可貰ったの？」

ふと疑問に思い、私はそう言って高瀬君の顔を見上げた。すると彼はちよつと悪戯っぽく笑って

「忘れ物したって言った。」

と私を見た。

「本当に忘れ物したの？」

「そんなの、嘘に決まってるじゃん。」

「えー、いいの？嘘なんて吐いて。」

口ではそう言ったけど、心の中では彼の意外な一面を見た事を嬉しく思っていた。本当は元々そういう悪戯な面を持っていたのかもしれないけれど、それを私の前で見せるのは初めてだ。それに彼が吐いた嘘は、きつと私の事を思ってたってくれた優しい嘘。私が寒そうにしていたから、先生に嘘を吐いて校舎の中に入れるようにしてくれたんだ。

「ありがとう。」

私は笑顔で高瀬君を見つめて、感謝の言葉を告げた。でも高瀬君は「何が？」

と、何に対してお礼を言われたのか分からないという表情をした。

「え、だから…、学校の中に入れるように先生に言ってくれて…」

「ああ、別に…。俺も入りたかったし。」

本当に、優しい人だな…。彼の優しさはいつだって“誰かの為にやってあげる”というものでは無くて、きっと彼自身がそうしたいと思っただけの事。

高瀬君に出会えて良かった。高瀬君と同じ年に生まれて、この学校に来る事が出来た。そして初めて好きになった人が彼で、本当に良かった。

そんな思いを抱きながら、私は高瀬君の隣に並んで校舎へと足を踏み入れた。

学校の中は人の気配が無くて、しん…と静まり返っていた。

高瀬君と私の、二人だけしかない校舎。何か悪い事をしている様で、でも凄く嬉しくて、胸がドキドキと大きく鼓動していた。

毎日の様に歩いた廊下。明日香と瑞穂と笑い合ったり、高瀬君と偶然会って幸せな気持ちになったり、時には悲しい思いもしたそんな場所。ほんの数日前に通ったのに、何だか懐かしく思えるのはどうしてだろう。

高瀬君は私にスピードを合わせる様にゆっくりと足を進めて、彼が一年間過ごした三年三組の教室へと入った。そして窓際にある机の脇で足を止めると、そこに凭れて教室を見渡した。

「何で入らないの？」

一通り辺りを見回すと、彼は教室の入り口に立ったままの私に声

を掛けた。

「え…だって、他のクラスだし、入りづらくて…。」

「誰もいないんだから、入ってくればいいじゃん。」

「うん…。そうだね。」

自分が過ごした場所と作りは変わらないのに、何だか違う空気が流れている様な気がして、滅多に入った事が無かった教室。誰もいなくてもその空気は同じに思えて、私は少し緊張しながら教室に足を踏み入れ、高瀬君が立つ場所へと向かった。

「ここ、高瀬君が座ってた席だよな。」

「うん。」

「いいな、窓際の席。私なんて丁度教室の真ん中辺りの席だったから、外の景色なんて全然見れなかったもん。」

「そうなんだ。」

「そうだよ。私の席見せてあげるから、私のクラス行こ。」

そう言っただけ私は三組の教室から出て、自分が過ごした教室の自分の席に向かった。そして高瀬君が付いて来たのを確認すると

「私の席、ここだったの。ね？外なんて全然見えないでしょ？」  
と彼に告げた。

「本当だ。」

「でしょ？でも瑞穂は窓際の席だったんだよ。あそこの、後ろから二番目の。で、明日香の席はあそこ。丁度私と瑞穂の真ん中位…。」  
そこまで言っただけ、私はピタリと話すのを止めた。

今までずっとここで過ごしてきた筈なのに、誰もいないこの場所は、私が見た事のない知らない空間の様に思えた。教室のあちこちで笑いながら話す女子も、ふざけ合っている男子も、ここにはいない。今まで当たり前前の様にあつたそんな風景を見る事は、もうないんだ…。そう思ったら、何だか急に寂しくなった。

「ねえ、せつかくだから、学校の中歩かない？」

そんな私に気付いたのか、高瀬君が笑顔でそう提案する。

「そうだね。そうしよっか。」

私は笑顔を作つて彼の提案に賛成し、二人で学校の中を歩き始めた。

何処かで先生に会つて怒られたら嫌だねと辺りをキョロキョロと伺いながら、学校の中を歩く。滅多に行く事が無くなつていた一年生の教室や二年生の教室。それから外に出てプールとか、体育館に繋がる渡り廊下とか。音楽室や理科室などの教室は鍵が掛かつていて入れなかつたけれど、でも窓から中を覗いては、それぞれの場所の思い出を言い合つた。

思つていた以上に広がつた学校の中を歩いているうちに、時間はどんどん過ぎていき、日も徐々に陰つてきた。

「そろそろ出ないとやばいかも…。」

高瀬君にそう言われ、私は

「そつだよね…。」

と答えたけれど、どうしても最後に行きたい場所があつて、それを高瀬君に伝えた。そこは、放課後に野球部の練習を見る為に行つていた場所。少しの間だつたけど明日香達と一緒に通い、夏休みには高瀬君と偶然会つた、思い出がいっぱいある図書室だつた。

「鍵掛かつてる。」

図書室のドアに手を掛けて、高瀬君が私に告げる。

「やっぱり、そつだよね…。」

中に入れない事を残念に思いながら、私はそう言つて俯いた。

「…先生に言つて、開けてもらつて？」

「ううん、それはいいよ。早く学校から出ないと先生も困るだろうし、それに多分駄目って言われると思つし…。」

高瀬君の言葉に首を振つて答えて、私は再び図書室のドアに視線を向けた。

もう一度入りたかつたな。中にある本にはあまり興味がないけど、でも、あの窓際の席から、高瀬君と一緒に校庭を眺めたかつたな…。

「何か…寂しいね…。」

そつ呟いた瞬間、私の目に涙が浮かんだ。そしてその量はほとんど



ん増えていき、間もなく溢れ出て床に落ちた。

泣くつもりなんて全然無かった。でも勝手に涙が流れた。どうしよう…こんな所で泣いてたら、きつと高瀬君を困らせちゃう…。

「ごめんね…。直ぐに泣き止むから…。」

私は涙を拭いながら、高瀬君に謝った。

高瀬君は黙って私を見ていた。きつと私が泣き止むのを待っててくれてるんだ。でも一度溢れてしまった涙は、なかなか止まってくれない。どうしたら、いいんだろう…。

「…また、来ればいいじゃん。」

呟く様な言葉が聞こえて、私は泣きながら顔を上げた。すると高瀬君は

「寂しいって思ったら、また来ればいいんだよ。」  
と微笑み、それから私の頭にそつと手を乗せた。

高瀬君の手は、とても温かかった。その手が私の頭を優しく撫でる。

その行為は、私が泣いた時にお兄ちゃんがしてくれるのと同じものだった。でもお兄ちゃんのそれとは何か違った。

さっきまで寂しさでいっぱいだった私の心に、優しいぬくもりが広がった。そしてだんだんと気持ちが穏やかになってきて、溢れていた涙も不思議と止まった。

「大丈夫？」

高瀬君がそう言って、私の顔を優しく見つめる。

「うん…。ごめんね、泣いちゃって…。でももう大丈夫。」

「じゃあ、そろそろ行くこうか。」

そう言つと高瀬君は私の頭から手を離し、代わりに私の手にそつと触れた。

## ぬくもり

野球部の練習は終わっていて、部員達が道具の片付けや校庭の整備を始めていた。校舎から出ると、高瀬君は

「ちよつと待つてて。」

と私をその場に残し、顧問の先生にお礼を言う為走つて行つた。

もうすぐ引越してしまう高瀬君にとっては、来たくても中々来れないであろう中学。お世話になつた先生とも暫く会えない所為か彼らの話は結構長くて、私は高瀬君を待ちながらもう一度校舎に目を移して今まであつた事を思い出していた。

もう来る事もないだろうと思つていた学校で、最後に最高の思い出が出来た。

通つていた時には出来なかつた、高瀬君と二人で校内を歩くという経験。それは心の中にずっと残つて私を嬉しい気持ちにさせてくれるだろうけど、いつか色褪せて寂しく思つてしまふかもしれない。そしたらまたここに来よう。そして嬉しかった気持ちを思い出そう。きつとそれは、これから高瀬君と離ればなれになつてしまふ私の力になつてくれるから。

「ごめん、待たせて。」

背後から声を掛けられ、私はそちらに目を向けた。

「話、終わったの?」

いつの間にか私の後ろに立っていた高瀬君にそう尋ねると、彼はこくと頷いて

「そろそろ…帰ろうか。」

と私に告げた。

昼間私達を暖かく照らしていた太陽はもう沈みかけていて、青かつた空は赤く染まつている。時計を見なくても今が何時位なのかなんとなく分かるし、もうそろそろ帰らないといけないという事も分かつている。でももつと高瀬君と一緒に居たくて『まだ帰りたくない

い』と言いつけかけたけれど、さつき私が泣いた事で高瀬君を困らせたから、これ以上彼を困らせる事は出来ないと思ひ、私は寂しさを無理矢理押し殺して高瀬君の言葉に頷いた。

切ない気持ちを抱きながらも高瀬君の隣に並んで歩き出そうとした時、後ろから

「先輩！」

という男子の声が聞こえて振り向いた。声の主は一人の野球部員だった。彼はこちらに向かつて走つて来ると私達の前で立ち止まり、はあはあと肩で息をしながらも強い眼差しで高瀬君を見つめた。

「あの…先輩、俺も付属行きます。だから待つて下さい。」

彼の言葉に、高瀬君が笑顔になった。そして

「頑張れよ。」

と応援の言葉を告げた。

二人の嬉しそうな表情を見て、私はそんな彼らがちよつと羨ましくなつた。私にも、あんな笑顔を向けてくれたらいいのにな…つて高瀬君の言葉を聞くと、その男子は高瀬君に向かつて大きく頭を下げて、大勢の野球部員が待つ校庭の隅へと走つて行つた。同じ高校に行くと言つただけに、全力で走つて来たんだ…。本当に高瀬君の事が好きなんだな。

「高瀬君つて、人気あるんだね。」

去つていく男子の背中を見つめながら私がそう言つと、高瀬君は「別に…。そんな事ないよ。」とちよつと素つ気なく答えた。

「あるよ。だつて今の子、付属行くつて言つてたもん。」

「ただ付属で、野球したいだけじゃん…？」

「違つよ。きつと高瀬君と一緒に野球がやりたいんだよ。」

きつとあの彼は、これからいづばい頑張るんだろうな。私は高瀬君と同じ高校に行く事を諦めてしまつたけれど、彼は絶対に諦めない様に思う。一生懸命勉強して、親や友達を説得して。そして来年

の今頃にはきつと、高瀬君と同じ様に、付属入学を決めているんだろうな。

「帰ろう。」

じつと校庭を見つめる私を促す様に、高瀬君が声を掛けた。私はそれに従って歩きだしたけれど、まだ帰りたくないと思つてゐる所為か、自然と足が遅くなつた。

「どうしたの？ 疲れた？」

少し遅れて歩く私に気付いて、高瀬君が立ち止まる。

「ううん… 疲れた訳じゃ、ないんだけど…。」

もつと一緒にいたいから。

たつたそれだけの言葉を口にする事が出来なくて、私は俯きながら高瀬君に向かつて足を進めた。そんな私を、高瀬君はどんな気持ちで見ているのだろう。

疲れるつて思われているのならまだいいかもしれない。でもこんな風に俯いていたら、まるで私が無機嫌な様に思われてしまうんじゃないだろうか…。今日高瀬君といられて凄く嬉しかったのに、最後に彼を誤解させてしまうなんて絶対に嫌だ。

そう思つて、私は顔を上げて笑顔を作ろうとした。でもその前に高瀬君が私の手に再び触れたので、私は顔を上げる事が出来なくなつてしまつた。

私の手を引く様に、高瀬君がゆっくりと足を進める。私はされるがままに、高瀬君の後ろを歩く。

高瀬君の手は温かかつた。さつきもそう思つたけれど、それ以上に温かく感じた。

学校で手に触れたのは、図書室から校舎の外に出るまでのほんの少しの間で、今みたいに長く繋がれてゐた訳じゃない。だからなのか、さつきは安心感を覚えたその手が、今は凄く緊張するものに思える。

高瀬君の手を、私は握り返す事が出来なかつた。心の中は緊張感と恥ずかしさでいっぱいだった。でもその手を離してほしくはな

った。　　ずっと繋いでいてほしい。そう思った。

もうすぐ、高瀬君と待ち合わせた公園に着いてしまう。そしたらきつとこの手は離れてしまいうだろう。

お願いだから、まだ着かないで。高瀬君ともっと長く繋がっていたいから…。

夕方の公園に人の気配はなかった。繋がっていた手が離された事に便乗するかの様に静けさが襲ってきて、私は心臓が縮む様な寂しさを覚えた。

…もう『サヨナラ』を言わなきゃいけないんだ。

高瀬君は私の手を離すと、じっと私を見つめた。それから持っていた袋に手を入れて、おもむろに一つの小さな袋を取り出した。

「これ…。今日付き合ってくれたお礼。」

高瀬君が差し出したそれは、妹さんのプレゼントを買ったために入った雑貨屋さんの物だった。

「貰っても、いいの？」

私の問いかけに、高瀬君が無言で頷く。私はそれを手にすると

「開けていい？」

と言つて彼の顔を見上げた。

本当に貰っていいのかな…と思った。お礼なんて、私には貰う資格はないんじゃないかとも思った。だって今日高瀬君といられて嬉しかったのは、私の方だから。でも高瀬君が私の為に何かを買ってくれた事が凄く嬉しくて、私は気持ちを舞い上がらせながら、高瀬君から受け取った小さな袋を開いた。

袋の中身は携帯ストラップだった。雑貨屋さんで私が欲しがっていた、ハートのチャームが付いた携帯ストラップ。

「本当にいいの？」

妹さんにあげるんだと思っていた物が私の手元に来て、私は驚きと嬉しさを隠せない顔で高瀬君を見上げた。

「…元々山口さんに渡そうと思って買った物だし。」

高瀬君がそう言って頷く。

「ありがとう…！」

何だか泣きそうな気持ちになって、私は手の中にあるストラップに視線を落とした。

高瀬君に貰った物は、これで二つ目だ。受験の前に貰ったお守りと、この携帯ストラップ。どちらも私が欲しかった物で、そんな理由もあるからなのか、私の大切な宝物となる。ううん、違う。高瀬君から貰った物なら、きつとどんな物でも宝物になるんだ。

「付けて、いい？」

高瀬君の了承を得ると、私はバッグから携帯電話を取り出し、苦戦しながらストラップを取り付けた。ピンク色のそれは、白い携帯電話の脇でキラキラと輝いて、思っていた通り可愛くてとても綺麗で…。

「ありがとう…！大切にすれね！」

満面の笑みで高瀬君にお礼を言っていると、高瀬君も嬉しそうな笑顔を私に向けた。

## ぬくもり（後書き）

『恋の基準値』をここまで読んで頂き、本当にありがとうございました！  
す！！次回最終話となります。

## 約束 最終話

暫くストラップを幸せな気持ちで見っていた私は、ふとある事に気が付いた。

そういえば私、高瀬君のメールアドレス知らない。携帯番号は知っているけれどそれだけじゃ寂しいから、出来たらアドレスも教えてほしい。

「あの…ね高瀬君、メールアドレス教えてもらってもいい？」

断られないかとドキドキしながら、私は高瀬君の顔を見上げた。

「えっと…ほら、みんなで遊ぼうって話になった時とか、メールアドレス知ってた方が、連絡取りやすいし。」

私の言葉を聞くと、高瀬君はポケットから黒い携帯電話を取り出し、そして

「赤外線でもいい？」

と私を見た。

「赤外線……。」

…どうやったっけ？

前にそれで明日香や瑞穂とアドレスを交換したけれど、どうやったのか覚えていない。まだ機能を把握しきれていない私は、慌ててボタンをカチャカチャといじり、その機能が何処にあるのか探し始めた。でも中々それは見つからない。どうしよう…。せっかく高瀬君がアドレスを教えてくれようとしているのに…。

「…貸して。」

そんな私を見るに見兼ねたのか、高瀬君が私に向かって手を差し出した。

「う…うん。」

言われるままに携帯電話を渡すと、彼は素早くボタンを操作して、携帯電話を私に戻した。

ディスプレイには、彼の名前が表示されていた。『高瀬 祥太』



というフルネームで。それを見た途端、何だか心がくすぐつたくなつて、思わず顔がにやけてしまった。

私の携帯に登録されている中で、フルネームで入っている人は今までいなかった。お兄ちゃんは何論『お兄ちゃん』だし、明日香や瑞穂はアドレスを貰った時から、下の名前や絵文字で登録されていた。勿論私も名前と絵文字。高瀬君は、フルネームで登録しているんだ。男子つてみんなそうなのかな？それとも高瀬君が真面目なのかな？

「ありがとう。」

私はにやけた顔のまま高瀬君を見て、そして

「メール、してもいい？」  
と尋ねた。

「…いいけど。」

嬉しくて、顔が更ににやけた。でもそれに気付かれるのは恥ずかしくて、私は慌てて下を向いた。

「…もう一つ、聞いてもいいかな？ちょっと緊張するけど、どうしても聞いておきたい。」

それは別に、聞かなくてもいい事なのかもしれない。聞かなくても、私が行動に移せばいいだけの事だから。でも私がそうしたいと思ってる事を、高瀬君に知っておいてほしかった。そして、彼に『いいよ』と言っただけでよかった。

アドレスを聞くよりも何倍も緊張して、顔が引きつりそうになった。もし断られたらどうしよう…そんな不安もあったけど、それでもどうしても聞いておきたくて、私は勇気を出して高瀬君を見た。  
「あのね、高校に入ったら…、付属まで遊びに行ってもいい…？会いたくなったら、会いに行ってもいい？」

高瀬君の目が、驚いた様に見開かれた。でも次の瞬間それは困った様なものになり、そして考え込む様に左手を耳の後ろに当てて、私から視線を逸らした。

駄目、なのかな……。

心の中に悲しみが広がった。

私が言った言葉は、彼にとっては迷惑だったのかもしれない。彼を困らせてしまう、そんなものだったのかも……。

でもどうしても会いに行きたい。高校に行ったら全然会えなくなるなんて、そんなの嫌だから。

……どうやったらOKを貰える……？みんなですって言ったら、大丈夫かな……。

伏せていた視線を再び上げて口を開きかけた時、高瀬君が視線は私から逸らしたままで口を開いた。

「俺……高校行ったら野球部に入るし……。そしたら多分練習が忙しくて、遊んでる暇なんて殆んど無いと思う。でも……。」

何故か彼は、そこで一旦言葉を切った。そして再び考える様な素振りをする、私にふっと視線を向けて言った。

「……でも、もしそれでもいいって言うなら、いつでも来ればいいよ。」

「……………行く！絶対に行く！！」

会いに来てもいいって、高瀬君が言うてくれた……！どうしよう……  
凄く嬉しい！！

高校が離れてしまっても、また彼に会えるんだ。会いたくなったら会いに行つていいんだ。

「いつになるかまだ分からないけど、絶対に会いに行くね。」  
嬉しくて嬉しくて満面の笑みでそう告げた私を見て、高瀬君はち

よっと照れ臭そうな表情をして、そしてこくと頷いた。

幸せな時間は、終わりを迎えようとしていた。

自転車の脇に立つ高瀬君に何て言ったらいいのかわからなくて、私は考えた末

「野球、頑張つてね。」

と告げた。

「ありがとう。」

と高瀬君は微笑み、そして

「じゃあ……。」

と言つて自転車にまたがった。

“サヨナラ”という言葉を、どうしても言いたくなかった。『会いに行く』『来ればいいよ』つて、さつき言い合つたけれど、それは本当に叶うかわからない不確かなもの。

もしここで“サヨナラ”を言つたら本当にずっと会えない様な気がして、私は高瀬君の別れの言葉にこくと頷く事しか出来なかった。

自転車に乗つて去つて行く彼をじつと見つめる。今度いつ会えるかわからない彼の姿をずっと見ていたい。でも寂しさの所為で涙が浮かんで、彼をしつかりと見る事が出来ない。

もし今高瀬君が振り向いたら、私の泣き顔を見る事になるだろう。でももう高瀬君に泣き顔を見せたくはない。

幸せだった一日が泣き顔で終わるのは嫌だった。だから私は高瀬君を見る事を諦めて、彼に背中を向けた。

大丈夫だよね……？今高瀬君の姿が見えなくなつても。私達、また会えるよね……？

「山口さん……。」

後ろから、高瀬君の声が聞こえた。私はどくと心臓を波打たせ

て、慌てて涙を拭って高瀬君の方に振り返った。

高瀬君は少し離れた場所で、自転車から降りて私を見ていた。そして私が振り向いたのを確認すると

「俺、電話とかメールとか苦手だけど…、絶対にするから！それから、部活であんまり会えないかもしれないけど、休みでこっちに帰って来た時は連絡するから！だから、また絶対会おうな！」と、大きな声で告げた。

せっかく拭った涙が、また溢れそうになった。でもそれは、さっきの寂しい涙とは違う、嬉しくて幸せな涙。

私はやつとの思いで涙を堪えて

「私も！絶対高瀬君に会いに行くから！」

と最高の笑顔を彼に向けた。

「じゃあ、またな！」

そう言って高瀬君が大きく手を振る。

「うん！またね！」

私もそう言って、高瀬君に手を振り返す。

『またね』。

それは、また会おうという約束の言葉。約束を交した私達は、絶対にまた会う事が出来る。

確信に満ちた気持ちを抱きながら、私は高瀬君の後ろ姿を見つめ続けた。高瀬君の姿が見えなくなるまで、ずっと、ずっと。

帰り道。私は楽しかった事を思い出しながら、一人歩いていた。今日高瀬君と一緒にいられて幸せだった事。それから中学に入って高瀬君と出会えて、嬉しかった事や楽しかった事。

「沙和？」

突然声を掛けられて、私は後ろを振り向いた。

「お兄ちゃん。」

そこには今帰って来たのか、朝家を出ていった時と同じ服装をしたお兄ちゃんが立っていた。

「どうだった？」

お兄ちゃんが私に近づいて、そう尋ねた。何を聞かれているのか…それは分かったけど、でも何から話していいのか分からなくて、私は

「うん…。」

とだけ言って、視線を落とす。

「…お前、大丈夫か？何か泣きそうな顔してるけど。」

「え…？」

お兄ちゃんに言われるまで気付かなかった。自分がそんな顔をしていた事に。

今まで楽しかった事を考えていた筈なのに何でだろう…。お兄ちゃんの顔を見て緊張の糸が解けたのかな…。

お兄ちゃんは心配そうに顔を覗き込むと、私の頭に手を乗せた。そして髪の毛をぐちゃぐちゃにする様にして、頭を撫で始めた。

…高瀬君にも、こうやって頭を撫でてもらったな。彼の手は、もつともつと優しくあったけれど。でも同じような温かい手で…。

その時の事を思い出して、涙が零れそうになった。でも、絶対に泣いちゃ駄目だっと思って思った。

高瀬君と交した約束。『また会おう』という二人だけの約束。もし泣いてしまったらそれが台無しになる様な気がして、私はきゅつと唇を噛んだ。そして

「止めてよ。髪の毛ぐちゃぐちゃになっちゃうじゃん。」  
とお兄ちゃんの手から離れて

「お兄ちゃん、私、大丈夫だよ。」  
と、出来る限りの笑顔をお兄ちゃんに向けた。

空には月が薄らと姿を現していた。暗くなりかけた空を見上げながら、私は高瀬君の事を考えた。

住む場所は離れてしまっけど、私達は本当に離れ離れになる訳じゃない。何処にいたって同じ空を見る事が出来る。それに……。

きっと心は繋がっているから。そして私達は絶対にまた会えるから。

「置いてくぞ。」

お兄ちゃんに促され、私は上に向けていた顔を前に戻した。そして

「ちよっと待ってよ。」

とお兄ちゃんに言って、そのまま家に向かって駆け出した。

～E N D～

## 約束 最終話 (後書き)

『恋の基準値』を読んで頂きまして、本当にありがとうございます！私にとって初の長編となるこの作品を最後まで書けたのは、温かい言葉をかけて下さった方や、読んで下さった皆様のおかげです。本当にありがとうございます。また番外編など書きたいな、と思っております。近いうちに投稿するか…。そちらも覗いて頂けたら幸いです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1707e/>

---

恋の基準値

2010年10月8日13時36分発行